赤松中学

緋弾のアリア XVI

Aria the Scarlet Ammo

星の砦の禾狼（ジェヴォーダンの）

MF文庫J

緋弾のアリア XVI

Aria the Scarlet Ammo

星の砦の禾狼（ジェヴォーダン）

赤松中学

MF文庫J

緋弾のアリアXVI

星の砦の禾狼（ジエヴォーダン）

赤松中学

口絵・本文イラスト●こぶいち

Contents

1弾 鈍色の挑戦者（チャレンジャーX）
2弾 イ・ウーの臆病者（Lisa Avé du Ange）
3弾 退路の果てにて（ブーターンジェ）
4弾 颱風の中の魔剣（かぜ）
5弾 遠山キンジは2度死ぬ
6弾 成層圏より愛を込めて（ストラトスフィリア）

1弾　鈍色の挑戦者（チャレンジャーX）

メキッ……バキ、バキッ……ッ……！

ガス燈の上で抜刀した、『妖刀』の体から――

生ゴムを引き絞るような、怪音が上がっている。

その異音と共に、プロレスラーが全身を筋肥大させるように――ブリュッセルの夜空に浮かぶその姿が、一回り大きくなっていく。

それだけじゃない。

妖刀のロングコートからは、黒い炎のようなオーラが発散され始めた。

闇と同化していくようなその姿の中で、俺を見据える右眼だけが緋色に輝いている。

（コイツは、何者なんだ……！）

超能力者寄りの存在である事は分かるが、パトラやヒルダとは物が違う。

妖刀から伝わってくる圧力は、今まで体験した事のないもの。

言うなれば、まさに、怪人……！

「今夜お前は、地獄で眠る」

そう言った妖刕が、親指で喉笛をカッ切る仕草を見せてくる。
そして、鈍色に光る双刀を鋏のように――X字に、構えた。
裏通りの物陰にいたドブネズミが、妖刕のケタ外れな殺気に逃げていく。
俺も……一目散に逃げ出したい気分だぜ。
だがそれはできない。今の俺はヒステリアモードでも何でもない、ただの俺だ。背中を見せた途端、飛びかかられて首を刎ねられる。
こうなっちまえば――
（武偵憲章5条、先手必勝を旨とすべし……だッ！）
――バッ！　俺は逆にベレッタをクイックドローして、狙いもそこそこに妖刕を撃った。
ガス燈の上にいる妖刕のバランスを崩させて、隙を作って逃げる。
そのつもりだったが……
――ギンッ！　パリンッ――
という音に続いて、辺りが一気に暗くなった。
その寸前に見えた。妖刕は俺が発砲する前に刀を傾けて――
鍔で殴るようにして、弾丸を下に弾いたのだ。

その弾は妖刕の足下のガス燈を割った。
今のはおそらく……いや、絶対、偶然じゃない。妖刕は意図的に闇を作り出した。そう見るべきだ。俺が銃弾撃ちで出来るような事を、ヤツは刀で出来るんだ。
「……ッ……」
ここを敢えて暗くしたという事は、妖刕には暗視能力もあると見て間違いない。
さらに不利になったぞ。ここで戦い続けることが。
（だが、妖刕。お前の刀は――2本しか無いッ！）
出し惜しみは無しだ！
とばかりに俺は拳銃のセレクターを『三点バースト∴』に切り替えて――ババッ！　バババッ！
マズルフラッシュで明かりを取りながら、退がりながら、紅く光る妖刕の右眼を目印に3・3の6連射を見舞ってやった。武偵法9条を守る習慣で、やや下方を狙いながら。
超音速の9㎜パラベラム弾は、ヤツの胴体に全弾命中したが――

そこからは、ボスボスッ、というくぐもった音が上がっただけだ。
ガス燈から叩き落としてやるつもりだったのに、ヤツは軽く上半身を揺らしたのみ。
（当たってるのに、効かない……!?）
衝撃分散型の防弾コートか。いや、それでも着弾の衝撃をあそこまで消す事はできない。
多分……あのコートが発生させる黒いオーラに、超常の力で身を守る効果があるんだ。
その時、闇に光るヤツの右眼が――
「……？」
不可解そうに、眇められたのが分かった。
ダメージを受けた感じではなかったが、なにやら視線を一時的に虚空に固定するような仕草だ。放心するように、数瞬、何かを考えている。
――予定とは違う形でだが、ヤツに隙ができた事には違いない。
（逃げるぞッ……！）
と、俺が道を蹴った瞬間――

妖刕は、俺が逃げようと思った方向を俺より先に見た。
さっきの刀での銃弾返しといい、なぜ分かるんだ！
ヤツは俺の行動を、何らかの力で予測しているのか!?
――サァッ――
黒ずくめで影のように見える、妖刕が――音も無くガス燈の柄を蹴って、旋風のように身体を回しつつ着地してきた。俺の走ろうとした先、10mの所に。
「……ッ！」
「――炸牙」
妖刕の声が聞こえた次の瞬間、バガァァァァァンッッッ――!!!
横薙ぎに振るわれた刀から炸裂音が上がり、俺は声を上げる事もできず――
真後ろに、何メートルも吹っ飛ばされた。
仰向けにブッ倒れた俺に、ガラガラと石畳の破片が降る。
そして、ガシャ、ガシャ、と……
扇形に破壊した道を踏み鳴らし、妖刕がこっちへ進んでくる。
「安心しろ。炸牙は距離さえ空いてりゃハエも死なねえ技さ」
ヤツの刀に巻き付くように、白く、微かな水蒸気が上がっているのが見える。

（……い、今のは……『桜花』……ッ？）

俺がナイフでやる桜花に似た、その上位版ともいえる未知の超音速斬撃だ。

それを、中距離でやられた。

俺はその直撃を食らうまでもなく、衝撃波に吹っ飛ばされたんだ……！

「あ……ぐッ……」

俺は、ノドを上がってくる血を吐き出しながら……少し大げさに悶絶する。

うつ伏せになり、苦しんで腹を押さえているように見せかけて――

制服の内ポケットに隠し持っていた、武偵弾を手に取る。

手触りで判別できるようになっているそれは、煙幕弾。こいつを手動で炸裂させて――

「――煙幕なんか張ったところで、お前が動き難くなるだけだぞ」

なんで……分かるんだよ、コイツには！

今の発言には――二重の意味がある。煙幕を張ろうとしたのを見抜いただけじゃない。『煙幕を張ろうと、俺にはお前の動きが見える』とも言ったのだ。

妖刀は。

視えるんだ、妖刀には。

闇の中だろうと、煙の中だろうと――まるでレーダーのように、俺の動きが。

いや、さっき俺を追ってきた時の眼の動きはレーダー以上だった。戦闘機に搭載されるレーダー射撃管制装置のように、捕捉した敵の未来位置を予測する能力も持っている。

妖刀は――肉眼ではない何らかの感覚で、俺を追えるんだ。

（きっと、あの右眼……！）

妖刀は時折――今も、視線を一時的に虚空に固定した。かなめやジーサードがHMD・テラナを使用していた時に似た仕草だ。

ヤツには、物理的な視界以外の何かが見えているんだ。もしかするとコンタクトレンズ型のディスプレーか何かを着装しているのかもしれない。

あの紅い右眼さえ、潰せば――おそらく、その能力は失われる。

見るからに業物の双刀や、あの超常のコートをどう攻略するべきかは分からないが……まずは、目だ。あの目を狙った戦法を組み立てるんだ。顔、それも片目を潰す事になるが、遠慮はしないぜ。ヤツは男だし、俺の命を取りに来てるんだからな。

という俺の企みすらも読み取ったかのように――ドウッッッ！

妖刕は、倒れた俺の胴を黒いブーツで蹴り上げた。

「――ッ！」

俺の体は煉瓦の壁にバウンドしつつ、２m以上打ち上げられて――グンッ！　と、そのまま宙吊りにされる。

ヤツがX字に構えた妖刕、その峰と峰で首を挟まれて……首吊り状態にさせられたのだ。

「ぐッ……あ……！」

これは……プロレス技でいうところの、ネックハンギングツリー……！　その双刀版だ。

身動きが、取れないッ……！

「――刃鋏樹。逃げようとして刃ァ掴んだら、指がボトボト落ちるぜ。妖刕は剃刀より鋭いからな」

と言いながら、妖刕はこっちをジロジロ覗き上げてくる。

（俺の、顔を……確認している……のか……？）

そうして、しばらく経った時――リリッ、リリッ、リリッ、リリッ――

双刀の鍔が、赤い光を明滅させながら鈴のような音を上げ始めた。

それを合図にしたかのように、妖刕からの殺気が……

静かに、収まっていく。

「……影武者ってヤツか。よく似ちゃいるが、遠山の狂った強さまでは似せられなかったみたいだな」

――ドサッ。

双刀を外して俺を地面に落としながら、妖刕は――

どうやら俺を替え玉と誤解した様子で、仁王立ちしている。

ここは……乗っておこう。俺をダミーと思っているのなら、そのフリで話す。

悔しいが、不利な状況のまま戦い続けても意味はないからな。

「なぜ……遠山を狙うんだッ……」

倒れたまま、俺はニセモノの演技でそう尋ねる。

「自衛のためだ。ヤツは俺たちの命を狙ってるんでな。今殺しておけば、後で殺しやすくなる」

自衛……だと？

俺は、こんな怪人を狙った覚えはないぞ？

それに、どういう意味だ？　今殺しておけば……後で殺しやすく……？

「本物の遠山キンジに伝えておけ――『もう、なにもするな』と。特に、藍幇には決して関わらせるな」

覆面のようなフードの中から、不可解なセリフを続けた妖刀は――

（藍幇の関係者か？　一味という感じじゃないが……）

眉を寄せる俺をよそに、下げられた双刀の鍔から鳴る音が、リリッリリッリッ……

赤い光の点滅と共に、リズムを速めている。

それを聞いた妖刀は、ひゅんっ、と2つの輪を描くように双刀を回して納刀した。

それで鍔の音が止み、辺りが……静かになる。

「――本物に早く伝えるんだぞ、偽キンジ。お前ももうすぐ死ぬみたいだからな」

そう言ってこっちに背を向けた妖刀に、俺は倒れたまま顔を向ける。

「俺が……もうすぐ、死ぬ……？　呪いでも掛けたつもりか？」

「違う。表示が――死相が出てるのさ。今月、お前は死ぬ。１００％、絶対にな。まあ、身辺整理でもしとけ」

死神のような事を言い残し、妖刀は――

銀バックルのブーツで石畳の破片を踏みながら、立ち去っていこうとする。

「……何者なんだ、お前は……」

ようやく上体を起こしながら、俺がその背に問いかける中――

「――ただの高校生だ。ちょっと変わった、荒っぽい学校のな」

俺のようなセリフを最後に、妖刀は……闇に、消えていった。

（……）

しっかり……伝えておいてやるぜ。

お前が言っているのであろう、ヒステリアモードの俺にな。

――今は、不覚を取った。

だが、ヒステリアモードなら。

ヒステリアモードでなら、俺はお前を斃せるハズだ。

あの圧倒的な戦闘力を見せられてもそう思えるのは、妖刀が未熟だから。

ヤツも、それなりに場数を踏んでるようだったが――

俺より戦闘経験が少ない事は、明白だった。

武偵や傭兵といった戦闘従事者は、ベテランになればなるほど自分の長所・

短所を敵に隠すものだ。知られてしまうと、再戦の時、圧倒的に不利になるから。

だが、妖刕はそれがまるで出来てなかった。

丸見えだった、と言っても過言ではないほどに。

まずは戦いながらも気づいた、あの紅い右眼の性能。

そして何より、時間――妖刕は、撤退が早すぎた。最初っから決着を急いでいるような空気さえあった。抜刀から2分ほどが過ぎ、鍔が鳴り始めた頃には……俺をニセモノだと思い込む、早とちりの判断ミスもした。2分30秒辺り――あの鍔鳴りが速くなってからは、ヤツは手仕舞いにしようという意識の元に動いていた。それが見え見えだった。

つまり――

ヤツは超能力者同様、ガス欠を起こすタイプ。

最初から自分で「3分」と宣言していたし、多分、そのぐらいしか全力では戦えないのだろう。口の軽さが災いしたな、ウルトラマン。

（分かる以上、対策の立てようもあるんだ）

年齢や体調、発動状況にもよるが――

対するこっちのヒステリアモードは30分、1時間と保持できるものだ。

（見てろよ、妖刕。お前の声と顔……の上半分は、しっかり覚えたからな）

遠山家の家訓にもあるんだ。若射須射――弓を引かれたら、弓を引き返せ。

アリアには撃たれても撃たれっぱなしの俺だが、妖刕、お前は男だ。狙われたからには、狙い返してやる。今すぐでなくても、何年後になろうとも、やられた事はやり返す。

――恨み晴らさでおくべきか、ってヤツだ。

ただ……1つだけ今夜、お前に会えて良かったと思える点は……

俺以上に、人間をやめてる高校生がいた。それを知ることができた事だな。

クソッタレ。

刀での『サクガ』の全身打撲よりも、『バチョウジュ』で頸部動脈を痛めつけられた事よりも……妖刕本人による変則トーキックのダメージの方が深刻だった。

装備も含めて65kgはある俺を、2mも打ち上げる蹴りだ。伏臥姿勢だったお陰で脊椎が蹴り折られなかったのは不幸中の幸いだが、そのクッション代わり

になった腹部には――激痛が残っている。
妖刕のキックはまるで誰かに『ここを蹴れ』とガイドされたかのように、的確に脾臓・腎臓打ちになっていた。しばらくは血のションベンだなこりゃ。
口元を拭って立ち上がった俺は、
（ジャンヌ、は……？）
俺を妖刕の所まで連れ出した、ジャンヌの姿を探すが……
路地の角を曲がった先は、行き止まりになっていた。
ガス燈を割られたせいで暗くてよく見えないものの、誰も……いない。何も、無い。
足下に、ゴミや砂が落ちているだけだ。吹きだまりって事か。
（……妖刕に遭遇したことを、みんなに伝えないと）
痛みを堪えてポケットから取り出した携帯は……サクガで破壊されていた。
妖刕は、携帯も視えてたのか？　あの紅い眼はレントゲンかよ。
オペラ座から漏れ聞こえる独唱曲を背に、俺は絵本の中のような大通りにヨロヨロ戻る。
少し歩くだけでも、左の横っ腹が痛い。すぐにでも病院に行きたいほどだ。
だがベルギーじゃ勝手が分からん。入院するためにも、仲間と合流しないと。
と、そこに……どんっ。
（……痛ッ……！）
道を走っていた白人の女が、すれ違いざまにぶつかってきた。よりによって、蹴られた左脇腹に当たる形で。てめえ……！
フランス語ができないから文句の言いようもないので、ただ睨みつけると――

ぶつかった女は謝罪の一言も無く、そのまま走り去っていくところだった。
スカーフで金髪頭を隠し、なにやら大量に衣料品を抱え、通りを逃げていく。
女が走ったあとには、道に血痕が残っている。
ケガをしているようだ。多分……泥棒か何かだな。
だが、今はコソ泥ごときを追っている場合じゃない。
と、俺は女に背を向け、ワトソンたちのいるホテルへ急ぐしかなかった。
道を戻るにつれ、眷属の襲撃は妖刕1人によるものではなかった事が分かってきた。

（……火……だ！）

町の一角――というか、俺たちが泊まっていた辺りで黒煙が上がっている。

ヨタヨタと走って辿り着いたそこは――

チクショウ。やられてるぞ。

俺たちが泊まっていたホテルが火災を起こして、消防車が集まっている。

俺たちの居場所が、誰か――師団にいるスパイから漏れていたんだ。

路上ではメーヤが消火器を手にしていたが、もう消化剤は切れてしまっているようだ。

「トオヤマ！」

少し煤けたワトソンは、俺の服が戦闘で汚れている事に気付いて駆け寄ってくる。

「キミもやられたんだな。ボクらも襲われた。何者かに、パンツァー・ファウストを撃ち込まれたんだ。窓から銃撃して追い払ったけど、追撃はできなかった。敵の姿もきちんと確認できてない。消火の方が先決で――」

ワトソンの状況説明を聞くのもそこそこに、俺が……

「――ジャンヌは？」

まずその点を確認すると、ワトソンは首を横に振った。

「姿が見えないんだ。だが、ジャンヌのパスポートはキミの物と一緒に置き去りにされていた。ひょっとすると、拉致されたのかもしれない。あるいは……」

そこまで言って、続く言葉を自ら切ったワトソンだが――

『あるいはジャンヌが裏切り者で、拉致されたと偽装してるのかもしれない』

そう言いかけて、やめたんだろうな。

――師団に潜む『裏切り者』が、誰なのか。

それは軽々しく口にしてはいけない話題だ。

その疑惑は、チームの結束にヒビを入れる。

特に、ジャンヌ・ワトソン・俺の新コンステラシオンは、今月いきなり組まされた急造チームだ。バスカービルと違い、あっけなく分裂しかねない。

そうなれば――チームの戦力は半減、いや、3分の1以下になってしまうのだ。

ただでさえ圧されている欧州戦線、その一角を担うコンステラシオンが分裂したら……俺たちの全滅はもとより、極東（FEW）戦役自体をひっくり返されかねないぞ。

それが分からないワトソンじゃない。とは、思うが――
いま口を滑らせかけたセリフから見て、この場にいないジャンヌを少なからず疑ってる事は確かだろう。俺もジャンヌについて、ヘタな事は言えなくなっちまったな。
俺はそう考えながら、腹の負傷は痛くないフリをしつつ……
火事の煙を避けるように、通りにいるメーヤの方へと後退する。
不幸中の幸いで、火事は延焼する事はなさそうだった。消防隊によって、もうほとんど消し止められている。数少ない他の宿泊客も、みんな無事だったらしい。
「敵は……撤退したようですね」
カラの消火器をゴミ捨て場に置いて、メーヤは少し焦げた法衣の裾を払う。
そして手と手を胸の前で組み、俺たちに振り向きつつ――
「先に申し上げておきますが、私はジャンヌさんを疑いません」
いきなり、キワドイ事を言いやがった。
それ、言外で『遠山さんとワトソンさんは疑ってるかもしれませんが』って言ってるぞお前。いや、まあ、この状況下じゃそう思われても仕方ないけどさ。

だが……師団に裏切り者がいる、という事については……
メーヤも、気付いてはいたんだな。
「私の『強化幸運』は、神・イエス・聖霊のみならず――友軍を信じる事で、その加護を強めます。友軍を疑う行為は、その加護を大幅に減らしてしまうのです」
ちゃっちゃっ、と、メロンのようにデカい胸の前で十字を切ったメーヤは――

―

それ以上その件については考えないつもりのようだ。
そういう思考停止は、盲信、狂信、って言うんだろうが……
今夜に限っては、それでも構わない、そして語らないつもりだ。
メーヤは、中立。師団の結束のためにも、ハッキリそう意思を示してくれたのは助かる。
だが――
「トオヤマ、ずいぶん服が汚れているけど……誰かと戦ったのか？」
このワトソンは、既にジャンヌを疑っている。
俺がジャンヌに連れ出された事を知ったら、疑惑を固めるだろう。

事実を明かせない事は悔しいが、ここは――ワトソンのジャンヌへの疑いを、固めない方がいい。

そう判断した俺は、

「……『妖刀』に襲われたんだ、俺は。生きて逃げてこられたのは、運が良かったとしか言いようがない」

2人の意識を逸らすキーワードを最初に置き、ジャンヌの話を抜いて情報を共有した。

その言い方は、それなりに功を奏したようで――

「……！」

「ま、間違いないのかい、それは」

長いまつ毛の目をまん丸に見開いたメーヤは元より、ワトソンも飛び上がらんばかりに驚いた。

2人とも完全に、妖刀の件に意識が向いてる。

よし、このままジャンヌの件は棚上げさせよう。

「――ああ。玉藻の言ってた特徴通りの日本人だった。顔を隠すフードからロングコートまで黒ずくめで、体格は初め中肉中背だったが、戦闘前に筋肉を肥

大させた。右眼を紅く光らせて、黒い陽炎みたいな防性の力場で体を覆う――怪人だ」

その話から、俺が本物の妖刀と遭遇したと分かったらしく……

「一刻も早く……逃げましょう！　妖刀・魔剣に襲われたら、ここが全滅します！」

メーヤが、一気に危機感を強めている。

ヨーロッパは直に妖刀・魔剣の被害に晒されていたから、ヤツの恐ろしさもよく知っているのだろう。

「――ジャンヌさんとは別行動になってしまいますが、どこかに待避しないといけません。バチカンにも妖刀出現の旨は伝えます」

「その方がよさそうだね。このホテルにはもう居られなさそうだし。ボクもリバティー・メイソンに連絡する。安全な場所に心当たりがあるんだ」

そう言ってメーヤとワトソンは携帯を取り出し、各々の組織に連絡を取るのだった。

その後、夜陰に紛れつつ俺たちが移動した先は――

元いたブリュッセル中央駅付近から離れた、ディアマン通りという高級住宅街だった。

左右の壁をピッタリくっつけた家並み、その中に……見事なオレンジ色の煉瓦で出来た『ブリュッセル石工組合会館』という建物があり、ワトソンがその呼び鈴を鳴らす。

そしてインターホンと『C』「ざくろ石」『P』「歓迎されざる者」『A』「彼は絶望している」『X』「異端」などと、ラテン語らしき合言葉をやりとりした。

すると……ビッ、という電子音に続いて、ガチャン。黒い扉が解錠される音が響く。

「さあ、早く」

先導するワトソンと共に入った、館内は——

立派な大理石の床石を敷き詰めた、ホールだった。

壁際に展示されていた紫水晶の標本にワトソンがまた何か話しかけると、壁と見分けの付かなかった隠し扉が開いて……その奥には、

「おお、ワトソン君、ケガは無いか？」

カーキ色のラム革トレンチコートを着た、長身の白人男性がランタンを手に待っていた。

この二十歳ぐらいの美男子は、見たことがあるぞ。

去年、空き地島での宣戦会議にリバティー・メイソンの大使として参加していた男。

切れ長の目と高い鼻が映画俳優みたいな、シャープな印象の優男だ。

「大丈夫だよ、カイザー」

ワトソンが歩み寄ると、男——カイザーという名前らしい——は、ワトソンを上から下まで見た。すごく、すごく心配していた様子で。

「それとカイザー、今は日本語で頼むよ。彼が英語を介さないんだ」

そう言ってワトソンが俺を示すと、カイザーは「分かったよ、ワトソン君。君が無事で何よりだ」などと頷いてから……その濃紺の目で俺を見てきた。

「写真で見た事がある。君はトオヤマ・キンジだな。まずは安心したまえキンジ。ここはリバティー・メイソンの隠しロッジなのだ」

……お前、なんでワトソンには君づけで俺は呼び捨てなんだよ。

「紹介するよ。彼はカイザー。リバティー・メイソンの殲魔士、ボクの先輩な

んだ」

紹介されてるのに、カイザーはワトソンの横顔ばっかり嬉しそうに見てる。

どうも……このイケメンはワトソンに対してだけ、えこひいき的に優しいらしいな。

部下だからかもしれんが、それ以上にワトソンを気に入っている感じだ。

「諸君――消防・警察への対応は我々に任せてくれ。どちらにもリバティー・メイソンのメンバーが多数いる。それと、そちらはメーヤ・ロマーノと見受けたが？」

やっと改めてこっちを向いたカイザーの言葉に、奥から……

「メーヤさん？　メーヤさんもいらしているのですね」

ブロンドのロングヘアーに白いレースのヴェールをかけた、二十代半ばぐらいの美人が現れた。

金糸の刺繍はメーヤより多いものの、ほぼお揃いの純白の法衣から分かる。

バチカンのシスターだ。

小粒な体をした、メーヤ以上に柔和で、おっとりした印象の彼女は……

白杖を突いており、目でこっちを見ない。視覚障害者らしい。

「ローレッタ様……！　偉大なる祓魔司教に拝謁でき、恐悦です。今宵は闇討ちとはいえ、反撃しきれず壊走に至りました。どうぞ神罰をお与えくださいませ」

「とんでもない。神罰を頂戴すべきは私の方です。私に戦う力が無いせいで永らく前線をメーヤさんにお任せしてしまい、心苦しかったのです」

恐縮しまくりのメーヤを、上司らしいシスター――ローレッタさんは、抱き寄せて労った。それにメーヤも、イタリア式に彼女を抱きしめて返礼している。

ちなみにローレッタさんも、メーヤに匹敵する豊かな胸の持ち主。

その2人が思いっきり抱き合って、計4つの胸と胸がむんにゅりとおしくらまんじゅうし合う光景は……なんというか、スゴイな。

2人とも聖職者だと思うと、妙な背徳感もある。ヒス的には要回避な光景だぞ。

「ですがローレッタ様、このような危険な場所へ御自らおいでなさるなど――なりません。すぐ市内の教会へ……いえ、ブリュッセルはもう危険です。どうか北のアムステルダム・聖ニコラス教会までお逃げください。ブリュッセルには、妖刕がいるのです！」

メーヤは慌てた様子で、ローレッタさんに警告している。
そこに出てきた『妖忝』という単語には、カイザーも面食らって振り向いた。
だが――
メーヤから一歩離れたローレッタさんは、動じない。
「うろたえてはなりません、メーヤ。この程度の事、86年前の戦役に比べれば危機と呼ぶべくもありません。何より口ーマ――バチカンは、未だ無傷なのですから」
失礼ながら、戦闘能力がない事が一目で分かるローレッタさんだが――
その毅然とした声には、メーヤだけでなく俺まで勇気づけられてしまう。
年長者な事もあるが、頼もしいムードの女性だ。彼女とメーヤは、玉藻とバスカービルみたいな関係なんだろう。玉藻より1兆倍ほどしっかりした上司に見えるけど。
だが、カイザーは今の発言が一部気にくわなかったらしく……
「バチカンさえ無事なら、フランスやベネルクスは奪われてもいいという事か？」
イラッときた感じで、ローレッタさんに横槍を入れている。
「そう申してはいません。私たちがここにいて、プロテスタント――敢えて異端とは呼びませんが、そのあなた方とも共闘している事が証明です」
「私には、そう聞こえたのだ。カトリック原理主義者よ」
おっとり顔をそれでもムッとさせたローレッタさんと、ケンカ腰のカイザー……
宗教上の理由もあるのか、バチカンとリバティー・メイソンの歩調は合ってないようだ。
戦役のまっただ中だってのに、仲違いしてる。まるで旧日本軍の陸軍と海軍みたいだぞ。
（どうりで……ヨーロッパ戦線が圧されてるワケだぜ）
途中から英語で言い争いを始めた2人をよそに、こっそり自分で左脇腹を触ってみると……痛み、熱を持つそこは、ひどく腫れてきていた。
暖炉にあたりながら、俺たちはソファーやイスに掛けて緊急の欧州師団会議を開いた。
国境や通信会社を複雑に経由するヨーロッパの通信ネットワークは、情報が

どこをどう行き来しているのか怪しい部分もあるので――今は、東京や香港は呼び出せない。

「師団の情報が……漏れていたのですか」

「スパイがいた、という事か」

いま話し合えば当然そこが話題になるとは思っていたが、ローレッタさんとカイザーはワトソンが語るその話に食いついてきた。

「ボクは内通者の存在を確信している。ボクたちの移動や所在は、眷属に筒抜けなんだ」

「では、ここもか」

「……そうとは思わないよ。尾行の気配は無かったから」

「――ジャンヌを最後に見たのはいつだ」

ワトソンの話からすぐに、カイザーがそこを嗅ぎつける。鋭い男だ。

ジャンヌが師団の居場所を眷属に連絡していたのであれば、はぐれた後の情報は眷属に入らない。つまり、ここはバレていないというワトソンの見立てと矛盾しないからな。

「……ボクは、ホテルで部屋割りを決めた時に見たのが最後だよ」

「私は……同じ部屋に泊まっていたのですが、襲撃を受ける少し前に見たのが最後です。ジャンヌさんは『ちょっと外に行く』、と言い残して外出されました」

ワトソンとメーヤがそれぞれ証言すると、カイザーは切れ長の眼をこっちに向けて――

「――キンジ。君はいつジャンヌを最後に見た？」

……来たぞ。

ここが運命の分かれ道だな。

ジャンヌと、そして俺の。

（俺とジャンヌが2人で食事に出たのは、誰にも見られてなかったようだが……）

俺は、疑いたくない。

もう仲間を疑うのはやめた……って、コンステラシオンのみんなに助けられた時に決心したしな。

だが、仮定としてだ。

もしジャンヌが裏切り者だった場合、ここで俺が事実を話す事はジャンヌの

身を危険に晒すことになる。
東京で玉藻に聞いた話によると、妖刕はいまいち眷属の意のままに動かないらしい。
妖刕が俺を殺さなかったのも、ヤツの勝手な思い違いによってだ。
だがそれは、眷属からしてみると失態だろう。
少し手前味噌ではあるが、この俺を討ち漏らしたんだからな。
あの圧倒的な近接戦闘力を誇る妖刕は今後も使うとしても、誰かしらを処罰しないと、眷属内での収まりがつかないだろう。
そうなると——ある種のスケープゴートとして、ジャンヌが殺される可能性がある。
（……それに……）
内通者は1人とは限らない。
もし『ジャンヌが裏切り者だと師団にバレた』という情報が眷属に行けば、その時点でジャンヌは用済みとなる。確実に消されるぞ。
ここは何としても、師団内に『ジャンヌは裏切り者ではなく、眷属に攫われただけ』という線を残しておかなければ。
だが、その方法は……
今の俺には、1つしか思いつかない。
それは——俺が、罪を被ること。
『裏切り者は遠山キンジだった』という事にすれば、当面ジャンヌから疑いの目は逸れる。
師団は『ジャンヌはキンジによって眷属の所へ連れて行かれた』という推察をするだろう。実際は逆だけどな。
「……」
黙っている俺の額に、痛みに滲む汗に混ざって冷や汗が滲んでくる。
実を言えば、俺は、ジャンヌの身を守るために……
少なからず最初から、罪を被るつもりはあった。
だからこの腹部の負傷も敢えて隠してきた。俺が妖刕に襲われたという話が狂言である可能性を、師団に残すために。
世間に知られる事なく活動をしているというリバティー・メイソンは、武偵高でいえば諜報学部に近い組織と思われる。そういう連中は、決まって尋問が上手い。

もし尋問されたら、事実を――
俺がジャンヌに連れ出された話を、せざるを得なくなるだろう。
「なぜ、黙っている？」
というカイザーの問いかけに、俺はそれでも無言を通す。
喋っちゃダメだ。ここは。
積極的にウソをついても、尋問スキルのあるヤツはそれをすぐ見抜くからな。
「私も訊きたくはないのだが――キンジ。こうなると君に訊かねばならない事が2つある。1つ。君はなぜ火災の時、たまたま、現場にいなかった？　2つ。私達は君が『不可能を可能にする男』だという事は知っているが、妖刕の強さも知っている。君はどうやって、あの妖刕の襲撃から生還したのだ？」
ここも……
ヘタに口を開かない方がいいな。
妖刕はヒステリアモードではない俺を、遠山キンジの影武者か何かだと思った。
ここでその説明はできない。ヒステリアモードは、俺の切り札。どこにスパイが潜んでいるか分からないような場で、その手の内を明かすワケにはいかない。

いんだ。
「……遠山さん……？」
メーヤが心配そうに、黙りこくる俺の方を見てくる。
ローレッタさんも、その見えない目をこっちに向けてきた。
「キンジ。改めて問おう。なぜ、妖刕は、君を見逃した？　事前に言っておくが、状況を鑑みるに――君は、自分が身の潔白を証明する必要がある立場である事を理解すべきだぞ。我々ヨーロッパの師団は玉藻を通じてアジア側の情報を得ているが、君は常に実戦部隊にいたそうではないか。つまり、誰よりも最新の状況を発信しやすい位置にいたのだ」
カイザーの口調と顔つきが、一気に厳しさを増してきた。
これは……圧迫尋問だな。
違法だが警察や武偵も往々にして行う、尋問の手法だ。
要は疑わしいヤツを1人1人脅し、あるいはブン殴っていって「すみません私です」と白状するヤツを探すという伝統的なやり口。怖くても痛くてもシロはネタが無いので吐く事ができないが、クロは吐くことができる。理に適っちゃいるが、非人道的な手だ。

だが、今の俺的には渡りに船だろう。
ここで俺が興奮状態にでもなれば、計画通り罪を被るところまではできる。
と、思ったのだが――
「カイザー！　キミは短絡的すぎる！　トオヤマは今までずっと、師団の一員として命を賭して戦ってきたんだぞ！」
興奮状態になったのは、まさかのワトソン君ちゃんだった。
「内通者はいるだろう、でも犯人捜しで仲間割れしてたら、それこそ眷属の思うツボだ！　今はまず内通者がいる場合の行動ルールを確認すべきで――」
元から短気なワトソンにキャンキャンと詰め寄られたカイザーは、さっきまでの鋭さを急に失い……
「ワ、ワトソン君。私はただ、キンジを、その、確認のために詰問していただけだ」
少し、というかかなり弱った表情になった。
薄暗い中でもハッキリ分かるぐらい、なぜか顔を赤くしつつ。
ていうか……
カイザーは、ワトソンを……

単に部下として気に入ってるだけじゃなく、好きっぽいぞ。あれ。
とはいえそれを気づかれないようにと、妙な距離感も保っているカンジだ。
（どうりで最初から、ワトソンだけ特別扱いしてると思ったぜ）
まあ、それは……そうなるだろうな。
ワトソンは実態は女だが、リバティー・メイソンでは男として通してるんだから。

カイザーは自然に生じた自分の感情を異常なものと捉え、隠してるんだ。
だがこの男も不器用なのか、隠してるのが見え見えだよ。そっち系には超人的な鈍さを誇る俺にだって分かっちゃうぐらいなんだから。
しかしワトソンは女なので、本当のところカイザーは正常なのかもしれん。
（あちゃー……ややこしい事になってるなぁ、そこ……）
俺は自分の立場はさておき、この残念なイケメンことカイザーに同情してしまう。
「キミは昔から、仲間を内偵する悪癖があるんだよな。カイザー」
一方、美少年に化けてるワトソンはワトソンで、まさか男（という事になっている）の自分にそんな悲劇が起きてるとは思ってない様子だ。カイザーに対して、遠慮がない。
「内偵？　私は、そんな事は……」
「昔ボクと初めて組んだ直後、ロンドン・ロッジに申請してボクの写真を手に入れたそうじゃないか。前に地下鉄に乗った時チラッと見えたけど、キミはその写真をパスケースに挟んでた。調査される側は、いい気持ちはしないものなんだぞ」

腕組みして眉を吊り上げ、クリクリした目で自分を睨んだワトソンに――

「……ッ……」

カイザーは切れ長の眼を見開いて、言葉を失っている。

（たぶんその写真は、内偵のためにもらったんじゃないと思うが……）

と思う俺だが、そうとも言えないらしいカイザーは、

「――ワ、ワトソン君ッ。その件は今の主要なテーマではない。その――遠山キンジだっ。彼の証言がまだなのだ」

改めて矛先をこっちに向け直してきた。ちょっと八つ当たりするようなムードで。

「キンジ。マッチポンプという言葉があるように、こういう状況では、最も活躍している人間が火付け役というケースもよくあるのだ。単刀直入に訊くぞ。君はジャンヌを眷属に売ったのか？」

この無礼な物言いは――

俺に圧力を掛ける以上に、この場の全員に緊張感をもたらした。

銃に喩えるなら、カイザーは今、引き金に指をかけたのだ。

「……そう思うかよ」

相手が男という事もあって、俺の口をついて出たセリフも……その指に力を入れさせるような口調になった。

だが、それでいい。

俺は、あの時のジャンヌの行動の真意を確認していない。

あれは、何かのマチガイかもしれない。

だから――今は、庇う。その腹はもう括ってるんだ。

――武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。

信じる。それは聞こえのいい、美しい言葉だ。

だからマンガなんかじゃ譫言のように、『信じる』『信じる』と信頼の大安売りが繰り広げられてる。

だが本来、信じるという事は高い代価が伴われる事もある行為なんだ。

これは兄さんの受け売りだが――信じるからには、裏切られる覚悟も要る。

（それでも……俺はもう、仲間を疑うのはやめたんだ。あのルクセンブルクで）

今はとにかくジャンヌとの合流を急ぐべきだ。そして、本人に話を聞くべきだ。真実がどうあれ、それを確かめずに仲間割れしてちゃ……勝てる戦いも、勝てなくなっちまう。負けつつある戦いなら、なおさらだ。

しばし、俺と無言で睨み合ったカイザーは――

「……ワトソン君。合わせてくれ」

目つきに切れるような鋭さを取り戻し、低く言った。

カキンッ――と、カイザーの小指の辺りで極々小さな音がした。見えないが、九分九厘刃物だ。視線から分かる、狙いは……俺の、頸動脈。

見た目からなんとなく想像はついてたが、本職は暗殺者だな。コイツ。

「よすんだ、カイザー……！」

「およしなさい、カイザー。もうそれ以上、味方を疑ってはなりません」

ワトソンとローレッタさんの言葉は、もう臨戦態勢のカイザーには届いていない。

――裏切り者を、ここで始末する。

その意志を固めたようだ。

だが、『碍』こと俺に返り討ちに遭う事を警戒してか、すぐには仕掛けてこない。

必勝・必殺のタイミングを窺っているカンジだ。

普通の高校生ならここでビビってスパッと殺られるところだが、そこは武偵

高で日常の1コマとして銃を撃ってくるアリアさんに鍛えられた俺だ。殺し屋の1人や2人、今さら怖くもなんともないね。アリアさん感謝します。

とはいえ、ここでヒステリアモードではない俺に出来ることといえば――

極めて低次元なやり口だが、だからこそ思いっきり意表を突けたらしく、

「よし、カイザー、それとメーヤ。よく聞け。さっき2つ訊かれたから、2つ教えてやる。1つ。ワトソンは女だ。もう1つ。カナは男だ」

――ビックリ情報を公開して、この場を煙に巻く事ぐらいだ。

「What!?」

「は、はいィ――ッ？」

「とととトオヤマ！　ちちち違うぞカイザー！　ボクはおとおとこのこ」

「まぁ、あのカナさんが？」

カイザー、メーヤ、ワトソン、ローレッタさんは――腰砕けになったり飛び上がったりキレたりほんわかマイペースをキープしたり、四者四様のリアクション。

どや顔で腕組みした俺は、すぐ左手でジャケットのボタンを外し、右手を内

ポケットに突っ込んで……さっき妖忝に使い損ねた煙幕弾を、いきなり手動で起爆させた。

――ボスッ！

俺のジャケットは内側から開き、空気と同じ比重の白煙が室内に撒き散らされて――「Gosh!!」とカイザーが悪態をついたが、もう遅いぜ。

これはここにもいるバチカンの関係者から貰った、イタリア製の高価な武偵弾。性能は折り紙付きだ。この場は改めて、そして一瞬で本物の煙に巻かれていく。

あとは窓をカーテン越しに撃ち割って、そこから逃げると見せかけて……ドアをそっと開けて、そこから消えさせてもらう。

これも、アリアが俺の部屋でキレた時に俺が煙幕手榴弾でよくやる手なんだ。いやー、まさかアリアに1日で2度も感謝する日が来ようとは。遠山キンジ史上、初の出来事だよ。

2弾　イ・ウーの臆病者

Lisa Avé du Ange

右も左も分からないブリュッセル、その住宅街を――夜陰に紛れて走る。

逃げたからには、スパイだと断定されても仕方ない。

つまり今の俺は、師団の全員から追われる身になったのだ。

（これも……『因果応報』ってヤツか）

多対一。追跡。強襲逮捕。

それらは、今までの俺が敵に散々やってきた事だ。

人にやった事が、自分に返ってきたんだな。

俺は追う側だったのが、逃げる側になった。しかも、逃げながら――

本当にジャンヌが裏切り者なのか？　そうでないなら、誰が裏切り者なのか？

その真実を見つけ出し、証明しなきゃいけない。言葉も分からないベルギーで、通訳となってくれる仲間も無しに、たった1人で。

こいつはムリゲーもムリゲー、超弩級のマゾゲーだぜ。しかもリアルに命懸けの。

ひょっとしたら、今までで一番の難関かもだよ。

「……」

白い息を吐きつつ、信号の色さえ日本とは微妙に違う深夜の交差点で……四方を見回す。

行き交う車、遠目に見える人影、こうなると周囲がみんな敵に見えてくるな。

実際、ヨーロッパにはその全域にリバティー・メイソンの会員がいる。

藍幇ほど大人数じゃないにせよ、それに準ずる監視力があると考えなければならない。

（まずは身を隠さないと。だが、どこへ……どっちへ逃げる？）

今の俺にとっては、眷属はもとより師団も敵だ。

今まで自陣だったブリュッセルが、いきなり敵のド真ん中になった。これならまだ眷属の勢力圏の方が安全なぐらいだね。

それなら、その発想で——と、俺は今の師団が一番行かなさそうな所へと駆ける。

それはさっき眷属に襲われたばかりの、俺たちが仮住まいしていたホテルだ。

煉瓦の街角から、さっきまでの火事場を覗き見ると……

もう火は消し止められており、水浸しの路上では数人の消防上たちが防火ヘルメットを脱いでフランス語で話し合っていた。

さっき見ていたから知っていたが、そこに停まっている消防支援車はウニモグRW1をベースにした4WD。タイヤがデカく、最低地上高の高い車だ。

消防上たちはどう見ても一般人で、隙だらけだったので……

（……ちょっと、相乗りさせてもらうぜ）

俺は足音を立てずに接近し、その消防車の下に潜り込む。

しばらくそこに隠れていると、他でボヤでもあったか——エンジンが掛かり、ウニモグが走り出した。俺はその裏にへばりつく形で、一緒に移動させてもらう。

これは武偵高じゃ1年で習う、『コバンザメ』。良い子はマネしちゃいけない乗り方だ。

緊急車両だけあって、消防車はかなりの高速で走る。だが、なんの。俺たちや授業じゃ車輌課の江戸川先生がカースタントみたいな運転をするトラックの裏に張り付かされたんだ。あれに比べりゃ、こんなのピクニックみたいなもんさ。

だが、少し進んだところで——

横目に見た車道が、青と赤の点滅灯に照らされてるのが微かに分かった。パトカーだ。

車の下からなのでハッキリとは分からないが、他の車が停車してるタイヤの列も見える。

（――検問だ。チェックを受けたらヤバいぞ）

これには肝を冷やしたが……消防車はさすがに停めさせられず、減速しただけで検問をスルーさせてもらえたようだ。

ここは、上手くいったな。『公的車両に潜む』という古典的な脱出法が。

時間から見て、さすがにこの検問が俺のために行われたものとは考えづらいが――仮にタクシーでも拾って移動していたら、見つかってはいただろう。

そうなれば、リバティー・メイソンに足がついていたかもしれない。いや、多分つく。藍幇がそうだったように、リバティー・メイソンも警察内に多数のメンバーを抱えているとかカイザーが言ってたしな。

逆にこの検問にかかった車の中に俺の姿が無かったとなれば、カイザーたちは――俺が徒歩で逃げているという誤った判断をする可能性も高まるだろう。

俺が逃げてから12分経つ。徒歩で逃げられる距離は1km圏内だ。だがこの消防車は既に道のり3km、直線距離で2kmは走っている。つまりここはもう、師団の捜査網の外なのだ。

念のため、もうしばらく相乗りさせてもらってから……

消防車が踏切で停車したところで、道へ降りる。

「……」

東京のように高層ビルが林立してる感じじゃないが、この辺はオフィス街らしい。

真冬の深夜とあって、街角に人けは少ないが……

遅かれ早かれ、リバティー・メイソンは聞き込み捜査もやるだろう。一般人相手にも、目撃情報は少ない方がいい。ヨーロッパじゃ東洋人は目立つしな。

（これも、古典的な方法だが――）

と、俺は駐車場に忍び込み……バタフライ・ナイフの柄をテコにして、リボンの紋章が彫られたマンホールのフタを開けさせてもらった。

この乾いたニオイと、独特の暖かさ……通信ケーブル敷設用の地下道だ。ツイてる。

下水道でも渡る覚悟はしてたが、これもメーヤの幸運強化のお裾分けかもしれないな。

煉瓦造りの地下道は、昔はそれこそ下水道に使われていたらしく……比較的広くて移動しやすいものだった。

入り組んでいるが、真っ暗闇ではない。

メンテナンスが適当らしく3個に2個は消えていたが、非常灯もついてる。

元が下水道だったなら、海や河川に繋がっているんだろう。人目の多い市街地を避けるためにも、この地下道を移動して大西洋方面へ向かうのが得策だな。

しかし……我ながら、堂に入ってるな。逃げ隠れ。

これも主にアリアのおかげなんだけど。

などと考えつつ、足下の傾斜を見て下流と思われる方にかなり歩いた所で——

（……ッ……）

俺の足が、止まる。

ちょっと崩れた煉瓦の道、その先を折れた向こうに——人の気配がある。

角の向こうだから視界には入っていないが、かなり接近しちまってるぞ。

向こうは非常灯のナナメ下にいるらしく、座り込んでいる影が見える。女だ。

（ケーブル工事の工員……って感じじゃないな）

こっちに気付いている感じはしないが、もし、この女がリバティー・メイソンの放った追っ手だった場合——俺の逃走経路が読まれてた事になる。となれば、あれを人質に取るぐらいの事はしないと、生きて地上に出る事すらできなくなるぞ。

（まずは、気付かれてるかどうか確認しないと）

そっとベレッタを抜いて……足音を殺しつつ……

武偵手帳から取り出した小さなミラーで、角の向こうをそっと窺う。

すると、そこでは——

（……？）

血まみれのブラウスを開いて座り込んだ白人女が、自分の傷を手当てしていた。

傷は、左脇腹。俺とお揃いだな。だが向こうは外出血もあるし、より重傷みたいだ。

女は盗品らしい簡素な医療器具と共に、何着もの服やカツラを自らの傍らに置いており……それらの一部に、俺は見覚えがある。

あの服は、さっき俺が妖刀にやられた後、路地でぶつかってきた女が持ってた物だ。

そう思って改めて見たところ、この女は間違いなくあの時の女だった。負傷してた点も一致する。

「んっ……」

小さく呻いて、自ら何針か縫合したらしい傷をサージカル・テープで塞いだ女は――

典型的な、北ヨーロッパ人だ。

それ自体が光を放っているかのような、天然ものの金髪。肌は抜けるように白く、瞳は翠玉色。線は細いが、前を開けたブラウスの中で白いレースの下着に包まれた胸は大きい。年は、俺と同じぐらいに見える。

だが、その外見の美しさを忘れてしまうほど驚かされたのは――

石の道に置かれたハンカチの上に、2発の弾が置かれていた事だ。

(盲管銃創から自分で弾丸を摘出して、縫合までしたってのか……!?)

銃を持つ以上、武装者は――余程のシロウトでない限り、銃創、つまり撃たれた外傷の応急処置が出来る。

だが原則それは他人、つまり撃たれた仲間や、自分が撃った犯人の手当てをする技術。

盲管銃創の自己手術だなんて、武偵高でも衛生科のSランクでなきゃ習わない離れ業だ。

この女は、それをムリヤリやってのけたらしい。

どうやら盗んできたらしいあの粗末な器具で。麻酔もナシで。

しかし……やはり、その手術は不完全なものに見える。出血量から見て傷は深い。重要血管や内臓も損傷してるハズだ。もっと専門的な医療機関で正式に手術しなければ、命に係わるだろう。

(……!?)

さらに我が目を疑う事に、摘出された2発の弾丸は、その口径と純銀被甲弾らしい輝きから、ワトソンが発砲したものに違いなかった。

ワトソンはホテルを襲撃された際、敵を撃ったと言っていた。

となると、コイツは――

（……眷属（クレナダ）……！）

ホテルを襲った、眷属の刺客だったんだ。

そいつが負傷して、俺（おれ）と同様に人目を避けて地下を下流方向へ逃げていた。

そしてここで力尽き、一旦（いったん）、自分を手当てすることにした……ってとこか。

女は弱ってはいるものの、意識は明瞭（めいりょう）なようだ。今は割としっかりした手つきで盗んだ服とカツラを選別している。それで変装して、師団（ディーン）の勢力圏から脱出するつもりらしい。

本来なら、ここでコイツを捕まえて師団にしょっぴけば大手柄（おおてがら）だったが……

今は俺も、その師団から逃亡中の身だ。

それに相手は眷属の攻撃手。どんな武器や魔術を持っているか分からないし、こっちも妖刀（ようとう）にやられて内臓破裂（はれつ）の疑いアリってぐらいの深手（ふかで）を負ってる。

ここは――気付かれない内に、そっと立ち去るべきだな。

と、一歩退（さ）がろうとした時……

チュー！

俺に踏まれかけたらしいネズミが鳴きながら床を、そして壁を走り上がってきて――

「うおッ……！」

しまった。

台場じゃネズミなんか滅多（めった）に見ないもんだから、つい声を上げちまったよ……！

「――！」

女の影が、身構えるような動きをする。

（見つかった……！）

――クソッ。

逃げようにも、この狭（せま）い路地（ろじ）で背中を向けて走ってたら射的のマトだ。

（こんな状況で、眷属と一戦交えなきゃならないのかよ……！）

俺は舌打ちし、バッ！

やむなく角から飛び出して、女に銃を向ける。

「――動くなッ！」

言葉が通じるかどうかは分からなかったが、威嚇（いかく）の意味も込めて鋭く叫ぶと

「……！　Kinji……遠山（とおやま）キンジ……！」

女はやはり眷属の一員で俺を知っていたらしく、長い睫毛の目を見開いて超ビビった。

そして……

「こ、殺さないで……！　お願いです……！」

流暢な日本語で……

命乞い……してきたぞ？

さらに、べたぁ。

女は、その場に土下座するように上半身を伏せてしまう。

開いた両手を前に出し、何も持ってない事をアピールしてくる。恭順のポーズだ。

（……？）

何だよ……コイツ。銃を抜き返してもこないなんて。

こんな相手は初めてだ。

長い金髪を震わせつつキレイな顔を上げた女は、

「私をこれ以上、傷つけないでください……！」

ウルウルと涙で潤ませた瞳で、地べたから弱々しく俺を見上げてくる。

その目には戦う意志はおろか、俺を騙し討ちにしてやろうという気配すらない。

そう来るとは……思ってなかったから、俺もどうすりゃいいのか分からんぞ。

「……さっき、上でも俺とすれ違ったな。眷属の火付け役か、お前」

とりあえず、俺は銃を向けたままそう話しかける。

「私はリサ。リサ・アヴェ・デュ・アンク。イ・ウー残党主戦派、眷属の代表戦士の1人です」

リサと名乗った白人女は、祈るように両手のひらを組んで俺を見上げてきた。

その右手の中指には、漢字の『伊』を蹄鉄形のU字が囲むイ・ウーのスクールリングが填められている。

……マジかよ。

イ・ウー主戦派といったら、世界征服を企んでた超武闘派だぞ。

当然、好戦的なヤツらばかりいると思い込んでいたが……こんな腰抜けもいたんだな。

しかし、どうりで日本語が上手いと思ったぜ。

イ・ウーでは日本語とドイツ語が共通語だったらしいからな。

「投降するつもりなら、武器を全て出せ」

「武器は、ありません」

……は？

俺は驚いて眉を寄せ、リサを見回すが……

確かに、はだけたブラウスの内側に武器を隠している様子はない。

スカートは長いが、銃や爆弾を収めていそうな膨らみも見当たらない。
「俺たちのホテルを襲撃したのに、丸腰のワケがないだろ。仲間に預けたのか」
「対戦車砲を1発だけ持たされていましたが、もう撃った後です。仲間もいません。私は1人で戦えと命令されたのです」
おいおい……
普通、敵の拠点を爆弾1発だけ抱えさせて攻めに行かすか？
だが、リサがこの状況下でそんなウソをつく意味も無い。
（要は……捨て駒、自爆テロ要員みたいなもんとして使われたのか。こいつは）
つまり今回の襲撃のメインターゲットは、俺で――その俺を仕留める係は、妖刀。
リサは妖刀が俺と戦う間、他の師団メンバーを陽動・足止めする係。一発だけ奇襲して、あとは師団がリサを殺すまで時間を稼げればそれでいい。
そういう作戦だったと考えれば、スジは通らなくもない。ヒドイ話ではあるがな。
「私は……リサは、いつも無謀な戦い方をさせられて、幾度も重傷を負ってきたのです。もう、あの人たちには……眷属には、ついていけません。リサは、逃げてきたのです」
脱走してきたってのかよ。
「ですから、お願いです。師団に――あなた達の側に、寝返らせて下さい。リサにはもう行くところがないのです」
た、戦う前に……正式に、降伏されちゃったよ。
マジで初のケースだな。俺の戦譜上。
「30分前に聞きたかったぜ」
そう吐き捨てつつ、俺は銃口を下げる。
「今は俺も師団から追われる身でな」
「えっ」
エメラルド色の瞳をまん丸に見開いて、リサが声を上げる。
ていうか、目、でけぇなぁ。さすが白人だよ。
「あなたも脱走してきたのですか」
「違う。裏切り者の嫌疑をかけられたんだ」
「ああ……なんという……不幸です。うッ……」
うなだれたリサは、その場にうずくまって自分の傷を押さえている。

銃創……痛そうだな。
しかし、ワトソンも遠慮なく撃ったもんだよ。女を。アイツも女だけどさ。
しかも2発当ててる。殺す気満々じゃねーか。治外法権とやらで殺人を許可されているイギリスの武偵として、殺るときゃ殺るって事か。そこは見上げた根性だぜ。
しかし地下道の先を見るに、傷から落とし続けてきたらしい血痕のせいで——

ここまでのリサの足取りは、眷属にバレてると見るべきだな。
血は情報のカタマリなんだ。
血液型などからそれがリサの血痕である事は分かるし、固まり方からその地点を通った時刻までおおよそ分かってしまう。そして眷属がそれを見逃すはずもない。
（となると……俺も、ここにいるのは危険だな）
と、俺は無言で銃をホルスターに収め——
「……」
痛みに俯いたままのリサから目をそらし、来た道を戻ることにした。

この地下道は一本道ではなく分岐していたから、他の方向へ逃げよう。
と、リサに背を向け、角を曲がり……
非常灯を頼りに、歩く。
あの哀れな女を見捨てる形にはなるが——
リサは俺の姿を見た。それを口封じに殺さないだけ、ありがたく思え。
（……脱走、ってのは……）
あらゆる戦闘組織で、最も重い罪の一つとされる行為だ。
軍隊じゃ、たいてい死刑。
リサは、あの様子じゃ身動きも取れなさそうだし……
（——すぐ、眷属に見つかっちまうんだろうな）
見つかったら、殺されるんだろうな。
この暗くて汚い、寒い地下道で。
いや、その前に死ぬかもだ。あの重傷じゃ。
ひょっとしたら、もう死んでるかも。
（……）
だが、リサは眷属。眷属は敵だ。知った事か。

――とも、思ったが。
気がついたら俺は……
（クソッ……）
なぜか、戻ってきてしまっていた。
さっきの角、リサの所へ。
「……!?」
足音にびびって顔を上げたリサは、一度は立ち去った俺が戻ってきた事に驚いていた。
そりゃ驚くよな。俺も自分で驚いてるさ。自分のお人好しっぷりに。
さっき俺を殺しかけた妖刀の、その援護係を助けに来るとか。
しかもここには眷属が迫ってるんだぞ。何やってんだよ俺。
「べっ、別に……お前を助けにきたワケじゃないぞ。ただ、これはその……死にかけてるお前をスルーしてそのまま死なれたら、後で寝覚めが悪くなるからだ。安眠は大事だ」
などと、ちょっとアリアの癖が移った前フリを交えつつ、俺は――

武偵手帳に1本だけ入っていた、使い捨ての鎮痛注射をリサの膝に放って渡す。
「……こ、これは、嬉しいです……でも、あなたも負傷しているのでは……？」
すぐそれを見抜いて俺の脇腹辺りを見てきたリサは、やっぱり医学的な知識を持ってるらしいな。
そ、そうさ。そこなんだ。俺がコイツを助けにきた理由は。
医者やナースは、生かしておくべきだ。
俺も負傷してるし、師団から逃げてる間に何があるか分からないからな。
別に、かわいそうになったからとか、そういう甘っちょろい感情からじゃないんだ。
「お前が使えよ。俺は男だから大丈夫だ。言っておくが15mgしかないからな。反復注射はできないぞ」
実際、妖刀にやられた腹は痛むが……
男子が鎮痛剤なんか自分に使ってたら、強襲科じゃバカにされる。くれてやるさ。
だがその程度の事に、リサはえらく感激したらしく……薬をありがたそうに

捧げ持ってから、キラキラした目で俺を見上げて「あなたが……リサの、勇者様……？」などと、なにやら外国語で呟いた。

「……何だ？」

「い、いえっ、なんでもありません……こ、これ、ありがとうございます」

ぺこぺこと日本式に頭を下げたリサが、鎮痛剤を使っている間で——

俺はリサがここまで運んできていた服の中から、適当なブラウスとスカート、それからコートと、ロングヘアーのウィッグ、ついでに黒縁のメガネを選んだ。

そしてリサに背中を向けたまま、それらを渡し——

「俺はそっちを見ないから、すぐ着替えろ」

そう告げ、大きなコートを風呂敷がわりにして残りの服やカツラを包んでいく。ここにこれを残していったら、『リサは変装してます』って言ってるようなもんだからな。面倒だが、どこか別のところに捨てないといけない。

しばらくの後、

「……き、着替えました」

そう言われて振り返ると、リサは……よし。ちゃんと、ただのＯＬに見える。さっきまでの印象とは全然違うキャラになれてるぞ。

「よし、行くぞ。傷に障るかもしれんが、眷属に見つかるよりはマシだと思え」

まだ立てなさそうなリサの手を引っ張って、運ぶためにそっと背負うと——

「あっ……」

非常時だってのに、リサは恥ずかしそうな声を上げている。

どうも人に、というか男に接触した事が無いっぽい反応だ。

やめてくれよ。そういう乙女反応。

「……俺はヨーロッパに不慣れなんだ。標識も読めないし、バスひとつ乗るのも乗り方が分からん。だから、お前がガイドしろ。俺が生きて師団から逃げられるようにな」

「は……はい」

こうして、俺は……

かつては殺し合ったイ・ウーの残党と助け合って、師団・眷属の双方から逃げるハメになった。

しかし、リサの——その、胸が。ほっそりしてるくせに、そこだけはちゃんとある胸がむんにゅりと俺の背中に当たってるぞ。

リサは筋肉があまりないらしく、やたら柔らかい。水枕みたいだ。いかんだ

ろこれは。
　アリアをおんぶしても当たらないものは当たらないのだ（存在しないものは当たらないのだ）
油断してた。女を背負うってのは危険な行為だったんだな。

　地下道を歩きながら、俺が背中のリサに傷の具合を尋ねると――
「いただいた薬のおかげで、痛みは引きました。傷も2、3日で治るかと思います」
　などと、背から言ってくる。
「盲管銃創が2日で治るワケないだろ」
「私は、リサは……傷の治りが早いのです。遠山様が討った竜倅公・ブラドさんのような無限回復というわけではありませんが、普通の人よりもずっと早く治ります。腹腔内癒着のような合併症も起こしませんし、傷跡も残りません」
「お前、魔女なのか」
「というほどでも……特異体質のようなものです」
「というほどでも……特異体質持ちなら俺もその1人だ。
　すぐには信じがたい話だが、特異体質持ちなら俺もその1人だ。
　高速回復力はブラドでその上位版を見てるワケだし、今さら驚くほどの事でもないか。
（なるほど。だから戦役では乱暴な使われ方をしてたんだな）
　撃たれても刺されても割と平気な、便利な捨て駒として。
　俺も最近「キンジなら大丈夫でしょ」的なノリで死線をくぐらされる事が間々あるから、そこには同情していると……
「――遠山様。ここから上がりましょう」
　不意に、リサが地上への縦穴を指して言ってきた。
「ここって。この上は、多分まだ市街地だぞ」
「はい。ここはスハールベーク駅の真裏と思われます。考えたのですが……鉄道を使ってブリュッセルから離れるのがよろしいかと」
「電車で？　どこへ逃げるつもりなんだ」
「こういう場合は、兵の集まる前線よりも……どちらかの制圧圏の奥深くに入り込んで、その空白地帯に潜伏した方が安全です」
　ふむ……
「眷属勢力下の南方・フランス方面に行くか、師団勢力下の北方・オランダ方面に行くか――という二択になりますが、現在、ブリュッセルは師団の勢力下

にあります。遠山様が眷属と通じている嫌疑をかけられたのなら、眷属勢力下であるフランス方面へのルートが監視されることでしょう」

あれ……こいつ。

頭、いいぞ。

しゃべり方が理路整然としてるし、言ってる事が理にかなってる。

少し尋ねたい点もあるが、もう少し黙って話を聞いてみよう。

「遠山様は眷属から見て敵。リサの脱走は明らかな離反。師団の監視を抜けてフランスに潜伏できても、眷属が私たちを発見した場合は殺害しにかかってくる事でしょう。一方、遠山様の逃亡はあくまで嫌疑……疑いをかけられての事。オランダに潜伏している内に、真の内通者が――リサは、それが誰かは知らないのですが――判明して、遠山様の嫌疑が解ける事もありえるかと。加えて、リサには師団へ投降する意志があります」

「将来的には、オランダの方が……2人とも生きる目があるって事か」

「はい。そして何より、リサはオランダ出身なのです。オランダの地理や文化にも詳しく、潜伏地にも当てがあります」

……決定打を最後に持ってくる辺りも、話し上手だな。

聞きながら声の様子を窺っていたが、俺をハメようっていうムードも無い。本当に頭のいい子が、2人で逃げるためのベストな選択肢を提案してきてる感じだ。

自分のことを名前で呼ぶクセだけは、ちょっとアホっぽいけどな。

「……そこまでは分かった。だが、電車に乗るとなると駅とかで人の目に晒されるだろ。俺みたいな東洋人は目立つんだ。リバティー・メイソンに足どりがバレる」

「そこも考えました。これで変装なさってください」

と、リサは自分が背負っていたコートの包みを肩越しに渡してくる。

「これって。女物しかないだろ」

「女性に化ければ、師団の目を欺けます」

「それだけはイヤだ」

「イヤだというお気持ちは、分かります。ですが遠山様、ブリュッセル脱出は逃亡計画の最初にして最大の難所なのです」

自分の命も懸かってるとあって、俺の耳元で喋るリサの声は真剣そのものだ。

「……それは、分かるんだが……その……」

「命と恥ずかしさを天秤に掛けて、どちらが大事か今一度お考え下さいませ」
——あーもうッ。ホントに口が上手いな、このリサって女は。
寒風が吹き込む、深夜のスハールベーク駅には——
駅員もいなければ、改札も無かった。
タダ乗りしようと思えば余裕で出来てしまいそうだったが、リサはそうしないようだ。痛み止めの効果でなんとか歩けるようになった体で、タッチパネル式の薄汚れた券売機に寄りかかるようにしてキップを買っている。
だがそれは運賃だけを選ぶ日本の物とは違い、行き先や車両の等級、割引プランの有無などを選ぶ手間のかかるものだ。さらに不正使用防止のため、駅に入った時刻を印字機で自らスタンプしなければならない。
その間、他の乗客が2、3人と……自転車に乗った女性警官が、通りがかったが……
さっきと同じで、俺には誰も彼もがリバティー・メイソンの手先に思えてしまう。
（——ここで見つかったら、アウトだぞ……）

でかいキップを手にしたリサに肩を貸してホームまで上がり、早く来い、と願いつつ電車を待つが……来ない。
夜中だから人はまばらだが、いないわけじゃないんだ。
早く姿をくらまさないと、危険なのに。
こっちは古めかしい反転フラップ・パネル式の行き先表示板は、アムステルダム行きの国際電車の到着予定時刻の後ろに『+10min』などとふざけた表示をしている。
それが今パタパタと音を立てて変わり、『+15min』になった。
チクショウ。なんで電車がこんなに遅れるんだよ。
「遠山様。必要以上に時計や時刻表を見ないで下さい。怪しまれます。ヨーロッパでは、電車が遅れることはよくあるのです。来ない事だって——」
「——日本の新幹線は30秒の遅れだって客に謝るんだぞ。クソッ、お前らヨーロッパ人は何でこんなにルーズなんだよ……！」
焦る心を抑えつつ、寒風の中を待っていると……
ようやく、電車が来た。
先端が犬の鼻みたいに不格好で、丸々1年は洗ってないんじゃないかってぐ

らい汚い、濁った黄色の車両だ。こんなのでオランダまで行けるのか？

だが……夜行列車という事もあり、車内は基本ガラガラだ。

逃避行してる身としては、そこは助かる。1等車と2等車があるんだが、2等車なんか誰もいない車両まであるぞ。

そして、リサは2等車のキップを買っている。

こいつはラッキーだ。とも、思ったが――

「深夜は電車内も治安が悪いので、物を盗まれたりしないよう1等車に乗る人が多いのです。なので私たちは人の少ない2等車で参りますが、ガマンしてくださいね」

どうやらそこも、リサの計画通りだったようだ。

デキるな。さすが地元民だ。

リサが押しボタン式の自動ドアを開けて、車内も汚い事はともかく、でかくてパワーはありそうな電車に乗り込んでいき……

「……」

俺たちは無人の2等車、その後端のボックス席についた。

とりあえずはこれで、敵だらけのブリュッセルを離れられるな。

と、一息つきたかった所だが……

窓に映る自分の姿が……うう。

ゆがんで見えるぜ。涙で。

ふぅ、と、俺の正面の席で安堵のため息をついたリサは――

「それにしても……ステキですよ、遠山様。たいへんな美人です。才能がありますよ」

にっこり。

女に化けた俺に、笑顔を向けてきた。

別のシチュエーションで見たかったぜ、そのカワイイ笑顔は。お前こそ美人なんだし。

（……死にたい……）

真っ赤になってうなだれる、俺は――

リサの持っていた女物のロングコートやウィッグを使って、変装している。

リサ曰く、ペルシャ美人とやらに。俺の髪の色に合わせて黒を基調にした変装で、3代前に中東から移民してきたお金持ちって設定なんだとよ。で、リサはその秘書と。

リサの着付けのおかげもあるが、えーえー、見えますよ。なんか目つきの悪いメーテルみたいな、美人さんに。

俺にも兄さん同様、無くていい才能があったらしいな。血は争えないってやつか。

「偽名はどうしましょうか」

などと聞いてきたリサに、

「任せる。こんな黒メーテルみたいなのに合う名前なんか、思いつかん」

ぞんざいに返した時……ゴトンッ……

列車が動き出す。

しばらく黙って、郊外へ向かう車内で俯いていると……

「お互いブリュッセルでは不幸でしたね。どうしてリサは、こんな目に……」

しょんぼり顔のリサが、元気なく話しかけてきた。

「……俺はともかく、お前は自業自得だろ。眷属――ワルモノの一味にいたんだし」

「眷属はワルモノだったのですか」

「当たり前だろ」

「リサは、その逆と眷属で聞かされていました」

「逆だ逆。眷属はワルモノで、師団がイイモノなんだ」

「では、その師団に追われている遠山様は……」

「決まってるだろ。イイモノに追われてるんだから、ワル……あれ……？　いや、それは、えーっとだな……」

チクショー、頭いいなリサ。

だが、今の話と、自分が置かれてる状況から……思い知らされたよ。

極論しちまえば、子供のケンカから世界大戦まで、どっちが正義でどっちが悪だなんて善悪二元論は成り立たない。争いってものは、どっちも自分が正しいと思ってるからこそ起きるものだしな。

正義の味方を代々やってきたと言われてる、遠山一族だって……

その末裔の俺は裏切り者の名を受けて、ご覧の有様だよ。

「……」

俺が黙って、うなだれていると――

「……でも、遠山様。リサにとって、遠山様はイイモノですよ。ご自分の危険を顧みず、死の淵にいたリサを助けて下さったのですから」

リサはコートで隠された俺の膝にそっと手を置いて、優しく微笑んでくれた。
だが、その表情が――サッと凍り付く。
（……？）
前の車両に続くドアに向けられたリサの視線を、目だけで追うと……
濃紺の制服を着た、車掌と思われる太った白人男性がこっちへ向かってきている。
「――検札です。リサが対応しますから、ここは眠ったフリをなさって下さい」
小声でそう言ったリサは背筋を伸ばし、
軽く会釈して、キップを2人分渡している。
（油断してた。ヨーロッパの鉄道は改札が無い代わりに、検札があるのか……）
俺は顔を見られないよう、俯いて……薄目を開けてウィッグの間から様子を盗み見つつこの場をタヌキ寝入りでやり過ごそうとする。
キップを確認し、パンチで穴を開けた車掌は――
「そちらの女性は？　ご気分でも悪いのですか？」
フランス語なので分からないが、何やら俺の事を話しているようだ。

「違いますから、お構いなく。彼女は寝ているんです」
ささっ、と、リサは立てた人差し指を左右に振って否定のジェスチャーをしている。
「……次の駅はオランダ国内です。そちらの女性だけ、パスポートを拝見できますか」
マズイ……！
パスポートとかいう単語が聞こえたぞ。今。
外見から明らかに外人と分かる俺が国境を越えようとしてるから、念のため身元を確認しようとしてるのか。日本のパスポートは持ってはいるが、見られたら面倒な事になる。
額に脂汗を浮かべ、イザという時に備えてベレッタを意識するが――
「――そちらの女性だけ、と言いましたね。あなたは見た目で人の国籍を決めつけるのですか。彼女は3代続くオランダ人で、ベルモント・B・VのCOOでありながら、私たち下々の社員のために経費を節約して2等車に乗られるご立派な倹約家でもあります。その彼女がお疲れのところを――起こすような非礼は、許しませんよ」

ペラペラとリサがまくしたてた……今度はフランス語じゃない。オランダ語……？　を、車掌は理解したらしく――

「これは……大変、失礼しました。よい旅を」

何度か頷きつつ小声で言って、去っていった。

……よかった。

なんとか、事なきを得たな。

車掌がいなくなってから十分な時間が経った後、

「……助かったよ。恩に着るぜ。お前、何て会話してたんだ？」

そう尋ねた俺に――リサは録音したように一字一句同じセリフをリピートして、さらに日本語訳して繰り返した。すげえ記憶力だな。

「……そうだったのか。ケンカ腰で喋るからヒヤヒヤしたぜ」

「車掌さんの名札から、彼がオランダ人である事は分かりましたので。オランダは白人、黒人、アラブ系――多様な人種が共存する国なので、人種差別が犯罪とされているのです。まずそこを強く指摘して、イニシアチブを取りました」

「……なるほどな。でも、俺にケチなキャラを付けたのは何でだ？」

「オランダでは、ケチである事はいい事なのです。倹約したお金で困っている

人に寄付をする事を美徳とする文化がありますので。いま私たちが2等車に乗っている事を――彼の中で遠山様の印象を上げ、なおかつオランダ人であるという事の裏付けにも利用しようと考えました」

あの一瞬で……そこまで機転を利かせてたとはな。大したタマだぜ、リサ。

しかも、それだけじゃなかった。リサの途中からの喋り方はちょっとヒステリックで、日本にも間々いる『面倒くさいクレーマー』っぽい演技が上手く入ってた。あの車掌は、もうリサには関わるまいと思っただろう。

「頭、いいんだな。お前」

俺がそう、少し褒めると――

「えっ、えっ……そ、そんな。とんでもありません」

リサは白い頬をピンクに染めて、ぱたぱたと手を振った。

その振り方も、さっき車掌にやってたのと違って――パーにした両手を胸の前で振る、日本の女の子がやる否定のジェスチャーだ。相手が俺、日本人だからだろう。

博識で利口なリサに、少し信頼度が増した俺は……

今は味方もコイツしかいないワケだし、協力して師団・眷属から逃げ延びる

ためにその他の能力を確認しておこうと思った。
「お前、オツムの他には何が長所なんだ。イ・ウーにいたんだから、何かしらの戦う力を持ってるんだろ。直接戦闘じゃなくても、運転とか通信とか、ミサイル工学とか――」
俺がそう尋ねると、リサは……
今度は、申しわけなさそうに視線を落とした。
「いいえ……その、リサは、そういった戦闘にまつわる能力はなくて……会計、を……」
「会計？」
「リサはイ・ウーの会計上だったのです。燃料や武器弾薬の値段交渉、備品や食糧などのお買い物と在庫管理を仰せつかっていました」
か、会計上……っ……
なんてこった。
頭の良さはともかく、戦力的には大ハズレを引かされたな。
どうせならブラドとかパトラみたいに強いのが脱走してきて、それと組めれば安全度も高かったのに。

「他に……何かできる事はないのか」
「ナースや薬剤師もしていました。ですが小夜鳴ブラドさんのような医師ではありませんので、出来ることは限られます」
さっきの自己オペを見てそこも期待してたんだが、それも限定的か……
あれは自分の高速治癒力に任せた、ムチャな手術だったんだな。やっぱり。
「他には」
「他といいますか、実は本業は……イ・ウーや眷属の陣営内では、リサはいつもお料理やお洗濯をしていました。元々はアムステルダムのメイド学校に通っていましたので」
「メ、メイド学校……」
会計。看護。メイドさん。
他には何も――つまり戦闘系の技能は、格闘技も刀剣も銃も魔術も――マジで何ひとつ出来ないらしく、リサはスミマセン的な上目遣いで黙ってしまい……
俺も、黙るしかない。
そりゃ軍隊にもコックとか音楽家とか事務員とか、直接戦闘と無関係な人員

はいるもんだが……つまりリサは、イ・ウーや眷属のそういう存在だったってワケか。

「じゃあお前、なんでイ・ウーの主戦派なんかにいたんだよ……」

「イ・ウーが北海に来た時、お誘いを受けたのです。私のご先祖様には……強い人がいたそうですので」

「でもお前は違うんだろ。なんで居続けたんだよ、あんな武闘派の組織に。監禁でもされてたのか」

「いいえ。リサは自らお願いして、イ・ウーに置いていただいていたのです……あの艦で出会えるのではと、期待していたのです。私がお仕えするべき、勇者様に……」

「……勇者さま？」

「私の一族――アヴェ・デュ・アンク家の女は代々、それぞれの勇者様……武人に仕えて、戦乱の時にも傷つく事なく生き抜いてきました。真心を込めて武人に尽くし、その御方にとって有用な女となり……そのご寵愛をいただいて、守られて、生きてきたのです」

「なんか……複雑な生き延び方だな、それ」

「日本語で分かりやすくまとめますと、『便利な女』を極めた一族です」

「……」

「ですがイ・ウー主戦派には女性が多かった事もあり、リサが仕えるべき勇者様と思える武人はいらっしゃいませんでした。お祖母様にも、お母様にも、そういった人がいらしたのに……どうしてリサの前には現れて下さらないのでしょうと、リサは艦のベッドの中で泣いてばかりいたのです」

リサの、これは……

俺のあまり詳しくない分野の話だが、いわゆる『白馬の王子様願望』ってやつかな。

いつか自分の運命の人が来てくれると信じて、待ちの姿勢を貫くタイプ。

それを代々やってきた一族、って事か。

「泣いて過ごすぐらいなら、生き方を変えればいいだろ。そんな昭和の少女漫画みたいな考え方は捨てて……せっかくイ・ウーにいたんだし、たとえば逆に自分が女勇者になって戦って、男を守ってやるとかさ」

戦闘力のないリサへの文句気味に、俺がそう言うと――

「だめなんです。リサは戦いたくありません。絶対に、絶対に、傷つきたくな

いのです」

リサは自分の銃創に服の上から触れ、頑なにそう言い張るのだった。

交代で仮眠を取るリサと俺を乗せて、列車は平坦な道を北上する。

夜はまだ明けていない。時折見える車道には、オレンジ色のランプが点々と灯っている。

物知りのリサ曰く、オレンジの光はあまり明るくしなくても人間の目が認識できるため、省エネになるんだそうだ。

日本じゃ車道のライトは白だが、あれはあれで風情があるな。

「オランダには、いつ着くんだろうな」

仮眠の交代時に、リサにそう呟くと――

「もうオランダですよ。国境は先ほど、車掌さんが来た時に越えました」

「……？　でも、チューリップも風車もないぞ？」

俺が窓に顔を寄せて夜明け前の風景を見回すと、リサはクスッと愛らしく笑った。

「今は冬ですよ、遠山様。春になれば、地平線まで続くチューリップ畑がご覧

になれます。それに、たぶん遠山様がイメージなさってるような――『風車小屋』はもう昔のもので、オランダ国内にもほとんど無いのです」

「そ、そうなのか」

「でも――ほら、あの森の向こう側。あれが現代の風車ですよ」

リサが窓にキレイな顔を寄せてきて、頬と頬がくっつきそうで一瞬ビビったものの――

地平線に見えたプロペラ式風力発電機の影に、俺は苦笑する。

台場の空き地島にあるのと同じタイプの、見慣れたやつだ。なんかホッとしちまうな。

「オランダでは、風車小屋を昔から発電に使ってたのか？」

「まあ。オランダの風車は12世紀からあるのですよ」

「じゃあ、えっと……粉挽きにでも使ってたのか」

「製粉にも使われましたが、風車にはもっと重要な『国土を広げる』という役割があったのです」

「国土を広げる……？　風車で？」

「『天地は神が造ったが、オランダはオランダ人が造った』と、オランダの諺

で言います。私たちオランダ人は何百kmもの堤防を作り、何万基もの風車を動力源として海水を排水し、何百年もを掛けてこの大地を手に入れたのです。この海抜も、もうマイナスですよ」

お国自慢をするリサは、その美人顔で微笑んでいる。

オランダ――自分の国に帰ってこれて、嬉しいんだな。

改めて見ると、確かにこの国土は揚水・灌漑によって人工的に造られたものだと分かる。左右の窓からどの方向を見渡しても、地平線に山が存在しないのだ。

これなら埋め立て地の台場と同様、風は遮る物もなく吹き込み放題だろう。

――なるほど、オランダが風車の国になったワケが分かったよ。来てみて、初めてな。

旅ってやつは、人の見識を広げてくれるものなんだな。たとえそれが、逃避行でも。

北海道よりも高い緯度まで来た事もあり、まだ真っ暗闇の午前8時過ぎ――俺とリサはオランダ最大の都市・アムステルダムに無事到着した。

見た目通り『犬っぱな』とアダ名されてるらしい黄色い電車を降りると、俺にとっては右も左も分からないアムステルダム中央駅を――地元民のリサは迷うことなく歩いていく。そして煉瓦造りの駅舎から出ると、やや凸凹した石畳の道を街へと歩き始めた。

天気は、曇り。気温は……0度以下だろう。寒さが左脇腹に堪えるぜ。

ブリュッセルと同様、この街もメルヘンチックな建物が全てピッタリ隣接して通りを形作っていたが――一つ一つの建物が、ベルギーのそれよりも一回りデカい。なんでかなと思ったが、その疑問は出勤中のオランダ人たちを見てすぐ解決した。人間がデカいのだ。

リサ曰くこの国の平均身長は世界一高く、男が184cm、女でも171cm。アリアが来たら、小学生どころか幼稚園児だと思われるかもな。巨人の国だ。

「……やっぱり、都市だけあって人が多いな」

パリ同様『美しいが不潔』な街を行く道すがら――白い息を吐きつつリサに呟くと、

「はい。ですので、長居はしたくない場所ですが……ここは鉄道網の要所ですし、弾薬や医薬品が手に入れやすい街です。補給のためにも、立ち寄りました」

疲れてはいるようだったが、リサはしっかりと逃亡ルートを考えているようだった。

駅から少し東に歩いてから、リサは歴史のありそうな狭い通りに入り――その一角で、古ぼけた彫刻のされた黒い扉をおもむろに開いた。

パッと見では分からなかったが、その中にはフロントがある。あまり流行っていない、簡易なホテルらしいな。

リサは何やらフロントと会話してから、

「今のうちに物資を買い集めてきます。人通りの多い昼間は、休息を取りましょう」

と、201号室のキーを渡してくれたので……

俺は一旦そこでリサと別れ、古めかしいエレベーターで2階――日本でいう3階にある部屋へ入った。

「……」

後ろ手にオートロックのドアを閉めると、とりあえず一息つけた心地がする。

師団の連中も、ヨーロッパに土地勘のない俺がこんなに早く――別の都市の、知る人ぞ知る的なホテルにまで逃げたとは思わないだろう。

とはいえ、人目は避けよう。いろんな意味で、この姿を人に見せたくはないからな。

と、念のためカーテンを閉めようとした時……

（……ッ……！）

俺は窓の外に目を見張ってしまう。

下には濁った狭い運河があり、スイスイと白鳥が水面をパトロールしてたのだが――

その運河の向かいには例のメルヘンチックな建物がズラッと軒を連ね、その1階に……

どれも赤いランプや蛍光灯を上辺に据えた、全面ガラス張りの扉が並んでおり……

それぞれのガラス扉の中から、キレイな白人のお姉さんたちが道行く男たちに手招きや投げキッスをしていたのだ。

全員お洋服をお召しにならず、色とりどりの下着だけという、あられもないお姿で。

さすがの俺にも――

あの光景の意味する所は、半分ぐらい分かってしまう。
カーテンがピッタリ閉ざされているガラス扉もあったが、その不可視の室内でどれほどメルヘンな行為が行われているかは――か、考えたくもないッ。
（武藤なら大喜びで見て回るんだろうなぁ、あの辺）
急いでカーテンを閉じた、俺は――
ようやくヅラを外し、女物のコートを脱いで……どっかりと、ベッドに腰を下ろす。
別の意味で、ここには長居したくなくなってきたぞ。
そういや、風車とチューリップ以外でもう1つだけ知っているオランダ知識があったよ。
昔、それこそ武藤に聞かされたんだった。
この国では、いろんな国で違法な事があれこれ合法。
麻薬も、安楽死も、同性結婚も、ああいうのも。
本当に――香港以来、海外には驚かされっぱなしだよ。
リサが買ってきたバーガーキングのダブルワッパーを、ホテルで食べている

と――
「遠山様。先ほどから、お顔の色が優れませんが。傷が痛まれるのでしょうか？
リサがお持ちした鎮痛薬が効きませんでしたでしょうか」
小さな丸テーブルの向かいから、リサが心配そうに俺の顔を覗き込んできた。
ちなみにこのリサ、ハンバーガーを部屋にあった皿に載せ、ナイフとフォークで食べている。お行儀のよいこって。
「……化学薬品は効きにくい体質なんだ。でも、気にするな」
脇腹の腫れも痛いが、それよりお向かいの通りが怖くてしょうがないんだよ。
でも、女子のリサにそんな話ができようか。いや、できない。
恐怖のあまり俺が脳内で反語なんぞを呟いていると、
「それでは、近くのコーヒーショップかドラッグストアでヘンプでも買ってまいりましょうか」
「ヘンプ？　なんだそれ」
「大麻です。自然から採れるお薬ですよ」
「いらねえよッ！」
薬は薬でも麻薬じゃねーかっ。
だが、語気を荒げた俺に――リサは驚いてる。そうだ、ここは日本じゃない。

香港でも学んだ事だが、海外ではそこはきちんと説明しないと。

「……すまん。俺の国じゃ、そいつは違法なんだ。とりあえずいらんから。あと、これ。ハダカで済まないが、昨日のキップ、今日お前が買ってきてくれた薬、メシ、銃弾、あとこの宿の代金だ」

お互いの食事は終わったので、俺は財布を出してリサに３００ユーロほど渡そうとする。

あーあ。これで手持ちの金がほとんど無くなっちまったよ。

ていうか、元から資金難だったしな。バカ弟が臼を割ったせいで。

「いえ、お支払いは結構です。遠山様はリサの命を助けてくださったのですから」

「そこは勘定するなよ。俺だって、お前がいなけりゃ今ごろブリュッセルで縛り首だったかもなんだ。精算はきちんとしとかないと気分が悪い」

と、俺がユーロ札をリサに押しつけると……

「わ、分かりました。それでは――」

リサは自分も金色の狼が刺繍された財布を取り出して、お釣りを渡してくるが……

……おい。釣り銭、１５２ユーロって。

俺がドンブリ勘定した金額の半額以下だぞ。こんなに安く上がってるワケねーだろ。

「おいリサ。遠慮を全くするなとは言わんが、金に関してはキッチリやろうぜ。俺は貧乏武偵だが、こんな形で人に金を恵んでもらうほどの甲斐性無しじゃないぞ」

と、改めてユーロ札を渡そうとすると……

「い、いえ。本当にこれしか懸かっていないのです」

「多く渡された方が言うのも何だが、しまいにゃ怒るぞ」

「リ、リサは同じ品物でも最安値で買えるお店を見抜けるのです。薬も効能が同じで安いものを探せます。交渉が出来る店では、７割ぐらいまでなら必ず負けさせる事ができます。ハンバーガーも割引セットを買ったのです」

リサは恐縮しまくりつつ、習慣なのか全て取ってあった領収証をいそいそ出してきた。

見れば、ホントに……全部、安く買ってるぞ。キップから銃弾まで。

実際に電車にも乗れたし、薬もパチ物とかじゃなかったのに。俺がリクエス

トしていた9㎜弾の領収証には、売り主が書いたと思われる――売値を3分の1にするための計算がメモされてる。

「……お前、ただ者じゃないな。今のは済まなかった。謝る。この通りだ」

金でトラブったのは、恥ずかしかったので……俺は日本式に、頭を深く下げて謝った。

するとリサは赤面してパタパタ手を振り、

「いえ、お顔を上げてください」

と、慌ててる。

「皆さん、リサのこれには一度は驚かれますので……良いメイドは買い物上手でなければなりませんから。イ・ウーでも、核燃料を8割引きで購入した事があるんですよ。武器を売りに来られたココさんは、私を見るとイヤな顔をなさってました」

うふふ、と笑うリサにつられて……

俺も、小さく笑ってしまった。『げぇー』という顔をしてるココがすぐ思い浮かんで。

なんというか、これはこれで頼もしい味方かもしれないな。リサ。

電車の中じゃ戦闘に関わる能力が無いとか言ってたが、あるじゃねーか。これだって、立派な援護射撃だぞ。同じ装備費で――撃てる弾数を3倍に増やせるんだからな。

3弾　退路の果てにて

東京駅がその外観のモデルにしたという、アムステルダム中央駅を発ち――
俺たちは半日かけて電車とバスを何本も乗り継ぎ、オランダの田舎町・ブータンジェに着いた。
まだ午後4時なのに暮れつつあった曇り空の下、
「リサは小学校の遠足で来た事があるのですが、ここはオランダでもマイナーな町です。師団も、すぐには調べないはずですよ。リバティー・メイソンは都市型の秘密結社なので、こういった田舎町にはネットワークを持っていませんし」
腹部の銃創がもう治ったらしいリサが、俺に元気よく説明してくれる。
「濠があるぞ、この町……それに、なんだか妙な形をしてないか？」
「上から見ると星形をしています。18世紀には侵略者ナポレオン・ボナパルトの猛攻をも凌いだ、オランダで最も堅牢な要塞都市の1つなのですよ」
要塞都市――なるほど。だからリサは潜伏地にここを選んだのか。戦に備えて造られた町だけあって、よく見ると町の道は隠れて移動するのに適した配置

になっている。
跳ね橋を渡って入った、この星形の町は――
田舎といっても過疎で廃墟になりかけているような日本の田舎とは違い、なんというかしっかりしていた。治安も良さそうだ。
町の中心には尖塔を煌めかせる教会があり、その近くの煉瓦家のカフェに着くと――
「空き家が何軒かありましたので、リサは住み家を選んできます。遠山様は、こちらで今しばらくお待ち下さい」
そう言い残して、リサは寒い外へ出ていった。
（働き者だなー……あいつ）
店内のテーブル席についた俺はメニューのカプチーノを指で示して注文し、それを胃に流し込んで暖を取る。
女に化けてる以上、店員相手には迂闊に喋れなくて不便だ。兄さんはカナ状態だと声も完璧に変わるんだが、あれは理子の変声術に通じるスゴ技だよな。
と、安全な町について少し安心した事もあり、ボンヤリしていると……
店内に3人ほどいた老人客たちが、コーヒーカップや灰皿を手に店外へ出始

めた。

外は寒いってのに、何で出ていくんだ？

「……？」

古びた木枠の窓から様子を窺うと、老人たちは青銅のテーブルについて嬉しそうに西の空を見上げている。

そこには茜色の夕日が、厚い雲の切れ間から見えていた。

店員がカウンターから、はじめオランダ語で、次いで英語で話しかけてきてほとんど分からなかったが、「オランダの天気」などの言葉が幾つか拾えて理解できた。

オランダは、冬になると曇天が続く国らしい。だから冬に少しでも陽が出れば、みんな日光を浴びたがるんだ。とか、そういう事を言ってたっぽいフィーリングがする。

なので、俺も外に出ると——

確かに少し気温が上がっていて、日差しが気持ちが良かった。

（ここは安全そうだし、少し町を見て回るか）

どうせ小さな町だ。リサとはぐれる心配も無さそうだからな。

ブータンジェは、のどかな町で……

煉瓦造りの家々は中世の面影を残しており、そのどれもが西洋のお伽噺に出てきそうな可愛らしくて凝ったデザイン。建築に興味のない俺でも、見ていて楽しい。

電車の中でリサが言っていたが、オランダには衣・食・住の『住』を最重視する文化があるらしい。それがよく見て取れるな。

夕日を浴びながら散歩していると——濠の内側、矢印形に張り出した防塁の1つの上に——俺が前からイメージしてた通りの、木造の風車小屋があった。

小ぶりで古いが、ちゃんと回ってるぞ。よく手入れされているのが分かる。

近寄って観察してみると、風車には風向きや必要な回転速度に応じた制御ができるよう歯車や鎖があちこちにあった。思ってたよりずっと精密な設備だったんだな。風車って。

「こちらにいらしたんですね」

風車を見学していた俺に、背後から日本語で……リサが、語りかけてきた。

「ああ、勝手に済まなかった。陽が出たんで、オランダ人らしく歩いてたんだ」
振り返れば、リサの背後、遠い夕焼け空で――
ヒラヒラと、葉っぱのような何かが舞っていた。
1つや2つじゃない。かなりの数が、列をなして西へと飛び去っていくところだ。
「あれは……何だ？」
眉を寄せた俺に促されて、西空を見たリサは……
「まあ。あれはクロケットマダラ――渡り蝶ですよ。冬になると海を渡ってイギリスまで行くのです。大半は寒さで力尽きますが、ちゃんと一部が生き残って……春になると次の世代がオランダに還ってきます」
自国の風物詩を見て、嬉しそうに教えてくれる。
そして改めてこっちを向き、風車を背にした俺に微笑んできた。
「――家を借りました。リサの手持ちの資金で、1ヶ月は滞在できます。きっと遠山様もお気に召す、よい物件ですよ」
リサのことだ。表情も明るいし、きっと賃料をしっかり交渉できたんだろうな。

とはいえ、タダでそこに住むのも悪いと思ったので――
「大した額じゃないが、これも使ってくれ。家賃の足しとか、生活費に」
俺はリサに歩み寄って、手持ちの金をほとんど全て渡した。
「そ、そんな。多すぎます」
「受け取ってくれ。俺も考えたんだ。俺は変装してる身空だし、お前みたいに買い物上手じゃない。ここは安全そうな町だが、俺たちはまだ師団・眷属から逃げ隠れしてる状況だ。お互いの長所を使って助け合わないと、きっと生き抜けない」
そう言われたリサは、エメラルド色の大きなお目々を広げてこっちを見上げてる。
「だからこれからは――戦闘力の無いお前は生活を、生活力のない俺は戦闘を、それぞれ分担する事にしないか。ある種、お前の力を前借りする形にはなるんだが……今の俺にはそういう用心棒みたいな役割しかできる事がないんだ。すまない」
歯切れ悪く言った俺に、リサは……あれ？
なんか、やたら驚いた顔をしてるぞ。真っ赤になりつつ。

そして感動しきったカンジで、固まっちゃってる。ナニコレ。
というか、女子のこういう仕草……どこかで、見た事が……あ、思い出したぞ。
アリアの左手薬指に、プレゼントの指輪をあげた時。
それと、白雪を雇うためにバラの花束をあげた時だ。
2人ともその後なぜか噴水で溺れたり立ったまま気絶したりと異常行動が見られたので、ちょっと俺もドキドキしながらリアクションを待っていると――
「……シャーロック卿は、これを条理予知なさっていたのですね……」
かつてイ・ウーにいたというリサは、意外なことを呟いた。
条理予知。
それはシャーロックの特殊能力といえるレベルにまで極めた、推理力だ。
その単語に俺が眉を寄せるより早く、
「遠山様。2人で家庭に入る前に、リサは申し上げなければならない事があるのです」
すっ……と、リサは両手のひらを丸い胸の前で組み、祈るように頭を垂れた。

「――私の、ご主人様になってください」
な……何？
ご主人様？　何ソレ。
かつてアリアに言われた『あたしのドレイになりなさい！』とは真逆のご依頼に、俺は目をパチクリさせてしまう。
「イ・ウーで、運命の勇者様に出会えずに悩んでいた私は……シャーロック卿に御助言をいただいた事があるのです。そこで卿は言われました。私がお仕えする御方は東から来る。ちょっと目つきが悪くて、喋り方はぶっきらぼうで、女たらし……」
オイ、シャーロック。
「その御方と運命の時を迎える際の光景も、卿は条理予知なさりました。『渡り蝶を空に見る時』と。それは、今です。私は、運命の勇者様に巡り会えたのです」
えーっと……
俺は勇者サマとかそういう大それた存在じゃなくって、偏差値50アンダーの高校ですら処分中の劣等生なんだが……

そこら辺をしっかり説明しようにも、リサは俺を物心ついた頃から夢見ていた『白馬の王子様』と勝手に思い込んで――それと出会えた感動で、その碧の瞳に涙すら浮かべてる。

これに「違うぞバカ。お断りだ」と即答するのは、なんとも忍びない。

「ですから遠山様。どうかリサのご主人様になってください。どうぞリサをメイドとして、おそばに置いてやって下さい」

それに、これは……初めての経験だな。

リサは俺のヒステリアモードを見た事がない。

師団から逃げてきた、普段の、それこそ平凡な高校生の俺しか知らないのだ。

妄想気味な夢を持ち、外れる事もあるシャーロックの条理予知を盲信しての事らしいが……こんな本来のだらしない俺しか見てないのに、そんな事を言うなんて。

アリアを始め、俺の能力を認めてくれる女子は――いるにはいるが、それはヒステリアモードの俺を見た上での事だ。そしてあれは、本当の俺じゃない。

本当の俺はご覧の通り、女子に対してぶっきらぼうで、生活力も無い、ダメな男だ。

だがメイドのリサ的には、そういう生活力の無い男の方が良かったらしく……

「さきほどご主人様が仰った、役割分担の話は――リサも、しようと思っていたのです。お料理、お洗濯、お掃除、リサは何でもします。ご主人様が望むことなら、どんな事でもいたします。その代わり……戦いたくない、傷つきたくないリサに代わって、その御手に銃を、剣を持ってください。そうして、リサを苦しめるものから救ってください」

早くも俺をご主人様呼ばわりで、そんな請願をしてくる。

まあ……役割分担についてはそもそも俺が言い出した事だし、否定する必要はないか。

「それは、そうするつもりだ。女を守って男が戦うのは、義務みたいなもんだしな」

今日日こんな男女の関係は流行らないが、俺とリサに限って言えば成り立つかもだ。と、俺がリサの話を受け入れると――

リサは感極まって、ぽろ……ぽろ。ぽろぽろ。

溜まっていた感動の涙を、その大きな目から次々に零し始めた。

そして顔の下で手のひらを組んで、俺を見上げ――

「遠山キンジ様。リサは、ご主人様を元気づける妹になりま す。慈しむ姉になります。お母様にもなれるよう、努めます。ご主人様の身の回りのお世話はみんなリサがしてさしあげます。メイドの身分は忘れませんが、ご主人様の家族の一員になれるよう頑張ります。だから、どうかリサと一緒の時は――家族と一緒にいるように、寛いでお過ごし下さいませ。今からこの身は全て、頭から爪先までご主人様の所有物です」

などと、どうやら昔から用意していたらしいセリフを日本語で宣誓してきた。

流れで容認しちまったが、リサはリサでパーソナリティーに問題がありそうだぞコレ。アリアとか理子とかとは別の意味で……どっちかというと白雪・レキ系の問題児の傾向が見られる。

だが俺とリサの逃避行に退路はない。というか、ここが退路の果てだ。リサのこれも、受け入れざるを得ないだろう。俺たちは2人しかいないんだから、その片方がなりたいという立場は出来るだけ容認してやるべきだ。

ご主人様とメイドという関係になろうと、とにかく力を合わせて生き抜く事が先決。

そしてまずは妖刀にやられた傷を癒やし、それから師団に紛れた裏切り者が見つかるか、自分で見つけ出すまで粘るんだ。この――ブータンジェで。

リサが案内してくれた、オールドファッションながらもキレイで広い家は――上から見ればロの字形をした、中庭のある、四角い煉瓦長屋の一室だった。

「おやまあ、美人が2人。同性でご結婚なさってるのかしらね？」

「いえ。私は彼女にお仕えする身です。それと……彼女には少し障害があって、お言葉が不自由ですので、御用の際は私をお呼び出しくださいね」

「ええ、ええ、構いませんよ」

乳白色のカーペットが敷き詰められたリビングで、大家のお婆ちゃんとリサが話してる。

オランダ語なのでよく分からんが、俺はリサに言われた通り無言を通す。

しかしこのお婆ちゃん、デカイな。武藤ぐらい身長があるんだけど。オランダの女性の平均身長から考えれば、いてもおかしくないが……自分よりでかいお婆ちゃんってのは、目の当たりにするとショッキングだぜ。

「ではとりあえず、1ヶ月ごとの契約で……」

と、リサは入居のサインを契約書に書いてる。メイド学校でレタリングを習ったのか、このサインが偽名なのに流麗な文字だ。末尾には偽造防止のためか、犬みたいなキャラを描き加えてる。そこは女の子っぽくて、可愛いな。

お婆ちゃんの大家さんは、契約書とテントウムシ印の紋が入ったカンテラを手に去っていき……

「……とりあえず、隠れ家も確保できたな」

「はい。ご協力ありがとうございました」

ドアに耳を付けて大家が立ち去ったのを確認していたリサが、振り返る。

リサと目が合った俺は、その足に履かれたままの黒いブーツに視線を落とす。

「ところで前から疑問なんだが、お前たちヨーロッパ人は何で靴のまま家に入るんだ？　郷に入りては郷に従うつもりではあるんだが、それだけはどうしても生理的にダメなんだ。脱いでくれよ」

自分も靴を脱ぎながら、俺がそう言うと――

「はい。ご主人様」

リサはニッコリ笑って、メイドさんならではのお返事。

マットの敷かれた玄関に片膝を突いて、脱ぎ脱ぎ。

ブーツを脱いで、黒ストッキングの足で直立姿勢に戻った。

家の中では靴を脱げ。これが主人としてメイドに下した、俺の最初の命令だな。

「明日にでも、スリッパを買いますね。色柄のお好みもあると思いますので、ご主人様もご一緒に――」

「いや、俺は行かない。目立ちたくないし、何よりこの変装姿を人前に晒したくないんだ。買い物は任せる。色の好みは無い」

と、忌々しいウィッグを外して変装を解いた俺に――

「はい。ご主人様」

リサはまたニコニコ顔で、そう答えてくる。

メイドさんとして、ご主人様に命令されるのは嬉しい事らしい。

「俺は基本、外に出ないからな」

「はい。ご主人様」

こうして――初日にして、ひきこもりのご主人様になった俺は……

さっきはチェックできていなかった、室内の様子を見て回る。

オランダ人の体のサイズに合わせてあるんだろうが、広い部屋だ。

ホール、リビング、ダイニング、キッチン、ベッドルーム、あと小さな居室が2つと、風呂・トイレがある。ちょっと古かったが、家具や食器は最初から全てついていた。壁の油彩画、戸棚に飾られたブロンズの置物、タオルやシーツや毛布まで、何もかもだ。

「いかがでしょう？　このお部屋は」

キッチンでサイフォンのコーヒーメーカーを見ていると、リサが尋ねてきた。

「上々だよ」

と、俺はリビングに戻り、観葉植物の置かれた迫り出し窓から夜の町を眺める。

枯れ木の向こうに、角張った濠の防塁が見えて……景色も悪くないな。

アムステルダムにあったような赤ランプ街もなさそうだし、個人的にも好立地だ。

（ここが、隠れ家か……）

さすがリサ。100点満点だ。

この煉瓦長屋は町によく溶け込んでるから、ヘンに注目される事もないだろうしな。

俺はここで――傷が癒え次第、身の潔白を証明するために動かなければならない。

それをこんな田舎町でどう実行すればいいのか、今は全く思い浮かばないが……

考えるのは、明日からにしよう。

「――ご主人様。一つ、よろしいでしょうか」

「何だ」

「この絵は……あまりいい絵ではないと思うのです。外してもよろしいでしょうか」

リビングの壁に掛けられた、夜の満月と草原の絵を見てリサがそんな事を言ってきた。

何やら、妙にこの満月の絵が気に入らないみたいな表情をしている。

「ああ、好きにしていい」
俺はジーサードみたいな美的センスは無いしな。
俺の許可を受けて、そそくさと油絵を片付けたリサは……
リビングに戻ってきて俺をチラチラ見ながら、はにかむような笑顔でモジモジしてる。
「……何だ？」
「あっ……失礼いたしました。その、やっとリサにもご主人様ができた事が…嬉しくて。あと、男性と一つ屋根の下で2人で暮らすなんて初めてですので。それも……」
男性と、一つ屋根の下で……
それの何が嬉しいんだろう。異性なんかが家にいたら、面倒なのが基本だと思うんだが。
「メイドなのにか？」
俺が適当に尋ねると、
「アヴェ・デュ・アンク家の女は二君に仕えず。一生で一人の男性にしかお仕えしません。その御方と、生涯添い遂げるのです」

なんか……重いことを言ってきたぞ。
だがまあ、ここでリサの機嫌を損ねるような発言はしない方がいい。聞き流すか。
「ご主人様。私の勇者様。サムライとして戦ってきた今までの日々は、大変だったことと思います。でも、このお家の中ではリサがうんと優しく癒してさしあげますからね」
キラキラした目で俺に語るリサは、就職先にありついてやる気満々の新入社員みたいなムード。なんかメイドさんとして覚醒したカンジだな。

本来は2人で寝るために作られたのであろう、大きなベッドで1人寝た翌朝
教会から聞こえてくる鐘の音で、目が覚めた。
個室にあった小さなベッドで寝たリサは……早起きして買い物を済ませてきたらしく、キッチンで鼻歌交じりに朝食を作っているようだ。
着替えた俺は寝室のドアを出た所に置かれてたブラウンのスリッパをはき、リビングのソファーに腰を下ろす。

「あっ。おはようございます、ご主人様」
ぱたぱたとピンクのスリッパを鳴らして出てきたリサは、日本式にぺっこりお辞儀。
金髪の髪がサラリと流れて、今は晴れている空からの朝日に煌めいてる。
「ああ、おはよう」
「日本のことわざに、『腹が減っては戦ができぬ』とあるとか。いま、とっても美味しいごちそうを作って差し上げますからね」
花の綻ぶような笑顔でキッチンに戻ったリサは——
しばらくすると、次々とダイニングテーブルに料理を運んできた。
「今朝はオランダ料理にいたしました。お口に合わないものがございましたら、遠慮なくおっしゃってくださいね」
テーブルにつくと、俺の前に並べられたのは……
新鮮なサラダとニシンの刺し身。チーズ・ローストビーフ・目玉焼きがパンに載った、『パンちらし寿司』みたいな料理——アイツマイター。丸っこいケーキ。
「あと、デザートにフルーツもありますので」

と、自分も席についたリサだが……白雪みたいに過剰な量を作らない点は好感が持てるな。俺の腹の空き具合を予測して、適量を作ってくれてるカンジだ。
そうして2人で食べた、オランダ料理は——
フランス料理のような優雅さやイタリア料理のようなお馴染み感は無いものの、素朴で、美味かった。というかそもそも、パンやチーズが美味い。俺が今までの人生で食ってきたパンとチーズは何だったのかと思うほどだ。日本の米がアジア諸国で美食として扱われているように、オランダはパンやチーズの味が優れているんだな。
そんな事を考えながら無言で食べていると、
「あの……お味はいかがですか？」
リサがこわごわ聞いてきたので、
「ん、うまいよ」
と答えると、リサは手を合わせて喜んでる。幸せいっぱい、って感じの笑顔で。
コイツの性格は、さっきもちょっとカブったけど……白雪系かもな。だとしたらあまり調子に乗せない方が後々の身のためなので、俺はケチをつける点を

探すものの……

無いな。完璧（かんぺき）だ。この朝食。

ただ……

「フランスもそうだったが、こっちじゃ本当にパンが主食なんだな。米は食べないのか」

「ございますが、日本米ではなくアメリカ米が主流なのです。申しわけありません……」

リサはそう言いつつ、ボウルからサラダのおかわりを俺（おれ）に取り分けようとして――

広いテーブルのこっち側へ、上半身を乗り出してきた。

そのせいで、ゆったりしたブラウスの胸元（むなもと）にできたスキマから、

（……う、うおッ……！）

半分ぐらい見えちまったよ。中身がっ。

で、でかい。こっちも白雪（しらゆき）級だ。

白い下着のフリルまでチラッと見えちまったし、ヒス的には困る要素だぞこれは。

俺の視線に気付いてか気付かずか、イスに戻ったリサはブラウスの胸元を整え――

「ふふっ。ご主人様は、ご主人様属性をお持ちですね」

「な、何だよそれ」

「なんと言いますか、お世話しなきゃいけない気分になるんです。そうしないと、なぜか心配になっちゃうんです」

あー……白雪にも昔、そんな事を言われた気がするなぁ。

だが属性はともかく、今まで俺の立場はご主人様じゃなくてドレイだったんだよ。あの、ちっこい女王様のな。

デザートのフルーツも食べ終わり、食後のコーヒーを飲んでいると……

「そういえば、カツェ様は眷属（グレナダ）の電話会議で遠山（とおやま）様――ご主人様の話ばかりなさっていたのですが……一つ、お伺（うかが）いしてもよろしいですか」

「ん……何だ？」

「ご主人様は魔女連隊（レギメント・ヘクセ）の飛行船から、2千mも転落なされたとか。それでも生還なされたとのことですが、ひょっとして、飛べるのでしょうか？」

「んなワケねーだろ。俺にハネが生えてるように見えるか？　あれはカツェと

取り合いになったパラシュートが開いた直後に、モンブランの斜面に落ちたんだ。平面に落ちてたら死んでたとこだが、斜面だと滑り落ちるような形になる。それで衝撃が半減したんだよ」

「まあ……ご武運にも恵まれているのですね。さすがリサのご主人様です」

「運が良かったら、いま師団に追われてないさ。ていうか別の話にしてくれよ。ようやく一安心できたところなんだし、死にかけたような話は思い出したくないんだ」

「しっ、失礼いたしました」

ぺこ。リサは頭を下げて謝りつつ、ブラウスの胸元をちょっと押さえた。

やっぱりバレてたな。さっき本能的に、そのスキマを見ちゃった事。恥ずいぜ。

「あの、では別の話題という事で……私の服、と言いますか、外見の事なのですが」

リサもリサでちょっと恥じらいながら、ブラウスの、じゃない、服の話をしてきた。

「ご主人様は、女性の外見にお好みはございますでしょうか」

「が、外見？　無い。なんでそんなこと聞くんだ」

「リサは、ご主人様好みの姿になりたいのです。痩せろと言われれば痩せますし、太れと言われれば太ります。ご主人様がお好きな髪型に変えますし、ご覧の通りにいたしますので、何なりとお命じください」

「なっ、何アホなこと言ってんだよ」

「仕えるとは、そういう事ですので」

リサは、キリッ。そこは譲らないという顔をする。

「そういうのは、別にッ……ないから。そもそも、俺は女は――」

――ニガテなんだ。

と言いかけ、この調子じゃリサはそう言われたら性転換してきかねないので言葉を飲む。

「えーっとだな。あー……じゃあ、服については自分で考えろ。これは命令な」

「はい、ご主人様。それでは自分で考えて、メイド装束を繕わせていただきますね」

なるほど。急場しのぎだったが、これは発見だ。

『これは命令』と言えば、ヒステリア系の難所は何でも切り抜けられるっぽいぞ。リサに対しては。これは――一緒に過ごしやすい相手かもしれん。女としても。

その昼、リサは再び買い物に出かけて……

計ってもないのにサイズがピッタリな俺の衣類と、自分用と称してけっこうな量の布を買い付けてきた。聞けばどっちも、ちゃんと防弾繊維らしい。

そして自室にこもり、何やら手際よく服を作ってる。お裁縫が好きなのか、女子らしくハミングしつつ。

着替えた俺は……静養のついでに、リビングのテレビをつけてみる。

ローカル局もあったが、オランダは人口1600万人程度の小国とあって放送も海外に頼っている部分が多いようだ。ドイツやトルコ、イギリスやアメリカの局が映る。だが、もちろん日本語の番組は無い。

なので俺は仕方なく、ユーロスポーツというスポーツ専門チャンネルを観る。

これなら言葉はあまり関係ないからな。

今流れているのは、サッカー……イタリアVSオランダ、国際親善試合か。

不知火なら喜びそうだな。あいつ欧州リーグ詳しいし。

（あ、オランダのベンチに本田圭佑がいる）

久しぶりに見た日本人が活躍する事に期待しつつ、試合を観戦していたら……

「ご主人様、お楽しみの所すみません」

話しかけてきた、リサに――

「ちょっ……！　お前、何だよそれっ……！　うちの学校の、か!?」

振り向くと同時に、ボレー・シュートを決められた。ような気分になった。

リサが着て現れた自作の服は、フリフリのフリルやヘッドドレスに飾られたメイド服。純白のエプロンつき。

いや、そこまでは想定の範囲内だったんだが……

そのデザインには、襟の形やスカートの短さにセーラー服っぽさがプラスされている。しかも臙脂色の。

つまり武偵高の女子制服とメイド服が融合した、セーラーメイド服だぞ。

なんちゅうマニアックな。

「はい。通常のお仕え着に、東京武偵高の女子制服デザインを加えてみました。

でも……少し、恥ずかしいですね。メイド服もセーラー服も、日本では伝統的なコスプレの衣装とされているそうですし。武偵高のスカートは、短いですし……」

苦笑いしてスカートをちょっとつまんだ、リサの動作で――

左右の太ももにそれぞれ、白いレースのフリルつきのリングみたいな細布が巻き付いているのがチラ見えした。レッグホルスターか？

「そ、その……スカートの中。足を縛ってるようなレースの輪っかは何だ？」

武器を収めるにしては脆弱そうだったので、指摘しようと思って尋ねると――

「これはキャットガーターです。ストッキングを着用せず、いわゆる生足で過ごす際に、スカートの内側を華やかに装う飾り布になります。ご覧になりますか？」

と、いきなりリサは短い赤メイド服のスカートをたくし上げようとする。

「――いや、いいから！」

主人のためなら一枚でも二枚でもめくれるらしいリサを、大慌てで止めるが……

なんなのそれ。ほんと、世の中には用途の分からん下着が存在するもんだな。

なぜスカート内部という見えない場所を華やかに飾る必要があるんだよ。

それに、ガーターなる物質にはナチのアジトでトラウマのある俺だ。

もうリサのスカート内部については触れず、スルーで通そう。

「では、改めてこのメイド衣装ですが……いかがでしょうか？　お気に召しませんようでしたら、仕立て直します」

聞かれたので脳内で品評するが、こっちをニコニコ見てくるリサのメイド服は……

……カワイイ。

セーラー服アレンジが入ってるものの、さすが元祖萌え服だけある。そういうのに疎い俺でも、これが元々リサのような白人女性が着るものだった事ぐらいは知っている。

かつて理子に入店を強要された秋葉原のメイドカフェにいたメイドさんたちは、やはりコスプレ感があったし……紅鳴館でメイド服を着たアリアはそれはそれで可愛かったが、あれは体型の都合もありアニメのマスコットキャラっぽかった。

一方、純血の白人美少女ことリサがメイド服を着ると――

コスプレ感が無い。自然だ。逆にセーラー服っぽい部分の方が目立つが、それはそれでほどよいアクセントになってる。ただ、足がほぼ丸出しなのは目の毒なので……

「……似合ってるよ。ただ、スカートは長くしてくれ」

と、俺は思考を簡潔にまとめて答えておいた。

元々リサはメイド学校に通っていただけあって、仕草というか身のこなしに品があったしな。それが衣装にマッチしてる。まさに、ザ・メイドさんってカンジだよ。

「――よかったです！　それではスカートをロングに変えて3着ほど作らせていただき、今後はこの衣装でご奉仕させていただきますね」

リサは心底嬉しそうに、組んだ両手を美人顔の頬に添えて喜んでる。

そう。このメイド服の中のリサ本体は、えらい美人なのだ。改めて見ると。

その美人がカワイイ衣装を着こなすと、非の打ち所がなくなる。パーフェクトだ。

つまり、ヒス持ち的にはパーフェクトに悩ましい存在という事になる。

今さらの感はあるが、対女子警戒レベルを2（注意）から3（警戒）に上げとこう。

「ところで話は変わるが……俺は、イタリアの銀行カードを持ってるんだ。今まで使ってなかったんだが、オランダでも使えるものかな」

服の話を切り上げたかった俺はサイフを取り出し、日本でベレッタ社からもらっていたカードを渡すと――

「はい。これはウニクレディト・グループの、EU圏内でならどの国でも使えるバンク・カードです」

リサはそれを確認してすぐ返してこようとするので、逆に押しつける。

「俺には毎月、某社からその口座に金が入る。日本語でいう奨学金、欧米で言うところの無利息学生ローンってヤツだ。入金後2週間で日本の口座に全額国際送金されるんだが、その前にユーロのまま引き出すこともできる。次の入金も近いから、電子記録が残らないよう窓口で落としてきてくれ。暗証番号は1111だ」

「承りました」

「で、その金だが……必要な物は注文するが、残りはお前がやりくりして生活費にあててくれ。小遣いも欲しけりゃ勝手に取っていい。ただし常識的な額だぞ」

本音としては通貨換算とかが面倒くさかったので、家計を丸投げすると――

「そ、そんな……ご主人様」

リサはカードを手に、そこまで自分が信用されていた事に戸惑って眉尻を下げた。

「言ったろ、役割分担しようって。会計はお前の特技なんだから、ここにいる限り資金に関してはお前に任せる。これは命令な」

そう言われると、リサはカードをメイド服の胸に寄せて持ち――

「……はい。ご主人様……！」

また感動して涙ぐみつつ、頭を下げてくるのだった。

生粋のメイドだけあって、リサは家事が大好きだ。

朝、家の中をピカピカに掃除してウットリ眺め回したかと思うと、昼にはアルバート・ハインというスーパーに行って上質な食材を安く買ってくる。俺が『なんかのアメ玉』とアバウトにした注文には、日本人にも馴染みのあるヴェルタース・オリジナルを選択してしっかり対応。

ご主人様に『ももまん買ってきて！』と命令されて売ってなかったからあんまん買ってきてバリツ投げを食らってた俺や、タマゴ麺1つ平穏に買えてなかった猴とは、パシリとしての格が違うな。使いっ走りのトップエリートだ。

先日の宣誓通り、身の回りの事はリサが何もかもやってくれるので――

俺はここで、まず妖刀にやられた傷の療養に専念できた。脇腹のアザはドス黒くなっているが、赤い腫れは引いた。快方に向かっているという事だ。

だが、夜。

リサが作ってくれた夕食を食べた後は……とにかくヒマをもてあます。

テレビも意味不明だし、携帯は壊されたし、ネットは逆探知防止のためそもそも回線を契約していないしな。

なので、俺が早めに寝ようとすると――リサはその気配も察し、ベッドメイクに先回り。俺がフロから上がった頃には、寝室の照明も薄暗く落とされていて、寝心地のよさそうな空間が出来上がっていた。

「お寝間着はこちらに。お傷の具合は……あとしばらく安静が必要そうですね」

寝室で待機していたセーラーメイド服の――命令通り、ちゃんとロングスカートの――リサは、ベッドの上に畳んで置いたパジャマを白い手で示してくれる。

「あ、ああ。ありがとな」

だがこっちはバスタオルを巻いただけの姿だったので、改めてバスルームに引っ込むと……そんな俺を、リサが寝室とバスルームの間にあるドアまで少し追いかけてきた。

そして珍しくこっちを直視せず、ドアから半身だけをモジモジと見せてくる。
頬をピンクに染めたリサは、
「……夜伽は、お傷が治ってからにいたしますね。お体を使う行為ですし……」
目を逸らしつつ小声で言い残し、ひらりと回れ右して——ぱたぱたぱた。
スリッパを鳴らし、自分の小部屋へ逃げていってしまった。
ヨトギ……って、何だ？　たぶん日本語だと思うんだが、意味が分からん。
ホトギならずいぶん迷惑なのがいるけどな。
だが日本人の俺が知らない日本語の意味をオランダ人のリサに聞くのは、恥ずかしくてできん。
ここは知ったかぶりで、今の話を了承した的に黙っておこう。
と、俺は何も言わず、リサがきちんとベッドの上に畳んで置いてくれていたパジャマに着替えて……でかいベッドに寝ころんだ。
そして、窓越しに夜空を眺める。
ここは寝室。角度的に、他の住人から俺の男姿を見られる事もない造りになっている。
雲間に時々見える星が、キレイだ。

（キレイで可愛くて、賢くて、家事が万能な、俺のメイドさん……か）
理子的なゲームの世界では、メイドさんは良い物として描かれていたが——
そこは、現実でも同じだな。リサには今のところ、ハッキリとした欠点といえる欠点は見られない。むしろ長所だらけだ。甲斐甲斐しさから感じた若干の重さにも、もう慣れた。
ただ、やはり戦闘に関しては——ただの女の子レベル、いや、それ以下だろう。一緒に過ごせばすぐに分かる事だが、あの体、あの身のこなしはまさに『家』で活動するために特化されたもの。あの地下道で俺の接近をあそこまで許した辺り、警戒心にも乏しそうだ。
（役割分担、と言ったが……宣言通り、戦闘面に関しては俺がしっかりしなきゃな）
星空も見飽きた俺は、ベッドサイドテーブルのメモ紙を1枚取って……
ヒマにあかせて折り紙なんかをしつつ、そんな事を考えるのだった。
翌朝、また教会の鐘に起こされた俺は——
（……？）

鐘の音が昨日より元気な事と、この煉瓦長屋から人の気配が消えている事に気付く。

窓から中庭越しに、コッソリと各部屋の窓を見回すが……マジで誰もいなくなってる。

庭を歩いてるのは大家が飼ってるシャム猫だけだ。

（みんなでどこかに出かけて、イベントでもやってるのか？）

フシギに思いつつも着替えて、リビングに出ると……『お買い物に行ってまいります。9時には戻ります』という書き置きを残して、リサもいなくなっていた。

なので俺は、昨日リサ経由で物持ちの大家に借りていた工具を使って――

モンブラン上空で酷使して壊れた、ベルトのワイヤー・ウインチを修理して過ごす。

9時前、また教会の鐘が元気よく鳴り始めたので――

俺は中庭に出て外の空気を味わいつつ、捨ててあった煉瓦と土、それと空き缶で簡易な射撃練習用のターゲットを作った。

そしてそれを、約7mの距離から……

発砲音を鐘の音に紛れさせつつ、ベレッタで撃つ。

9㎜弾は全弾命中するが――日常の射撃訓練というものは、当たる外れるは大した問題ではない。ジャンヌが剣舞でやっていたのと同様、銃の重さや形状、抜銃・発砲の感覚を手や体に忘れさせない事が重要なのだ。

生と死がギリギリの所でせめぎあう実戦に於いては、銃はコンマ1秒・1ミリのズレも許してくれない。そしてそれに応えられるのは他ならぬ帯銃者――自分だけ。

そこでは、感覚だけが頼りだ。その感覚は、数日間でも撃たなければすぐ鈍る。人間はもちろん、銃だって生き物のように……発砲するたび、僅かずつ変化する。そのアナログとアナログの関係で成り立つのが、射撃という行為なのだ。

そんな、いわば俺とベレッタの申し合わせ訓練は――

ダメだな。不調。

蘭豹に見られたらブン殴られるレベルだね。

とはいえ、これは明らかに俺が負傷してるせいだという事も分かる。腹の傷が治れば、調子も戻るだろう。ここに潜伏できたおかげで、その時間も稼げそ

うだしな。

（まあ、希望は持てる……という判定にしとくか）

最後の一発を、缶にまた当てると――ぱちぱちぱち。拍手の音に、振り向かされた。

「――ご主人様、すごいです！　すごいですご主人様！　ステキです！」

同じ事を2度言ったリサが、セーラーメイド服で中庭に立っている。

そのメイド服を揺らすオランダの風が、ふわり。

硝煙の臭いを空に運び、代わりにリサのメープルシロップみたいな甘い香りを上書きしてくれた。

――それと、パームオリーブの洗剤の香りを上書きしてくれた。

「ご主人様は銃の練習を欠かさないのですね。さすがです。かっこいいです。ステキっ」

リサは俺が銃でマト当てしてるのを見ただけで、大喜びだ。自分専用のヒーローを見るように目をキラキラ輝かせ、オランダ語の褒め言葉らしい『もーい』を連発してる。

「いや、拳銃訓練は……ヒマだったからやってただけだ。こんな事より、おしゃべりでもしてた方がいいさ」

この程度の事で褒められるのは恥ずかしかったので、俺はそう言って拳銃をショルダーホルスターに収める。

「おしゃべり、リサは大歓迎ですよ。ご主人様となら、何時間でも話していたいです」

「……そう言われると、何を喋ったもんか……ああ、そうだ。なんかここ、朝から住民がいないんだが。なんでだ？」

「今日は日曜日ですので、皆さん教会に出かけているのです。お昼には戻ってきますよ」

へー。そういう事だったのか。

しかし、キリスト教徒は毎週日曜にお参りしなきゃいけないのか。面倒じゃないのかな。

「お前は行かなくていいのか？」

「はい。私は神を信じていませんから」

「――ハッキリ言う欧米人もいたもんだな。だが俺も教会は門外漢だ。家系的には神道と仏教のチャンポンだし、言うほど信心深い方じゃないんでな」

リサはニコニコと、俺の話を聞いてくれてたが……それ以上、特に俺は喋る

ネタがない。
いざ喋ろうと思ったら、女子相手には話題が思いつかないんだよな。俺。しかも美人が相手となると、気後れする。男相手にならいくらでも喋れるんだが。
と、言葉に詰まっていると――
「――あの。ところで……話は変わりますが、ご主人様。これ、ベッドサイドにあったのですが」
リサは沈黙が重くなる前の適切なタイミングで、自分から話してくれた。
空気読めるなーお前。
俺の知らんゲームとかアニメの話を遠慮ゼロでエンドレスに喋る理子とか、俺が黙ると一緒にモジモジ黙る白雪とかに、話し方講座をやってくれよ。ついでに中空知にも。
「この風車は、ご主人様がお作りになられたのですか？」
と言うリサが手にしている物を見ると……
俺が寝しなに作って放置していた、メモ紙の風車だ。
最初は折り鶴をと思ったんだけど、折り方を忘れてたんで――風車を折った

んだっけ。
「あ、ああ。俺が作った」
「――モーイ！　紙を風車に変えられるなんて……私のご主人様は、なんと器用な人なのでしょう。ご主人様、これ、リサに下さいませ」
リサは折り紙を両手で大事そうに持って、また大きなお目々で俺におねだりしてくる。
「欲しけりゃ、やるよ」
と俺が言うと、リサは心の底から嬉しそうに風車を抱きしめた。
「ありがとうございます！　リサ、ご主人様からの頂き物――一生大切にいたしますね」
なんか……マジで喜んでるよ。そんなモノを。
オランダ人にはツボったのかもなぁ。風車だし。
俺の傷もかなり癒えてきた、数日後の夕方――
買い物に行ったリサが帰ってこない、という珍事が起きた。
別に道草を食ってようと構わないんだが、リサは家を出る時は何時に帰るか

言い、その時間にピッタリ帰ってくる時計みたいな女だという事がここ数日で分かっている。

それが遅刻というのは、気になる。

それに俺的にも、遠い異国の地で1人だと……なんというか……淋しいんだよな。

ここはやたら静かだし。

ベレッタの完全分解整備もしたし、バックルもとっくに直しちまったし。

女の帰宅を待ちわびるってガラじゃないが、とにかく話し相手が欲しい。リサに、会いたい。何をしたいってワケじゃないんだが、いてほしいと思わせる存在なんだ。リサは。

いつ帰ってくるのかと、カーテンの隙間から外の通りを窺っていると――

あれ。

いるじゃん。リサ。セーラーメイド服で、長屋のすぐ前の通りに。

だがリサはしゃがんで顔を手で覆い、泣いちゃってる。

その理由はすぐ分かった。

近所の子供たちに、なんか、絡まれてるんだ。その内の1人、太ったガキ大将みたいな男の子にデカい犬をけしかけられている。

犬も面白がって、しゃがんだリサに跳び蹴りを食らわせたりしてるよ。

4～5人の悪ガキたちは臆病なリサをナメきった様子で、ワイワイと囃し立ててる。

（ていうか、リサ……子供や犬にすら勝てないのに、眷属の代表戦上やってたのか……）

猴も犬猿の仲で犬には弱かったが、眷属には犬がニガテなヤツが多いのかもな。将来、俺の代わりにハイマキを出撃させる作戦を提案しよう。

などと傍観してる場合じゃなさそうだ。調子に乗ったガキ大将が、バケツに汲んだ水を持ってきてリサにかけようと脅かしてるぞ。この寒い真冬に。

「……」

俺は、帽子掛けに垂らした黒髪のウィッグとコートを横目に見る。

あれで変装して出るのは、本当にイヤだし……

別に、命に係わるような事態には発展しなさそうなんだが……

（……武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ）

アイツを守るのは、俺にとっちゃ契約みたいなもんだからな。

イヤだけど……行くか。ちょっとした武器を持って。

というわけで、黒メーテルに化けて家を出ると――

泣いているリサに、興奮状態の犬がまさに噛みつこうとしていた。

それはさすがにマズいので、俺が駆け出そうとした時。

（……!?）

ほんの一瞬、リサに一瞥された犬が――地面を蹴って、急に１８０度ターンした。

そして太った少年を引きずって、全力で逃げていく。

何だ。犬の怯え方が、異常だ。追いつめられたリサが……何かしたのか？

だが他の子供たちにワイワイとイジメられているリサは今、しゃがんで泣いてるだけだ。

「……」

なので、俺は子供たちのところへ歩いていき――バッ！

と、アメ玉……ヴェルタース・オリジナルをあさっての方向にバラ撒いた。

アメ玉は万国共通で子供の好物。それを見た悪ガキたちは、わぁーっ、と歓

声を上げて我先にとヴェルタースを拾い集めに散開していく。

ついでに煉瓦長屋からは騒ぎを聞きつけた、大家の巨大お婆ちゃんがホウキを手に出てきて――何やらオランダ語で子供たちを叱り、追い払ってくれている。

その隙に、震えてるリサを支えて立たせ……無事、俺たちは家に戻る事ができた。

ドアを閉めると、

「ひっく、ひっく……ご主人様、ありがとうございます。本当にありがとうございます。リサはダメなメイドです、ご主人様のお手を煩わせるなんて……」

「気にするなよ。ケガとかさせられなかったか？」

「はい。でも……ご主人様は、そのお姿で外に出るのをいやがってたのに……リサのせい、リサのせいで……」

リサはウルウルと涙に濡れた目で、心底申しわけなさそうに俺を見つめ上げてくる。

「いいから。そりゃ変装はイヤだが……こんな事で言うのもアレだけど、俺がお前を守るのは、俺たちの決まりだろ。ていうか何でからかわれてたんだよ、

お前」

ウィッグを外し、コートも脱いだ俺が尋ねると――

「その、私の服が水兵の服だと思われたらしくて……『海のないここに水兵がいるぞ』と笑われたのです」

セーラーメイド服のリサは、自分の手でV字形の襟に触れて説明してくる。

（ああ……）

現代日本じゃ女子の制服として使われてるが、セーラー服は元々、海軍の軍服だからな。男子の詰め襟が元々陸軍の軍服なのと対をなす形で。

「……もしアレだったら、もう着なくていいぞ」

「いいえ、リサは逃げません。ご主人様が『似合ってる』と褒めて下さったこの衣装は、リサの誇りなのです。それに、大家さんが先ほど『海軍をバカにする子は許さないよ』と釘を刺して下さっています。むしろこれからは、この衣装で過ごした方が安全かと……」

リサは涙を白い指で拭って、俺にそう言ってくる。

俺も……からかわれたからって、武偵高の一部でもある赤セーラー服をやめさせるのは腹立たしい。ので、

「またアイツらにイジメられたら、俺が追い払ってやるから。俺はお前を守る。約束だ」

と、リサを落ち着かせるためにも改めてそう言ってやる。

するとリサは、それが心から嬉しかったらしく――

――はしっ。と、抱きついてきた。

「お、おいッ……」

って。や、柔らかっ……

しかも、い、いいニオイが。髪から、体から、女らしくて、甘い――

こ、これはダメだろ。かりそめの主従関係的にも。ヒス的な意味でも……！

「ご主人様。リサのご主人様。正直に申し上げます。さっきリサは、犬に吠えられながら――『ご主人様、ご主人様』と、胸の中でそればかり願っていたのです。そこに、本当にご主人様が現れて、リサを助けて下さって……リサは、リサは、夢を見ているような心地でした。本当に、本当に嬉しかったのです。リサは今、本当に幸せなのです……！」

よっぽど安心したのか、リサは俺に抱きついたまま離れてくれない。

（ていうか俺、子供を追い払っただけなんだけど……）

こんなにも感謝されるなんて。
リサにとっては、俺が――戦闘という程の事じゃないにせよ、リサを救うという契約を履行した事が嬉しかったんだろうな。
「ご主人様……ご主人様……」
いつしかリサは、すりすり。ネコがニオイ付けをするように、俺の胸に頬ずりをしてる。
マンガで言えば、ハートマークが周囲に浮かんでるムードだぞ。甘えきってるカンジだ。
「も、もういいだろ。意外と甘えん坊だったんだな、お前」
と、ちょっと肩を押して離そうとするが……
「……はい。リサは……本当は、甘えん坊なのです。甘える時はご主人様に甘えてしまう、いけないメイドなのです。何とぞ、お許し下さいませ。ご主人様……」
開き直りやがった。
これも普通の男ならむしろメイドとして加点要素な、嬉しい甘えなのかもしれんが……

こ、困るんだって。俺は。こういうのは。あーもう。
――就寝中。
キシッ……と、何者かがベッドに上がってきた気がした――
何だ。
誰だ。
リサか？
だが不思議な事に、体が動かない。
金縛りに遭っている、のか？
「お前は本物だったみたいだな、遠山キンジ」
フードの下から聞こえるような、くぐもった……男の声。
この声は……！
（――妖刀――夜襲かッ！）
それに気付いた、次の瞬間。
――トンッ――
胸の中央やや左寄りに、なんの抵抗感もなく、冷たい感触が滑り込んだ。

刺されたのだ。
防弾・防刃性能のないパジャマ越しに。
心臓を。一突きに。
殺られたッ……！
「――うおォッ！」
がばっ！　と、上体を起こすと……
そこは暗く、静かなベッドルームだった。
白いベッドの上には、俺以外には誰もいない。
夢……だった、のか。
胸をさするが、刀なんか刺さってない。
（……チクショウ！）
今の悪夢は……俺が妖刀に潜在意識下で恐怖心を抱いている現れだろう。
確かにアイツは、ケタ外れに強かった。今までに見た師団・眷属のどの敵よりも一段、二段、格上に思えた。
――だが、妖刀。
俺はまだ、お前に完全敗北したワケじゃないぞ。

お前にあの双刀、紅い右眼、コートがあるようにな。
ブリュッセルじゃ不発だったが、こっちがまた不幸にもなった時にでも……
また闘ろうじゃねえか。お前もきっと、ヒス俺の方が気に入るだろうよ。いずれその中二病コートを剥ぎ取って、理子か金三にでもくれてやる。
と、脇腹のアザを押さえていると……とたとたとたっ。
「――ご主人様!?　失礼いたしますっ！」
ベッドルームに、俺のただ事じゃない声を聞きつけたらしいリサが駆け込んできた。
「ッ……！」
このリサが、下着が透けて見えそうなほど薄い白のネグリジェを着て現れたもんだから――さっそく不幸にもなるかと一瞬焦ったが、魘されたばかりの心理状態ではヒステリアモードも発症しない。
額に脂汗をかいたまま、黙っていた俺に――
「ご主人様、お顔の色が真っ青です……！　息苦しいのですか？　お傷が痛むのですか？　すぐ、お薬を――」

「――気にするな。少し……夢を見ただけだ」
リサに『下がれ』的に振った手を、ベッドに突くと……
クソッ。情けない。震えてやがる、俺の指が。
それを見て、よほど酷く魘されていたのだと察したリサは――
「……失礼します……ご主人様」
今度はリアルにベッドを少し軋ませて、俺の隣に上がってきた。
「怖い夢を見られたのですね」
俺の真横に膝を突いたリサは――
そっと、その白くて滑らかな両腕で俺の頭を抱く。
「……」
ふわ……と、甘い、メープルシロップのような甘いニオイがする。リサの香りだ。
その優しい香りに、不思議なほど心が落ち着いていく。
手の震えも……止まった。
「でも、もう大丈夫。ご主人様にはリサがついていますからね。ずっと、ずっと……」

普段なら、ここまで女にくっつかれたら――
ヒステリアモードになりたくなくて、突き離すところだ。
だが、今、俺は……そうしないでいる。
リサという女性には、人を安心させ、柔らかく包み込む……不思議な力がある。そんな気がする。ヒステリア性のものとは違う、落ち着いた気持ちになれる。
なんだか、懐かしい――そう――
「……リサは、ずっと、ご主人様のおそばにおりますからね……」
遠い昔にも、こんな事があったような――
このまま、次は安らかに眠れそうな……そんな、温かい感覚だった。
その後、俺の傷は日に日に回復してきた。
リサが買ってきたり、野山で採取してきた材料から作ってくれた、オランダ流の漢方薬みたいな薬も効いたみたいだ。
――そんなある朝、
「ご主人様。今日はこの町でお祭りがありまして……よろしければ、しばらく

お暇を頂戴できませんでしょうか」

珍しく、ちょっとソワソワしつつのリサがそんな事を言ってきた。
日々かいがいしく働いてくれるリサに、済まないなと思っていた俺は……
「ああ。いいよ。たまには羽を伸ばしてこい」
と、好きにさせることにする。
俺に許可をもらったリサは、昼食をちゃんと先に作ってから——1人、いそいそと祭に出かけるための身繕いをした。
そして自室から出てきた、リサは……
（……へぇ……）
いつものセーラーメイド服から、大家さんに借りてきたオランダの民族衣装に着替えていた。
ここの女性の伝統衣装は、北国だけあって暖かそうなパフスリーブとロングスカートのドレスだ。黒地にヒラヒラした白い飾り布をあしらい、カラフルな刺繍がされている。
俺は『フランダースの犬』でしか見たことがなかったから、リサが着ているのを見るとコスプレみたいにも見えるんだが……
不思議なことに、なんか得も言われぬ色っぽさがあるぞ。あんなに布量の多い服なのに、なんでだ。
と思ったら、胸だ。ブラウスの胸の膨らみの真下に、胴にピッタリ巻き付くコルセットみたいな布パーツがあるもんで、胸の膨らみが袋に包んだみたいに強調されてるんだ。
リサは全体的にはスリムなのに胸だけは大きいので、その身体的ストロングポイントが余すところなく顕示されている。困る。
「ご主人様。こういうリサも、たまにはいかがでしょう？」
と、完璧なオランダ美少女になったリサがニコニコ顔でスカートを広げて尋ねてくる。
お祭りに行くとあって、心なしかテンション高めだな。
「あ、ああ。カワイイよ」
乳袋について語るに落ちぬよう、言葉少なに返す俺に——
「うふふ。大家さんたら、物持ちで……私の足に合うコレも貸してくださったんですよ」
リサは、ちょい、とロングスカートの前面をたくし上げてカラフルな木靴を見せてきた。

「それでは、夕刻5時には帰りますね」
「ああ。楽しんでこいよ」
「おやつはキッチンの戸棚にございますので……」
微笑んで、後ろ歩きで出ていったリサは――
玄関のドアを出る寸前に、ほんのちょっとだけ名残惜しそうな顔をした。
俺と……一緒に行きたかったのかもな。お祭り。
だがリサは、黒メーテルに変装したくない俺が外出したがらない事は知っている。ので、そこは無理強いすることなく1人で出ていってくれたワケだ。
俺が窓際に行って、道を見下ろしていると……
リサは日本人から見ると歩きにくそうな木靴をカラコロ鳴らして、普通に歩いていく。歩き方にコツがあるみたいだ。そこは日本のゲタとかと同じなのかもな。
サッ、と……
伝書鳩だろうか？
十字架マークが描かれた金の首輪をした白鳩が通りの上を飛び、それにつられるようにして――リサが、こっちに振り返る。

俺と目が合ったリサは、俺が自分を見送ってくれていた事にやたら嬉しそうな顔になる。
そしてはにかみながら、小さく手を振って……角の向こうへ消えていった。
……俺は、どっかりとリビングのソファーに腰を下ろし――
静かな家で、またスポーツ専門チャンネルを見るともなく見て時を過ごす。
こうなると、俺は……ひとりぼっちだ。
ユーラシア大陸の西の果て――つまり地の果て、オランダの、さらに果てで。
師団のメンツにも会えないし、通信網を疑っているので東京や香港と連絡も取れない。言葉が分からないから、近所の人と会話する事もできない。
こんな体験、日本じゃ一生できなかったかもな。
東池袋高校で感じたのとはまた別の、もっと深い孤独に陥ってるよ。俺。
（孤独は……キライじゃなかったハズなんだけどな）
1時間、2時間、3時間と……1人でボーッとしてると、どういうわけか……
ここでの唯一の話し相手、リサの事がまた思い出されてくる。
美人で優しくて、かわいいメイド服を着てて、頭がよくて、働き者のリサ。

いつもニコニコと俺に仕えて、たまに甘えん坊になるリサ。

（リサに……会いたい）

ふとそう思ってしまって、苦笑が漏れる。

会いたい、だって？　俺が、しかも女に？

この間もそんな事を思ってたが、何を甘ったれてんだ。女嫌いの遠山キンジ君よ。

雲間に太陽が覗いた、２時半頃。俺は――

黒メーテル状態で、寒い外の通りに出ていた。

これは……べっ別に、リサに対する甘えとかじゃない。

オランダの祭りについて修学旅行Ｖのレポートに書けば、珍しいから単位が割り増しでもらえる可能性だって微粒子レベルでは存在するだろ？

（だから、ちょっと様子を見に行くだけだ）

そう心に呟きながら、冷え冷えする町を歩くと……

お祭りの会場は、すぐに見つける事ができた。

狭い町だし、楽しげな音楽が聞こえてきてたしな。

あの風車小屋のある防塁に町中の人が集まって熱燗のグリューワインで温まり、日本のヤキトリに似た料理を手に盛り上がっている。

風車小屋の前では、あの民族衣装を着たリサと……同じような服を着たオランダの女の子たちが、横一列になってダンスを踊っていた。

カタコトコトッ、トコトコッ、と、石畳の上で木靴が小気味よい音を立てている。

みんなしてあの乳袋ドレスを着てるのは、少々いただけないが……

カワイイな。ああやって普通に、この国の女の子っぽくしてるリサは。

みんなで楽しそうに踊る光景には、寒さを忘れて自然に笑顔になってしまいそうだ。

踊る女の子の列に、雑踏の側からは……段ボール紙のボディー、折れたホウキのキバ、メロンの皮を貼って作った毛皮という……手作り感満載の怪物に扮した男たちが、２人で獅子舞みたいに前足・後足を担当しつつノシノシ歩いてきた。

巨大な、狼みたいな怪物を表現しているらしい。

「禾狼！　禾狼――！」

子供たちが何やら警告すると、踊る少女たちは慌てた演技で風車小屋の陰に隠れていく。

その内の1人がわざとらしく転んで逃げ遅れ、オランダ獅子舞の体が伸びて……がぽっ。胴の中に少女を入れてしまった。食べられちゃった、って意味らしいな。

風車小屋の陰に身を寄せ合ったリサたち踊り娘は、『まあ大変』的な表情でそれに驚く寸劇をやってる。

ていうか、リサの……際立つ、わざとらしさ。演技は上手いのに、演劇はヘタなんだな。

鬱エンドで終わるのかと思いきや、踊り娘たちの1人が風車小屋の陰から出てきて――

荒ぶるオランダ獅子舞を撫でてやり、その腕を喰われる寸劇をやりながらも……怪物の段ボールの頭にキスをした。

そうすると、怪物はおとなしくなる。

どうも『愛の力でモンスターは心を開きました』ってオチらしい。

それで、ダンスはお開きとなったらしいが……

少し、外人の俺には詳細がよく分からなかったな。レポートにも書きようがなさそうだ。

まあ日本の田舎で行われてる祭りも似たようなもんで、外人には分からんだろうけどさ。

などと腕組みしていた俺を、リサは――

「……えっ、ご主人様……!?」

すぐ発見してきた。

俺は口の前に指を立て、『日本語で喋るな』のジェスチャーでそれを迎え――

リサと2人で風車小屋の裏側に腰掛け、ホットワイン……は遠慮して、コーラを片手に小声で話す。

「ご、ご主人様がいらっしゃるとは思いませんでした。油断してましたよ」

素の自分を俺に見られたリサは頬をピンクに染めているが、それよりも俺が来てくれた事に嬉しそうだ。

「さっきの踊り――途中で出てきた怪物みたいなのは、どういう意味なんだ？」

レポート目当てで聞いた俺にリサは、

「あれは……」

珍しく一瞬表情を険しくして言いよどんでから、

「『ジェヴォーダンの獣』――禿狼、狼男……日本語訳は色々ありますが、吸血鬼のライバルとされる伝説の獣です。あらゆる動物を従わせる能力のある、百獣の王なのですよ。18世紀、西ヨーロッパに現れて、村や町を荒らし回ったとか……」

「吸血鬼つったら、ブラドだろ。あれのライバルって事は、ああいうカンジの化け物なのか？」

「ブ、ブラド様……とは違うと思いますよ。もっとずっと美しい金毛の大狼です。当時のフランスで描かれたスケッチもあるのです」

ご当地モンスター・禿狼の肩を持ちつつ、リサは解説してくれるが……

おかげで、詳細なレポートが書けそうだな。ひょっとしたらマジで単位を稼げるかもだ。

「ご主人様、ご存知ですか？　ブータンジェに引っ越してきた、このフローニンゲン州で一番の美人の噂話」

傷もほぼ癒えた数日後の夜、そんな話をリサが振ってきた。

「……フローニンゲン州で一番の、美人？」

個人的には連続殺人鬼が引っ越してきたレベルで警戒すべき話だな。

「町のどこに越してきたんだ」

「ここですよ」

と言うリサは、この話について何かオチのありそうなニコニコ顔。

ああ、なるほど。

「――お前、そこまで美人判定されてるのか。まあ、分からんでもないけどな」

と、レンズ豆のスープを啜りながら素で言うと。

「ちっ、ちがいますよ。ご主人様が変装なさった、クロメーテル女史のことです」

ぶはっ！　と、俺はスープを吹いてしまう。

「なっなんだそれ！　ていうか、クロメーテルって……」

「お祭りにいらしたご主人様の変装姿に、何人もの紳士が虜になってしまったようです。お名前を尋ねられたので、以前ご主人様が作られた偽名で答えておきました。Cromaetel――異国情緒のあるステキなお名前に、皆さんウットリ

されてましたよ」

俺が電車で適当に言ってた、『黒メーテル』をそのまま偽名にしたのか。

ていうか、虜って。紳士の皆さん、あんたら取り返しのつかない過ちを犯してますよ。

いや、過ってるのは俺の方なんだけどさ。

「……勘弁してくれよ……」

頭を抱える俺の前で、主人の評判が（どんなトンチンカンな形であれ）良い事にリサは鼻高々だ。

「当代一の麗しさだけではなく、いつも深窓にいらして人を寄せ付けないミステリアスなムードも人気の秘訣のようです。これも、ご主人様の類い希なるカリスマ性の賜物かと。メイドとしては誇らしい限りですが、女子としては妬ける話でもあります。うふふ」

さすが、不幸に定評のある2年の遠山だ。

ユーラシア大陸の西の果てでも、不幸スキルをいかんなく発動させてるよ。

（やることなすこと、裏目……っ……）

隠れようと思って引きこもって変装してたのに、なんで有名になってんの。

元の状態だと、強襲科以外じゃ「遠山？　誰それ」的な空気なのに。

果てしなく落ち込む俺、にも――

やはり、兄さんと同じ才能があったんだな。全くもって不要な才能だが。そのせいで、変装したら逆に目立っちまったらしい。

だが、ヒステリアモードにはなってない。そこは譲れない最後の一線だ。万一鏡を見てヒスるような事があれば、今度こそ拳銃自殺……は、できない事がシーマ・ハリ号で立証されているから、切腹しよう。介錯は白雪……は、今いないから妖刀でいいやもう。

クロメーテル事件でショックを受けたせいか、すっかりメシが喉を通らなくなって……

体力が低下した隙をウイルスに突かれたのか、カゼを引いてしまった。

（病は気から、ってヤツだな……）

お風呂をいただきます、とバスルームに入っていくリサに生返事をして……

俺は1人、リビングのソファーで頭痛に苛まれる。

セントラルヒーティングの暖房は付けているんだが、寒気もしてきた。これ

は早く寝るべきだと思い、リサが上がるとすぐ俺もシャワーを浴びて、浅いバスタブに湯をはり――パリで習得した棺桶スタイルで風呂に浸かる。

湯から上がったら、すぐ寝ようと思っていたが……いかん。入浴中なのに意識が朦朧としてきた。思ってたより早く、熱が上がってきたな。

湯に浸かっていても、体がゾクゾクする。上がったら倒れるだろう。立てないぞ。

（カゼ薬……特濃葛根湯は、ここには無いし……特効薬がない以上、ガマンするしかない。

音もなく、長風呂をしていると――

「……ご主人様？」

リサがバスルームのドアの向こうから声をかけてきたが、それに返事ができない。

熱は今、最高潮だな。８度５分……いや、９度ぐらいあるかもだ……

……

……

「……？」

目が覚めると、俺は寝室のでかいベッドの上にいた。

ベッドサイドの昼光色のライトが、左右２つともついている。明るさは絞られていて、薄明かり程度だが。

上半身を起こすと、体調は……戻ってる。頭も痛くないし、すっかり平熱って感じだ。

熱が急に上がって、急に治るタイプの風邪だったみたいだな。

ていうか……俺、ハダカなんだが。

（風呂から、リサが運んでくれたのか）

よかった。あそこで気絶してたら死ぬところだった。真剣白刃取りができようと、銃弾掴みができようと、人間は溺れたら問答無用で死ぬからな。

ありがとう、リサ。

と、俺は――寝顔は意外とあどけないリサに、微笑みかける。

ははっ。リサ、寝る時にもヒラヒラのヘッドドレスを付けてるよ。

（……って……！）

い、い、いるっ。いるよっ！　いらっしゃるよっ！

リサが。

それもベッドの上に。しかも俺の真っ隣に。さらにハダカで！　なんでですか！

「……リ、リサっ……！」

その下半身は羽毛の毛布がふんわりかかってるからまだクローズドだが、じよじょじょ、上半身は、いま俺が起きちゃったせいで毛布がめくれてフルオープン。

ジャンヌを彷彿とさせる、白人特有の、なまっ白くて柔らかそうなその肌が

ぴくん、と動いた。

そして、そこも髪と同じ金髪の、長い睫毛の目を開いたリサは……

「ん……よかった……」

えっ、えっ、何。何が『よかった』の。

まさか、ま、まさか……ッ！　いやいや、記憶にございませんよ！

「――お目覚めになられたのですね。お風呂場で気を失ってらっしゃったから、

リサは、リサは心臓が止まるほど驚きました。でも……お気を取り戻されて、よかった……」

「そ、そのよかったか。よかった」

「？」

「っていうかお前ッ、な、なんでそんな……ここにッ！」

しどろもどろの俺が言わんとしている事を、すぐ理解したリサは――

「オランダでは熱を出した夫を、妻がこうして治します。お熱を出した体にあてるものは、人肌より熱くても冷たくてもいけませんから」

自分の胸の、その、大きいから全体は隠せないものの一部というか先端といううかを腕で隠し――そこまではよかったのだが、むくり。

お、起きてきちゃって、リサ、膝立ち……ッ……！

サラリと毛布がはだけて、その白い体の腰から下も俺の視界に入ってしまう。

だがしかし、オランダの神はここで俺に味方してくれた。リサは下半身に白いレースの下着と、例のキャットガーターなるインナーをつけてくれていたのだ。

それで明らかになった、キャットガーターの全貌は――

まずヘソの下に、白いスカートのようなものがヒラヒラと巻き付いている。
だがそのスカートの短さたるや、名古屋武偵女子もビックリの――股上10㎝。
丈が3㎝ほどしかなく、ヘソから5㎝ほど下までしかない。細い下着が丸見えどころか、下着の上辺にすら達していない謎のスカートだ。そんなスカートに何の意味があるのか。生地もシースルーで、肌がスケスケだし。
そのスカートのベルト位置からは、前部2か所、そしておそらく背面2か所からフリルで縁取られたガーターベルトが垂れていて――それが、太ももまで続いている。
本来ならニーハイ・ストッキングの上裾があるその太ももも上部には、細長いフリル布にゴムを通したバンドが巻き付いており、ガーターベルトはそこに繋がっていた。なるほど。太ももにあのシュシュみたいなバンドを巻いておく事で、ストッキング無しでもガーターベルトのフックがプラプラ垂れる無様な状態にはならないって寸法か。
……じゃなくてっ！
スカートをはいてないから俺に完全生公開されてるスカート内部の白布群は――むしろパンいちや丸ハダカより、いやらしいぞ。大人の女が男を誘惑する

ために付けるような、セクシー下着の一種じゃねーか。そもそもガーターベルトが本来持つストッキング留めの機能は無いワケだし、オランダの神は俺の敵なの味方なの。
（リサめっ……！　清楚な顔で俺に仕えてたくせに、普段からそんないかがわしいモノをつけてたのかよ……！）
俺と生活する上で一体何に備えてたんだ、お前は。
この一大事に別の熱が上がってきた、俺は――
「ね、寝るぞッ！」
寝室にもある古いテレビをつけて、リサからユーロスポーツに視線を逃す構えだ。
「は、はい」
と、リサが横になろうとするから一大事が二大事。ここで寝るつもりですかリサさん。
しかも俺が付けたフィリップスのブラウン管テレビからは……
な、何。スポーツの歓声じゃなくて、艶めかしい喘ぎ声が聞こえてきたぞ。
じん……わり……と映ってきた画面に……

「……ッ……ッ！」

み、見ちまったッ、一瞬だけど！

なんで、そんな、は、肌も露わな男女が組んずほぐれつするような映像を公共の電波に乗せてＯＫなんだよこの国はッ！

「ご主人様ったら……エッチ……こんな時間にテレビをお付けになるなんて……」

毛布を抱き寄せて顔の下半分を隠すリサは、そっちこそ根はエッチな子なのかしっかり画面を見てる。そして何やら気分を高めてほっぺをピンクに染めていくが、この成人向け映像を不審がってる様子はない。

やっぱりオランダでは、深夜にアダルトな映像を放送しちゃう文化があるらしい。

（じ、自由すぎる国だなッ……そっち方面に！）

カルチャーショックを受けつつ、震える手でチャンネルを変えようとしたんだが――

あっ、あっ、慌てるあまり手が滑って、ボリュームを上げちゃったよッ。

しかもこの映像の男優さんと女優さん、よりによってご主人様とメイドさん

って設定でお戯れになってるじゃないですか。コスチュームから察するに。

気まずい！　気まずい事この上ないぞ……！

「でも、嬉しいです。そういうご気分になられるのも、ご主人様がお元気になられた証拠ですから。すっかりお熱も下がりましたし……」

なんとかテレビは消せたものの、時すでに遅し。

リサは何やら上気した顔で、俺の肩にそのスベスベの手を触れさせてくる。

シロップみたいな甘い香りのする息づかいも、女っぽく、切なげで――

い、今のみたいな映像って、女が見ても興奮するものだったのか!?

「お傷も、もうほとんど治られたのですね」

リサの手が、俺の皮膚にそっと触れたまま……肩から胸、胸から脇腹へと移ってくる。

手はそのまま、脇腹から、互いの下半身にかかっていた毛布の下へ潜り込み

――

「――なッ、ちょっ、よせって！　ど、どこ触って……！」

旅は人と人との触れ合いというが、俺はそんな所を触れ合わせるつもりはないぞッ！

「もう少し汗をかかれた方が、お風邪からの全快も早いかと思います……ので……これをきっかけに、今夜からお夜伽を勤めさせていただきますね。私は書物でご奉仕の致し方を読んだ事があるだけですので、不手際もあると思いますが――お許し下さいませ」

事ここに至って――謎の日本語、ヨトギの意味が分かってきた……ぞ……！

「……失礼いたします」

リサが毛布を持ち上げて、なんでか頭から中に潜り込もうとするので、

「し、失礼だと思ってんならやめろって！　そんな事はメイドの仕事じゃねーだろ！」

「ご主人様の愛人として、お添い寝もする――アヴェ・デュ・アンクのメイドはそういうメイドなのです。お添い寝をするという事は、体を捧げるご奉仕もさせていただくという意味です。私の一族は皆そうして、勇者様の血を継ぎ集めてきたのです……」

俺は病み上がりの体を引くが、リサは俺にどこまでも擦り寄ってくる。

「なんで普段は言うこと聞くくせに、そこは突っぱねるんだよ！　お前、俺のメイドさんなんだろッ、ここも言うこと聞けよッ……！」

俺はリサを引き離そうとして、さっきの映像とは別の意味で組んずほぐれつになりかける。が――

「ご主人様。私は今まで楚々とした素振りで、ご主人様を欺いていました。お許し下さい。私には、ご主人様に見せてきたようなメイドではない別の性質もあるのです。ただ、私の勇者様にお仕えしたいというだけではなく――」

「……や、やめ、ろ……って……！」

「――その御子を授かりたい、と……頭の中ではその事ばかり、何度も願っていたのです。毎夜、お隣の部屋で……私は本当は、そういう、はしたないメイドなのです……！」

――ドクンッ――

「私は日々、ご主人様に笑顔を向けながら……頭の中ではそんな事を考えていたのです。ご主人様と早く、こうなりたい、こうなりたい、と――怖いですよね。気持ち悪いですよね。ご主人様が拒まれるのも、分かります。でも、どうかリサの願いを叶えてください。どうか……！」

ぽた、ぽた、と――シーツの上に、熱い水滴が落ちる音がしている。

聞くまでもない。リサの、涙だ。

俺に拒絶されてる事が、分かってきて……泣いて、いるのだ。リサは。もう、これ以上どうしたらいいのか分からなくて。

リサが今まで俺の回りの世話をするだけして、かいがいしく仕え、いつもキレイで可愛い自分を見せ続けていたのは……きっと、この時のため。

リサの一族は代々、自分たちのDNAに強者の遺伝子を加えてきた。ブラドとは違う、こういう方法で。強い者に付き従い、寵愛を受ける形で、遺伝子を受け継いできたのだ。

「……ご主人様……」

ヒステリアモードには——まだ、ギリギリ、なりきってない。

9割9分ってとこだ。まだ引き返せる。引き返せ。引き返すんだキンジ。

——もう、気付いたんだから。

リサが隠してきたのは、その欲求や遺伝システムだけじゃない。

さらに何か、重大で危険な秘密を隠している色があった。今の喋り方の裏には。

それが何なのか、までは分からない。

だが——ここでリサに押し切られてしまったら、引き返せなくなる。

これは5月に白雪の警護をした時にもアリアに指摘された事だが……ボディーガードに限らず、依頼人と武偵が深い関係になるのはタブーだ。

そうなると馴れ合いから警戒が緩み、イザという時に冷静な判断ができなくなる……と、教科書には書いてあった。

しかし本当は、それだけが理由ではない。

男女の熱情に浮かされた人間の中では、それが他の全てに優先されてしまうことが間々あるからなのだ。人は情が移った異性のためになら、たやすく無法者になってしまう。

もし、リサが隠している『何か』が——悪意であった場合。

ただでさえ逃亡中という危険な状況が、一層、危険な事になる。ここで俺がリサに押し切られるという事は、その行為以上の意味が生じてしまうのだ。

だから——俺は、自制する。リサがどんなにアクセルを踏み込んできても、ブレーキを踏み続ける。黙って、受け付けない。そうせざるを得ないんだ。

そうして、数分の沈黙が流れたあと——

リサは、ばさっ。

黄金色の髪を広げてベッドに伏せ、マクラに顔を押しつけて……

声を上げて、泣くのだった。
ルーヴル美術館で見たギリシャ彫刻のように白い背中を、震わせながら。
これは……確かに悪いのは、据え膳食わずの俺かもしれないが……
ズルイだろ。女が男の真横で、泣きじゃくるなんて。
理由はあれど、リサに恥をかかせてしまった俺は――
「……リサ」
かわいそうになって、声を掛けてしまう。
涙目で少しだけマクラから振り向き、こっちを見上げてくるリサの顔に――
また一瞬、感情が揺らいだが――ここは、譲れない。譲れないんだ。リサ、許してくれ。
「俺はお前に感謝している。いま生きていられてるのも、お前のお陰だ。だが……俺には幾つか理由があって、お前の求めに応じる事ができないんだ。その理由の1つは体質的なもので、自分ではどうしようもない事なんだ」
「……HSS、ですか」
――知ってた……か。
理子、ブラド、パトラ、それにシャーロックも知ってたし、イ・ウーでは兄

さん経由でヒステリアモードの事が知れ渡ってたのかもな。
「……そうだ。俺はあの自分に頼らなきゃいけない事も多いんだが、HSSというものは本来、なりたくないものなんだ。特に――女の前では。今は、なりそうなのを水際で堪えているところだ」
と言うと、リサは俺のセリフのラストの部分に――
泣いた顔のままで、しかし何やら少しだけ嬉しそうな表情を作った。
そしてマクラから顔を半分上げたまま、俺の話を聞いている。
「『あの俺』と『この俺』は、別の人格みたいなものなんだ。あの俺がする事の責任を、この俺が取れないような事があったら……それは許されない罪になる。俺は体質を理由に、罪を犯したくないんだ。だから……すまない。許してくれ」
誠意を込めて、今のことに謝ると――
リサは、
「ご主人様。きちんと話して下さって……ありがとうございました。リサは、安心いたしました」
「安心？」

「……リサは、違う事を心配していたのです。ご主人様は、リサという女に――そういうお気持ちにはなれないのではないかと。リサはご主人様と肌や目の色も違いますし、元は砲火を交えた眷属の一員……それに、この通り、美しくはございませんから」

「何言ってるんだ。リサは――とびっきりの美人だよ。今だって、惜しいと思ってる」

うわ。この物言い。

いつのまにかヒスってるぞ。俺。じわじわ来たのかな。油断したせいかも。

リサ、もう大丈夫だとは思うが、そのまま退却してくれよ？　いま毛布をめくられたらアウトだ。まだ砲火の方がマシな、違うものを交えることになっちまいかねん。

人知れず臨戦態勢が整ってる俺に、優しい言葉をかけられたリサは――

一旦マクラに顔を埋め、またちょっとだけこっちにその翠玉色の瞳を向けて……

「リサは、リサは……今までよりもっと、ご主人様を好きになってしまいました……」

ちょっとだけイタズラっぽくそう言い残して、静かに体を起こす。

そして一礼してベッドを降り、その陰に畳んで置いていたらしいネグリジェを、そっと身にまとった。

それからベッドの脇の床で、礼儀正しく日本式に正座して……土下座、してきた。

「――今宵のふしだらな振る舞い、お詫びします。ですが、厚かましくもお願いします。何とぞ、これからもリサをおそばに置いてやって下さい。リサは勇者様に仕えるアヴェ・デュ・アンク家の女。ずっと、ずっと、ご主人様のメイドであり続けたいのです」

リサが必死に訴えてくるのと、ヒステリアモードで女に甘かった事もあり――俺は、「リサ、顔を上げて」と促してから――

「俺はダメな男だが、女から居場所を奪うほどダメな男じゃない。メイドの居場所は……ご主人様の隣。これからもそうだろ？」

さっきまで絶望の淵で泣いていたリサを、天にも昇るような笑顔にさせる――

――無責任発言を、してるぞ。いい笑顔で。困ったもんだよ、ヒステリア俺。

すっかり目が覚めてしまった、俺は――妖刀にやられた傷もほぼ治った事だし、今晩は少々ムチャをさせてもらう事にした。せっかくヒステリアモードにもなれたんだしな。

（……言葉、いつまでも人に頼っちゃいられないよな）

師団の頼れる仲間も今はいないんだし、1つずつでもできる事を増やしていかないと。

そのためには、禁じ手を使わせてもらおう。こっちも生存が懸かってるんでね。

――『猟経』。

これはヒステリアモード時と平常時を繋ぐ、記憶定着術だ。

実は、人は誰しも、今まで見聞きしたあらゆる物事を記憶している。

だがそれを思い出すには、その記憶をしまった引き出しを開ける鍵が必要なのだ。

そしてその鍵は、人為的に作り出す事ができる。『鍵言葉』とは言い得て妙な表現で、ゴロ合わせなどが経験則から知られている。

猟経とは――

ヒステリアモード時には鍵無しでフルアクセスできる自分の記憶、その特定分野に対し、その引き出しの合い鍵を作りまくる技だ。そうして、その物事を『思い出しやすくする』準備を整える。

そしてなんと、その量産した鍵は――非ヒステリアモード時にも、使えるのだ。

『鍵さえあれば、思い出せる』――兄さんの説によると、そこはヒステリアモードの力というより、人間の大脳が元からほぼ無限にできる事らしい。脳とは、そういった未知数の性能を秘めたスーパーコンピューターなのだ。

アリアだって、あの物忘れの激しい残念な脳みそで17カ国語を自在に喋れるしな。脳が持つ無限の可能性、その生きた証拠と言える。

（俺も、日本語を入れて2カ国語ぐらいは……操らせてもらう）

夜中、暗闇の中……俺はリビングのソファーに掛け、目を閉じ、額に右手の人差し指と中指だけをあてて――いわゆる『知恵熱』が出る可能性があるので、体温を測りつつ――集中力を高め、どこまでも高めて……人生初の『猟経』を試みる。

その間は、動かない。

ハタ目には、瞑想しているようにも見えるだろう。

猾経は普通の勉強のように知識の絶対量が増えるワケではなく、見聞きした事を記憶に定着させる技。なので俺はひたすら、思い出す。思い出しまくって、鍵を量産していく。まずは中学英語を10分でマスターし、次に今までの高校英語を、これも10分で。

そしてここから、俺の唯一ともいえる趣味、映画――

その洋画のセリフを、日本語字幕つきで思い出す。

（俺がアメリカ映画のファンで良かったぜ）

ハリウッドの無茶な戦闘アクションがヒステリアモード時に実践できるかもと思って、昔からよく見てたんだが――それが、予定とは違う形で役に立ってくれそうだな。

1句ずつ、1単語ずつ、俺は映画の全セリフを思い出して丸暗記していく。

次はそこで覚えた知識を使って……ガヤガヤ言ってたエキストラ達の会話も、全部だ。

俺が聞いた事のある、およそ全ての英語――

その鍵を作り終えた頃には、ヒステリアモードが終わる数分前だった。

残りの数分間は、物のついでだ。よく見てたイタリアのマフィア映画から、イタリア語も習得しておこう。カタコトのレベルにはなりそうだけどな。

そうして、ヒステリアモードをほぼ余すところなく使い切った俺は……

フーッ……と、深い息をついて、長いソファーの上で横になる。

しんどかったな。さすがに。

明日あたりテストしてみないと分からないが、これで英語は多分、聞くのと喋るのとは出来るようになっているだろう。

ちなみにこの『猾経』、開発したご先祖様がこれでお経を丸暗記したら――お坊さんにえらく怒られたという事で、遠山家では封印されてきた技だ。

なんで俺が知ってるのかというと、小学生の頃に兄さんとキャッチボールをしてて庭の隅にある地蔵を割ってしまったところ――中から出てきた巻物に書かれてあったからだ。兄さんと2人でハウツーを読むだけ読んで、地蔵はアロンアルファで修復したので証拠も隠滅済。『永代日ノ本の如何なる場所でも用いる事を是禁ずる物とす』と書いてあったが、ここは日本じゃないからセーフだよな？　ご先祖様。

翌朝――俺は激しく気恥ずかしかったのだが、リサは普段と同じようにメイド服で現れ、

「ご主人様。おはようございます。すぐ美味しい朝食をご用意しますからね」

と、いつも通りのニコニコ笑顔で対応してくれている。

昨夜の出来事を引きずって俺に不愉快な思いをさせないように、メイドらしい気遣いをしてくれてるんだな。でも……お前、今の笑顔、ちょっと硬かったぞ。

そしてダイニングで2人してテーブルにつき、アイツマイターを食べるのだが……

「け、今朝は晴れてますね」

「ひ、昼から曇るんだろうな」

以降、会話が続かない。チラッとリサを見たら、間の悪い事にリサもチラッと俺を見た瞬間で、目が合っちゃうし。しかも同時に目を逸らしちゃうし。

……『男と女として失敗した翌朝』って、何を喋りゃいいんですか。

（話題……何か、話題を……）

窓の外、パンダみたいなカラーをしたカササギが木の枝で歌うようにさえずる中、俺はハッと思い出す。そうだ。話すべき事があったよ。

「お、おいリサ」

「はっはい！」

「こ、声がでけえよ。何でテンパる。えっと……お前、英語喋れるか？」

「英語、ですか？　はい。オランダ人は9割以上が英語を喋れます」

「それはそれでスゴイ国だな……じゃあ、何か喋ってみてくれ」

「え？　えっと……普通に英語でお話ししてよろしいんですか？」

「――ああ、もちろんさ。話してみな」

おっ、我ながら自然に口を突いて出たぞ。最初の英語が。ちょっと物騒な言い方だが、今のは『ラブ・アクチュアリー』のローラ・リニーのセリフだ。

エミー賞も獲った役者と同じ発音で喋った俺に少しキョトンとしたリサは、

「まあ……ご主人様！　英語を喋ってきますよ！」

「たいしたことないさ」

「ど、どうして急に喋れるようになったのですか？」

「なぜ太陽は昇る？　それと同じで、理由なんか

ない……」

よし、喋れてるぞ。どっちも映画からの引用だけど。

前のセリフは『バイオハザードⅡ・アポカリプス』のミラ・ジョヴォヴィッチのセリフ、後のセリフは往年の名作『ハイランダー』のショーン・コネリーのセリフだ。ていうか、後のやつは出会った頃のアリアにも言われたような覚えがあるぞ。アリアも見てたんだな。

「ほ、本当は喋れたのですね！　ちょっと喋り方がキザといいますか、お芝居っぽい感じもしますけど……」

「お楽しみはこれからさ――しばらく英語で生活しよう。一夜漬けで覚えたばかりだから、練習が要るんだ」

ここは俺の初めての言語習得になぞらえて、『ジャズ・シンガー』から、映画史上初のセリフを拝借した。

そんな俺の一発芸を見たリサは、

「――はい！　ご主人様！」

ようやくいつもの調子を取り戻して、いつものとびっきり可愛い笑顔になってくれるのだった。

朝食を食べ終え、ソファーに着いた俺は……

今はもう全て聞き取れるABCニュースを、テレビで見るともなしに見る。

そして、改めて考える。

昨日、ヒステリアモードの最後のタイミングで推理した――

――師団の、裏切り者の正体を。

正確に言うと、100%完全な裏切り者は……いない。というのが、ヒステリアモードの俺の結論だ。

20%の裏切り者と、80%の裏切り者がいて……

それが組み合わさって、スパイ1人分の働きをしているのだ。おそらく。

そのカラクリを――暴露して、止めなきゃいけない。傷が完治し次第、すぐにでも。

その旅に出る時も近いんだろう。

今に、打って出るぞ。師団でも眷属でもない俺たちが、たった2人の第3勢力となって。

4弾　颱風の中の魔剣

ブータンジェは元々要塞都市だけあって、路地の造りや高低差が町に入ってくる人間を迎撃しやすいような、つまり目立たせるような構造になっている。なので、町に新しく入ってくる人間がいたら教えてくれ――と、リサに前から頼んでいたのだが、

「ご主人様、今日は教会に聖楽隊が来るらしいですよ」

小雪が降った朝、買い物から帰ってきたリサがそんな事を報告してきた。

オランダのキリスト教はカトリックとプロテスタントが3対2ぐらいの勢力で、ここの教会はカトリックだ。

そして、カトリックの総本山は……バチカン。

（師団のメーヤとは、今や対立関係にあるっちゃあるワケだしな）

気になって、カーテンの隙間から教会へ続く小道を監視していると――

黒塗りのクラシックカー、フィアット・ティーポ509が3台やってきた。

車列からはゾロゾロと、お揃いの白い法衣を着た10人ほどのシスターたちが教会へ移っていく。

楽器ケースを抱えるシスターたちは全員ヴェールを着用せず、金髪を露わにしている。若い。俺と同い年か、少し下の少女たちだ。

（……？）

その歩き方や身のこなし、まず教会の出入口周囲の遮蔽物をチラチラ見る視線には……

武偵高で言えば、強襲科や諜報科の生徒みたいな印象を受ける。

大小の楽器ケースも、不審だ。重心や重量が、想定される楽器のものとは違う。

ただの聖楽隊じゃないな。

そう思って、小雪の向こうの彼女らを注視し続けていると――

「……！」

他のシスターたちより背も胸も一回り大きく、白の法衣に刺繍された金糸の刺繍も多い……メーヤが、最後に車を降りてきた。

それを迎えるように、バサバサッ――と、祭りの日に見た金首輪の白鳩がメーヤの手の甲に留まっている。

（しまった……！）

あの光景には、見覚えがある。白雪はホトギアゲハで、パトラはスカラベで、カツェはカラスでやってたが……魔女ってヤツらは、『使い魔』という技を持っているのだ。

それは虫や鳥といった生物を子分として、偵察や諜報、攻撃のサポートに使役する魔術。

（あの白鳩は、伝書鳩なんかじゃない。しかし、メーヤたちは――

教会に食糧や書類、デスクトップのPCやディスプレーを運び込んでいる。すぐ家捜しする感じじゃない。メーヤの使い魔だったんだ……ッ）

るムードだ。

どうやら……あの白鳩はエドガーほど高性能じゃなくて、『この辺りの地域にいる』という情報までしかメーヤに伝達できない使い魔だったみたいだな。

それでもズバリこんな目と鼻の先に城塞都市を拠点に、もっと広範囲を捜索するバチカンが拠点を置いたのは、たぶん偶然。

つまりその偶然を必然にする、メーヤの幸運スキルによるものだろう。

（あの強化幸運は……敵に回ると厄介なもんだな）

今メーヤに見つかると、危険だ。

戦闘に発展した場合、まず間違いなく完敗する。

向こうは10人――2個小隊相当の手勢を連れてきている。メーヤの下、統率も取れてる感じだ。

対するこっちは、とっくにヒステリアモードの切れた俺1人。

いや、1人分の戦力も無い。申し訳ない言い方だが、戦闘面では足手まといでしかないリサを守りつつ戦わなきゃならないんだからな。

リサには降伏する意志があるものの、メーヤはああ見えて師団きっての過激派。眷属を害虫と公言し、ヒルダの首を落とし、宣戦会議ではカツェを一刀両断にしかけた好戦的な人物だ。元眷属のリサが白旗を揚げても、すんなり受け入れるかどうかは分からないぞ。

もしリサが攻撃された場合、俺はメーヤと戦らざるを得なくなる。

今は――メーヤと戦ってる場合じゃないんだ。裏切り者のカラクリを完全に判明させて、師団からの情報の流出を止める事が先決だ。その主犯格は、野放しになっているのだから。

（ここは、逃げるぞ）

俺はそう決めて、すぐに自分の傷の具合を確認する。
もう腫れは引いており、押せば痛むといった程度だ。動きが阻害されるほどじゃない。
（完治ってワケじゃないが、攻めに転じるなら――これがいい機会かもな）
と、俺は……この広くてキレイな、住み心地の良かった部屋を見回す。
さようなら、ブータンジェ。このオランダでの……リサとの、かりそめの安住の日々よ。
そう心に呟いて――今なおキッチンで幸せそうにランチを作っているリサに、
「荷物をまとめろ、リサ。あの聖楽隊は師団の戦闘部隊だ」
気持ちを切り替えるように、そう命令する。

もう上がってはいたものの、雪は古い石畳の道にうっすら積もっていた。
最後の最後まで、ブータンジェは俺たちをよく守ってくれる町で――入ってくる人間が見えやすい代わりに、出ていく人間は見えにくいという逃走に適した町だった。
なのでクロメーテル姿の俺は少し早足で、キャリアウーマンみたいなスーツ

とメガネで変装したリサの手を引いて――町の唯一の出入口、深い濠の外へと続く跳ね橋へと急ぐ。
その時……
（……何だ？）
跳ね橋の上や周囲に、人が集まっているのが見えてきた。
（マズイ……）
俺とリサが逃げる準備をしている間に来たのか、メーヤとその子分たちも跳ね橋の上に集まってきているぞ。なんでだ。
高低差があるので橋の周囲の様子は俯瞰して見え……すぐに、理由が分かった。
子供が、溺れているのだ。
所々に薄氷を浮かべた、凍てつく濠で。
橋の上からは、その保護者と思われる老夫婦が「フランツ……！　フランツ……！」と子供の名前を呼んでいる。
見れば、溺れている少年は前にリサに犬をけしかけていた太ったガキ大将だ。
橋には、バイクの新しいタイヤ痕があった。

きっと、橋の欄干で遊んでいるところをバイクにぶつけられて落ちたんだ。
ここで遠巻きに見ていても、逆に目立つので……
俺とリサは、野次馬に紛れるためにも跳ね橋の方へ移動していく。するとその時、
（……ッ）
溺れたフランツをどうにか助けられないかと、シスターたちが橋を回り込んでこっちに移動してきた。
俺とリサは、橋の上でその全員と――メーヤとも、すれ違う。
だが、誰もこれが俺と気付かない。皆、溺れる少年の方に注意が行っているからだろう。
町の内側から濠を見渡したシスターたちは、そこからもフランツを助けるのは難しいと悟ったか、あの服では泳げないのか、飛び込む者はいない。
橋の上にいるオランダ人たちもだ。飛び込もうとした男もいたが、他の人々に止められている。その理由は、濠を見れば一目で分かる。この濠は戦争用に造られた、広く、深いもの。敵が嵌まったら抜け出せないよう、崖のような傾斜も付けられている。

飛び込んだらソイツも上がれなくなって、溺れる人数が増えるだけなのだ。
フランツはバイクに接触された時に足でもくじいたのか、泳げていない。藻掻き方にも力がない。橋からかなり離れた眼下の水面で、沈んだり浮かんだりを繰り返している。
リサは――
メガネの下で、涙を拭っている。こうなったら、簡単には助けられない。それがこの国、オランダでの定めなのだろう。
それに、俺たちは……今……助けに出ていく事が、できないのだ。
（運が無かったな、フランツ）
俺たちはこんな所でメーヤに見つかってる場合じゃない。自分の潔白を証明するための旅に改めて出なきゃならない。跳ね橋を渡りきり、町を出て、今まさにその一歩目を踏み出したところなんだ。
……って……
おい。俺よ。俺の足よ。
なんでせっかく――
ブータンジェから、出られたのに。

なんで、戻ってんだよ。橋へ。
なんでそんな、突っ走ってんだよッ。走るんなら逆だろ。メーヤたちがフラ
ンツに気を取られてる今なら、確実に逃げられるんだから。
「お、おやめ下さいご主人様っ。死にに行くようなものです……！」
ほら。後ろでリサも慌ててるぞ。
キンジ。そいつはアレか。お前、またそんな、正義の味方を気取りたいのか？
カッコつかないぜ、クロメーテル姿でそんな事したって。それとも、師団（ディーン）の
自分が『イイモノ』だと思いたいのかよ？
いや――違う。
イイモノもワルモノも無い。師団も眷属（グレナダ）も似たようなもんだ。そいつはブリ
ュッセルで学習済みだ。
この世に正義の味方なんていない。そんな事はとっくに思い知らされてる。
そもそも、正義なんてものは存在しないって事も。
でも、ああ、何て言ったらいいんだろう。
人の道、道義――ってもんは、あるだろう？
それは正義よりもっと曖昧（あいまい）な義だが、ある事はもっと確かな義だ。

今。人として俺（おれ）が行くべき道は、少年を見捨ててこの町を出る方向には続い
てなかったって事だ。それだけの事だ。いま俺が、メーヤたちの見てる先で――
この凍（い）てつく深い濠（ほり）に、飛び込もうとしているのは。それだけの事なんだよ
ッ。
「だめです、ご主人様ッ！　この濠の底には汚泥（おでい）が溜（た）まっていて、一度落ちた
ら上がってくることはできないのですッ！」
正体を隠すため、英語で警告してくるリサに――
「死にかけてるヤツをスルーして逃げたら、寝覚（ねざ）めが悪くなるだろ。安眠は大
事だ」
あの地下道でリサを助けてやった時と同じセリフを、今は英語で返す。
「リサ。主人としての最後の命令だ。お前は逃げろ。幸運を祈（いの）るぜ」
と、俺は僅（わず）かとはいえ現金の入ったサイフをリサに押しつけて――引き留め
ようとするオランダ人たちの手を、パシ、パシパシッ、と――強襲科（アサルト）仕込みの
捌（さば）き方で払い、
「……ご主人様ッ……！」

リサの叫び声を背に、飛び込んだ。クロメーテルの姿のままで。

ざぶんっ……！

と、一旦全身が沈むような形になった濠の水は――まさに、氷水。

全力疾走の準備運動が無かったら、心臓マヒで死んでたとこだ。

コートとウィッグを付けたまま飛び込んだせいで着衣泳になったが、これも強襲科での訓練が活きた。なんとか水を掻いて、溺れるフランツの所まで泳ぎ着く。

「助けてッ……！」

「気をしっかり持てッ」

俺が抱きかかえたフランツは既にかなり水を飲んでしまっていたが、死ぬような量じゃなさそうだ。だが、服が水を吸ったせいか、見た目の体重以上に重く感じる。フランツを掴んだままの着衣泳は、難しそうだぞ。

「石垣まで泳げ！」

「頑張ってー！」

町のみんなや、まさかこれが遠山キンジとは思ってないシスターたちが――大声で応援してくれている。泳ごうと藻掻きながら橋の上を確認すると、リサ

は、もういない。よし。俺の言うことをちゃんと聞いて逃げたんだな。

フランツの頭を水から出させつつ、泳いで石垣の方へ行こうとするが――ずぶっ――と、ナナメ下に蹴った俺の足が……何か、粘りけのある物に食い込んだ。

――泥だ。粘土質の泥が、俺の足を絡め取ってる。フランツが泳げなかったのは、足を痛めていたからだけじゃないんだ。

マズい。藻掻けば藻掻くほど足が泥に嵌まっていく。泳ぐに……泳げないぞ。

氷水の中で立ち往生し、寒さと危機感とで俺が青ざめた時。

ドルドルドル……と、大型バイクの音が橋へ近づいてきて……パッ――！

欄干から濠めがけて、女が飛び込んできた。

まるで水泳選手のような、キレイな姿勢で。

イスラム教徒の女性だろうか。頭にスカーフを巻き、前髪で目元を隠した、若い女だ。だがその服装は、昔のパンクロッカーみたいな黒革のジャンパーとズボンだった。

その女はバタフライでここまで来て、体当たり気味に俺と一緒にフランツを

掴む。その動きで、幸運なことに――俺とフランツの足に絡まっていた泥が、魔法のように解けた。

（今だッ……！）

俺は――その女と力を合わせて、フランツを濠の石垣まで運んでいく。足を泥に取られないよう気をつけながら、泳いで、泳いで――石垣に辿り着く。

だが、この濠のフチは簡単に上がれるようなものじゃない。

70度ぐらいの急斜面で、その表面には錆びた鉄のトゲが串のように下向きに並べてある。いわゆる忍者返しの一種だ。さらにその壁面は意地悪く波打った造りになってて、上からロープや鎖を垂らせないように、垂らせても引き上げられない構造になっている。

さすがナポレオンの軍勢をも沈めた、必殺の濠だよ。登れる見通しが全く立たないぜ。

「……」

俺と一緒にフランツを抱えたまま、スカーフの女性も……

濠から上がるアイデアは無いらしく、口紅をした唇をへの字に閉じている。

ここで3人とも、氷水に体温を奪われて力尽きる事になるのか――と思った、

その時。

「ご主人様！」

俺たちの横から、その声が――

「!?」

振り返った俺は……

ぎこ、ぎこ、と、銅張りの古めかしいボートを漕いでここまで来た……

（……リサ……！）

黒縁メガネのリサと、目が合ってしまう。

ボートの舳先には……あの物持ちの大家さんの家紋・テントウムシ紋が彫金されてある。大家さん、こんな物まで持ってたのか。

俺は長髪のヅラが取れないよう気をつけながら、ボートへ上がり……フランツの両腕をリサとそれぞれ持って引っ張り上げる。下からはスカーフの女性もフランツのケツを押し上げてくれて、なんとかボートに上げる事ができた。

しかしフランツ、すげえ重いなお前。太るのにも才能がいるんだ。日本に来りゃ将来は大相撲で一稼ぎできるかもな。

ボートの上で仰向けになってゼーゼー息をしているフランツは……体力もあ

りそうだし大丈夫っぽいので、さておき……

俺はリサと向かい合って座り、

「……逃げろって言ったろ」

主人としてお小言するが、リサは、

「いったん逃げましたよ。そのあと、戻ってきたのです。なので、ご主人様に逆らってはおりません。さっ、あそこから上へ参りましょう」

笑顔でごまかして、橋の方を手で示してる。

そこでは住民たちが防火用のホースを切ってきて、橋の下へ垂らしていると ころだった。

水面からは、最後に――

「……」

スカーフの女性も、無言でボートに上がってくる。

その勇気ある女性の……服装に、俺は目を丸くしてしまう。

黒革のジャンパーには、トゲトゲした金の鋲。手には指という指に金の指輪。

♀マークみたいな古代十字のネックレス。これも金。それも全部、光り方から見て……24金だぞ。

本物のアラブのお金持ちか、それとも芸能人かもな。スカーフで顔を隠してるし。

蛇革のベルトを指で拭ったその女は、

「……」

濡れたスカーフを結び直し、俺たちに背を向け……ボートの後尾に腰掛けた。

そのまま一言も喋らないので、リサと俺はちょっと顔を見合わせてから……ぎこ、ぎこ。

2人してボートを漕ぎ、俺たちを拍手喝采で迎える橋の方へと戻るのだった。

1人ずつ全員が橋に吊り上げられた後――フランツの祖父母は俺に抱きついて、延々と感謝の言葉を告げてくる。

そこへ、マズい事に……

シスターたちも、俺たちをキャーキャー褒めながらこっちへやってきた。

俺はリサにヒソヒソと話し、「ご主人様は『急に泳ぎたくなっただけだから、気にしなくていい』と仰ってます」と周囲に伝えさせる。そしてイベント終了ムードを流しつつ、立ち去ろうとした時――

濡れて滑りやすくなっていた俺のウィッグが、指で十字を切ったフランツの祖母の手に引っ掛かり、少し、ズレてしまった。

「……ッ」

慌ててそれを戻し、着替えを持ってきてくれたオランダ人たちをスルーしてズブ濡れのまま、そそくさとリサを連れて町を出ていこうとする。

（シスターたちに――見られたかもしれない）

人々の喝采に小さく手を振って応える素振りで、シスターたちの様子を確認するが……

……ギリギリ……大丈夫、そうだ。

シスターたちは俺をフシギそうに見てはいたが、追ってはこない。

俺が変装者だという事までではバレたかもしれないが……女に化けた事が、ここで生きた。これが遠山キンジだとは、シスターたちは気付いてない様子だ。

少なくとも、その確信がないのだ。彼女たちには。

俺とリサが橋の上で、人々の輪から出た――まさに、その時。

「……遠山さん？」

遠くから掛けられた、メーヤのハッキリした声に――

名前を呼ばれた俺は、つい。

本当に、つい――振り返って、しまった。

やべえ……ッ！

振り返って目が合う瞬間まで、メーヤは眉を寄せて『まさかそうとは思わないけど』という顔をしていた。だが、呼ばれたのが自分だと証明してしまうような振り返り方をしてしまった俺に……メーヤは「！」とその群青色の瞳をまん丸に見開いて驚いている。

要するに、カマかけだったんだ。今のメーヤの呼びかけは。

それに俺は、まんまと引っ掛かっちまった。

このクロメーテルが遠山キンジだと、自ら証明してしまったのだ。

――バレた。逃げるぞ！

と、駆け出そうとした時……ガッチャンッ！

なぜかメーヤの『遠山さん？』にとてつもなく驚いた人物が、もう1人いた。

さっきの、スカーフをかぶった黒革装束の女だ。リアクション芸人みたいにハーレー・ダビッドソンを立ちゴケさせて、俺の方を見てる。なんでだ。

その音にビビってスカーフ女の方を向いたリサが、すてんっ。
俺の横で腰を抜かして、その場に尻もちをついた。
何、何なの。この驚きリアクションの連鎖。
「パ、パトラ様っ……!?」
そのリサの声に――
今度は俺が、足をもつれさせる番だ。
元・眷属のリサにバレたもんで、スカーフをバサッと取った革服のハイヒール女は……
こいつ、パトラじゃねーか！
どうりでさっき、濠で足を取られた泥が魔法のように取れたと思ったぜ。きっと本物の魔法で泥を払ったんだ。なんたってパトラは『砂礫の魔女』だしな。
それに昔、パトラは台場で泳ぎが得意なような事も言っていた。そこも、どうりでだぜ。
「リサ。占星術で見つけたは見つけたが……タッチの差でメーヤも来ておったか。しかし何ぢゃ、さっきの舟での――トオヤマキンジの前での、イキイキした顔は。イ・ウーでは一度もそんな笑顔を見せなかったクセにの」

おかっぱ髪を手櫛で整えた、パトラは――
脱走兵のリサを追い、変装してオランダに潜入していたらしい。
しかし自分もメーヤに見つかった事を悟り、ひとまず逃げるためにバイクを起こそうとしている。
人混みを掻き分けて、メーヤたちがこっちへ迫る中――
「トオヤマキンジ。どうやらお前……師団に追われているようぢゃの。子供なぞ放って、逃げておれば助かったものを」
パトラが見下すような事を言ってくるので、
「それはお前もだろ、パトラ。師団の勢力圏内に忍び込んでたくせに、見つかってるじゃねーか。でも……お前にも優しいところはあるんだな。そこはちょっと見直したぜ」
俺ももうヅラと歩きにくいコートを投げ捨て、防弾制服姿に戻りつつ言い返す。
「わ、妾は――その、さっきは、たまたま、急に泳ぎたくなっただけぢゃ！」
パトラは真っ赤になって、俺のセリフを怒鳴ってくる。
「しかし、師団が仲間割れしておるという情報はホントだったようぢゃの。ほ

ほほほっ」

などと笑ったパトラが――チュッ、チュッ。

立てた指で、2度、3度、投げキッスみたいな仕草を濠に向かって放った。

すると、水面が少し泡立ち……濠から石垣をニョロニョロと、何匹もの……

（コ、コブラ……？）

おそらく底の泥で作られた紛い物の、しかし本物そっくりのコブラが這い上がってきた。

コブラたちはすぐさま橋に集まってきて、パニックになった人々の足下をスリ抜け――ハーレーの周囲にウゾウゾと集まる。

そんなニセモノのコブラで何をする気かと思ったら、にょろんっ。

パトラのベルト――蛇革かと思われたそれは本物のコブラで、そいつが偽コブラの群に落っこちてシャッフルされるように這い回る。

どれが本物か分からなくなったあたりで……バッ！　と、コブラたちが散開した。

「……ッ……！」

俺も足下に来たコブラを蹴り返そうとするが、本物だったら危険だ。

リサも半ベソで俺に抱きついてきて、走って逃げるどころじゃなくなったぞ。

「ほほほっ。リサ、ここは見逃してやろうぞ。お前、遠山キンジを竜の港へ導いて参れ」

パトラはそう言い残して、ひらり。

バイクに跨がり、ドルルルッ……とエンジンをかける。ていうか今さらながら気付いたけど、そもそもフランツを引っかけたのも多分パトラだなこれ。タイヤ痕から見て。

橋の上に大発生したコブラに、オランダ人たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ――

シスターの少女たちも悲鳴を連ねて、ダッシュで右往左往している。

だがそんなパニックの中、ごすんっ！

喝を入れるように、重厚な金属音が鳴り響いた。

「うろたえてはなりません、乙女たち！　あれは魔女の術！　魔女を前にして退がった者には、私が神罰を与えますッ！　物理的に！」

イタリア語で――3割ぐらいは聞き取れた――叫んだメーヤは、ぶうんっ！

シスターたちの最後尾で、空気を切る音を上げて例の大剣を振り上げている。

どちらかというとパトラや俺たちより、部下を威嚇するようなムードで。
それにビビりまくったシスター少女たちは……
額に汗を垂らしつつ、それぞれコブラからの後退をやめ――しゃんしゃんっ！
鈴の音のような音を立て、ぞろっとした法衣の内側から両刃の細身剣を抜剣した。
そしてそれを、ちゃきちゃきっ！　と、一斉にパトラの方に向けている。
それはよく訓練され、統率も取れている動作だ。やっぱり、ただのシスターじゃない。
彼女らは日本でいえば僧兵みたいな、言うなればシスター兵なんだ。
「あれは『砂礫の魔女』パトラ！　名のある魔女を狩れば、殲魔科の単位が一気に20単位付与されて、半年は遊んで暮らせますよ！　アドナイ・メレク・ナーメン！」
つい先日まで銀氷の魔女と組んでたくせに、目を据わらせてバチカンのお経みたいなのを唱えてるメーヤは――正直、魔女なら誰でも狩りたいようなムードだ。
「――妾を討つ？　バチカンは出来もせぬ事をよく嘯くのう。ほほほっ」

バルンッ！　と俺たちを弾くようにバイクをスピンさせたパトラの体から――バッ！
指輪や鋲が変形した金色の弾丸が、散弾銃のように放たれた。シスターたちの方へ。
ビシビシビシッ！　と、銃ほどではないにせよ高速度で飛んだ弾子がシスター兵たちを薙ぎ倒す。だがそれらは目くらまし。
本命は――ネックレスが固まってできた、野球ボールほどの金属球だ。
メーヤの頭部めがけて飛んだ、それを――
「――神罰代行ォ――ッ！」
がきィィィィィィんっ！
けたたましい金属音を上げて、メーヤが一旦肩に担いだ大剣をバットのように振るって打ち返した。ヤンキースの強打者ロビンソン・カノみたいなフォームで。
打球はパトラの真横、木製の橋桁にブチ当たってそこを粉々に破壊する。
な、なんちゅう馬鹿力だ。メーヤ。まるで人間大砲だよ。
これにはさすがのパトラも首をすくめ、リサはまた腰を抜かしてスッ転ぶが

「……チッ、外しましたか」

倒れたシスター兵たちには目もくれず、メーヤは舌打ち一発。

これとマトモにやり合うつもりはないのか、パトラはアクセルを引き……バイクで退散していく。その後輪脇のカバンに、ぴょん。どうやらそれが本物らしいコブラが1匹噛みついて飛び乗った。よく飼いならしてるなぁ。

俺も逃げようと思ったが——いつの間にか、両足に泥のコブラが何匹も巻き付いていて走れなくされている。

パトラめ。メーヤが自分を追ってこないよう、俺を置き土産にしたって事か。

シスター兵たちも法衣が防弾性だったらしく、皆ほとんど無傷。

足の遅いリサは逃げるまでもなく、俺を守るように立ち尽くし——

——俺とリサは、メーヤたちバチカンの一味に捕らえられたのだった。

シスター兵に連行されるような形で、俺たちは町の中心にある教会に入れられた。

シスターたちは武装している。パトラ・カツェ・ヒルダ級の戦闘力を持つメーヤもいる。

ここで素の俺が暴れても逃げられないだろう。リサも連れてるわけだしな。

（それに……）

今はしばらく、様子を見た方がいい。

メーヤは、とりあえず俺たちを攻撃してはこなかった。

捕らえた際も、シスター兵たちに武器を収めさせていた。

ここは対話の余地がまだあると考えていいだろう。

翼廊から入った、石造りの教会内は——色とりどりのステンドグラスや緻密な天井画が視界全体を豪華に彩っていた。長年使われた主祭壇や、お供え物の蝋燭も……日本の古い神社や寺のような本物の味がある。白雪と入った台場のなんちゃってチャペルとは違うな。

「……華やかだな、カトリック教会ってのは」

メーヤのテンションを計ろうと思って、側廊でそんな話を振ると——

「まあ。遠山さんには、ローマのサン・ピエトロ聖堂を見せなきゃいけませんね。ここは鄙びた聖堂ですよ」

うふふ、と、柔和な笑いで応えてくる。

やっぱり……表情は少しだけ硬いものの、俺を敵視してるムードじゃないな。

その後、俺とリサは地下の小部屋を与えられて――シスター兵の監視つきではあったが、暖房で服を乾かさせてもらえたし、温かいスープとパン、それにコーヒーも供された。

しばらく、そこに軟禁された後……髪をとかし、自身も一服してきたらしいメーヤが再び現れ、シスター兵を人払いした。

そして扉を閉ざすと、すぐ――

「遠山さん……！　また会えて、本当によかった……！　神に感謝します……」

目に涙を浮かべ、いきなり、むぎゅっ。

イスに座っていた俺を、思いっきり抱きしめてきたぞ。

（って、お、おいっ……！）

いきなりの事だったので躱せなかったんだが、今、お、俺の顔面に――

メーヤの、原子力空母級のたわわな胸が密着してるぞ。白い法衣越しにだが。

弩級戦艦胸を持つ白雪・中空知を上回っているものと思われる、この圧倒的ボリューム……加えて、シュガーミルクみたいな甘い香り……！

しかもメーヤは俺より1つ年上のお姉さん。1歳とはいえ年上はいかんよ、年上は！

なんでか知らんが俺は年上に弱い事が経験則から判明してるんだ、ヒス的にッ。

（というか、は、放してくれよッ、窒息するって……！）

俺の祈りがキリストさんに通じたか、ぱっ、とメーヤは俺を放してくれたが

……ぎろろ……

な、何だ。今度は……

はす向かいにお行儀よく座ってたリサが、ものすごい勢いで睨んでるぞ。メーヤを。

「――シスター様、すごいお胸ですね」

なぜか今の光景にイラッと来たらしく、珍しく不機嫌ムード丸出しのリサに

「はい？　ああ、これは……重くて肩が凝るだけですよ？」

メーヤは苦笑いで返してる。リサにガンを付けられてるのに、友好的なムードで。

「――あのシスターたちを、この部屋には戻さないで下さい。さっき、ご主人様に食事を出した事が気に入りません。ご主人様の身の回りのお世話は、私がするのです。私以外の者を仕えさせる事はしないで下さい」

そこはメイドとしてプライドに障ったのか、リサは、ぷいっ。
サラサラの金髪を跳ねさせて、ソッポを向いた。
「……分かりました。あなたが誰かは知りませんが、ご気分を害してしまった事には謝罪します。では……遠山さん。少しお話しをさせてください」
リサに一礼してから、メーヤは俺の手を取って部屋の外へ連れていこうとするので――
俺はリサに『ヘタに動かないようにな』とアイコンタクトしてから……席を立った。

教会の側廊には、格子柄の彫刻がなされた古木の小部屋があった。
中のよく見えない、木製の電話ボックスみたいなカンジの立体物だ。
メーヤはその周辺からもシスター兵を人払いして、片側の入口から俺をそこに入れる。
人が2～3人ギリギリ入れるぐらいの、暗く、やたら狭い小部屋――
その真ん中には仕切り板みたいな、これも焦げ茶色の木で作られた格子がある。

（なんだか、留置場の面会室みたいだな）
そこのイスに座ると、ボックスの反対側にあった入口からメーヤが入ってきた。
うっ……ヤバイぞ。この狭い空間は。
メーヤが入ってきた途端、得も言われぬ甘々なミルク系のスメルが満ちてきた。
欧米人は食生活や入浴の習慣が異なるため日本人より体のニオイがハッキリしており、そこは困りものと言われるが――それも、その発生源による。このように相手が美人さん、しかもさっき巨乳を押しつけられて異性として意識させられたばかりのお姉さんから漂う芳香となると……生来鼻が利く俺にとっては体内のヒステリアメーターがグングン上がる、別の意味で困りものの要素となるのだ。
ほぼヒスりかけて脳内で素数を数え始めた俺をよそに、格子の仕切りの向こうで見えるような見えないような状態になっているメーヤは――
「狭い所でごめんなさい。ここは、告解室。本来はキリスト教徒が洗礼後の罪を聖職者に告白するための部屋です。ここであなたが話す事は、私は神に誓っ

て口外しません」

「……機密性があるって事か。信用していいのか」

「この部屋では、喩え殺人の罪を告白されたとしても、シスターはそれを誰にも――警察にも話しませんし、記録にも残しません。これは宗教上の、絶対の掟なのです。どうぞ、今、私に言いたいことを全てお話し下さい」

待ちの姿勢に入ったメーヤの女っぽい香りに、密かに鼻腔を弄ばれ続ける中

―

俺はしばらく黙った後、お言葉に甘えて聞いてみる事にする。

「……ジャンヌは師団に戻ったか」

「いいえ」

「お前は、俺とジャンヌを疑っているのか」

「ここでは、私は――真実を述べるか、沈黙するかしかありません。その問いかけには、真実を述べます。私は疑っていません」

「……」

「前にもお話ししましたが、私は信じる事によって、神の加護を得る者です。味方の事は誰も、疑わないのです」

なるほど。

――メーヤ。

ありがとう。

そして、裏切り者の1人はお前だ。

それを今、改めて確信させてもらったよ。

さっきお前に抱きつかれた時に半ヒスって、この小部屋で8割ヒスほどになったお陰で確認できた事だが……メーヤは、俺が推理した裏切り者の片側。20%だけの、裏切り者だ。

だが、その詳しい話は今しない方が良さそうだな。

本命――80%の方をキッチリ判明させ、スパイ行為を止めさせるためにも。

「……遠山さん」

俺の思惑をよそに、メーヤは――

そのでかい胸の谷間から、四つ折りにしたA4の紙を取り出した。

そして、木の格子の下にあった隙間から俺に渡してくる。

「遠山さんがブリュッセルを去ったのは、遠山さんなりのお考えがあっての事でしょう。私は、あなたの身の潔白を証明するためにも密かに動いています。

ですが、リバティー・メイソンは遠山さんを疑っている。残念ながら、バチカンにもその動きがあります」

渡された紙を開くと――それは、KLM航空の電子チケットだった。既に予約済みで、空港でバーコードを発券機にかざせばボーディング・パスが手に入る旨が書いてある。

行き先は――ジョン・F・ケネディ空港。ニューヨークだ。

「私は、あなたを助けに来たのです。このチケットで、一旦ヨーロッパから逃げて下さい。年明けに玉藻さんと電話会議をした際、アメリカにはジーサードさんがいると聞きました。彼ならきっと、匿ってくれるハズです」

この、俺をヨーロッパ戦線から外すような計らいは――メーヤが、俺が内通者の正体に感づいたかもしれないと察しての事でもあるんだろう。

その手のひらで踊らされてるようで、少し悔しいが……

リバティー・メイソンが敵に回った以上、このままヨーロッパにいても勝ち目は薄い。

一旦、退こう。そしてアメリカや日本の師団を味方に付けて戻った方が有利になる。

そう判断した、俺は――

「恩に着るよ、メーヤ。そこでもう一つ頼みたいんだが――チケットを、もう1枚頼む。俺と一緒にいたリサ……あの女は、眷属から逃げてきた脱走兵なんだ」

「まあ。驚きです……私はてっきり、遠山さんの現地妻かと自然に考えていました」

「げ、現地妻って。妻もいないのになんで先に現地妻がいるのを自然に考えられるんだよお前」

「だって遠山さんといえば、そういうチャンスをあらゆる女性に下さる頼もしい男性だということで――みんな期待してるんですよ？　私もです」

「『遠山さんといえば』って。いつ俺がそんな事を……」

「いつもです」

「笑顔で即答すんなッ、いいか、俺は――」

などと話がズレてきたところで、コンコンッ。

急に、告解室のドアがノックされた。

メーヤは背筋を伸ばし、扉を後ろ手に少し開け――

「何事ですか。近寄ってはならないと言ったハズです。馬乗り平手打ち20回の神罰を希望するのですか？」

そこにいた、怯えるような表情のシスター兵を叱っている。イタリア語で。この人、部下に対してはかなりキビシイよね。

「そ、それが。緊急のお電話なのです。『上』からです」

と、恐縮しまくりのシスター兵がメーヤに携帯を渡す。

「……」

徹底したヒエラルキー組織になっているカトリック教会では、メーヤも上には逆らえないらしく――狭い告解室を出て……

俺を置いて、外で電話し始めた。

少し……その通話が、長引いている。

イタリア語だが、『彼』『空港』という単語が何度か聞こえた。俺に関する話のようだ。

（話のついでに、チケットをもう一枚手配しようとしてくれてるのか……？）

俺はメーヤの話を盗み聞きしようと試みる。

「――破門を持ち出すのは悪質ではありませんか。そう言われてしまうと――

誰も逆らえない事はご存知のハズです。ですが、それなら……戦えという命令はお与えにならないで下さい。それは戦略的に間違っているがゆえです。遠……彼の二つ名をご存知でしょう？　彼は、強い。後輩たちに援護させても、私では勝てるかどうか五分五分です」

3割ぐらいしか聞き取れなかったが、まさか今や俺がイタリア語を少々理解できるとは夢にも思ってないらしく――

メーヤがハッキリ喋ってくれたお陰で、幾つか単語が拾えたんだが……どうも……

危険な話をしてるらしいぞ。

俺とメーヤが戦わされる。そんなような話に、聞こえた。

「それに、彼は師団の代表戦士として戦ってきた盟友でもあります。私は、彼が好きです。遠……彼とは、戦いたくないのですッ」

電話口にまくし立てたメーヤは、今度は逆にまくし立てられているような顔になる。

「では……彼を空港まで導く事は、致しましょう。アドナイ・メレク・ナーメン」

と、電話を切ったメーヤは――
悔しそうに携帯を握りしめてから、シスター兵に渡す。
俺の味方のように振る舞ってくれていたのが、今、敵に回った感じだ。
隙を見て、また逃げなきゃいけないな。だが、リサを連れてどこまで行けるだろうか。
そう考える俺を置いて……
メーヤは、告解室に戻ってこない。
こっちに背を向けてうつむき、黙っている。
ここに入れば、メーヤは嘘をつけない。口を滑らせるリスクを冒したくないんだろうな。
……それなら、こっちから確認を取らせてもらおう。
と、俺は告解室を出て――身廊で、メーヤの背に語りかけた。
「メーヤ。1つ、訊かせてもらうぞ。お前は……誰が師団の情報を眷属に流していたか、何となく感づいていたんじゃないのか」
俺の声に、メーヤは振り返らず……感情を押し殺した声で、応えてきた。
「私は信じる者。感づいていても、疑わないのです。それが信じるという事ですから」
どうりで……
誰が裏切り者なのか、誰にもハッキリと分からなかったワケだぜ。
メーヤのこれは、裁判所なんかではよく議論になる――『未必の故意』の亜種。『罪が犯されるかもしれない』と分かっていながらも、それを幇助したり看過したりする行為だ。
メーヤの場合、荷担の理由は極めて珍しいものだが……
その信条が、アダになった形だ。
ずっと「なんとなく怪しい」のがいる事を知りつつ、自分の話が内通者に伝わっている事も察しつつ、それでも仲間に情報を共有してきたのだ。メーヤは、誰も疑わないから。
――信じる。
それは良い事だが、危険な事でもある。俺がジャンヌを信じる事から、師団内で窮地に陥ったように。その危険性に、メーヤは無防備すぎた。『強化幸運』の加護を得るために、無防備であり続けなければならなかったのだ。
だから――言うなれば、ある種の狂信者であるメーヤは――悪意は無いもの

の、最前線から内通者へ情報を流し続けた加担者となったのだ。
だが、では内通者は誰なのか？　その人物はなぜ、師団の情報を眷属に流したのか？
そして、ジャンヌはなぜ、俺を妖刀の元へ連れ出したのか？
それらの謎が明らかにならない限り、この件はまだ……一件落着には、ほど遠いな。
「遠山さんは、とても直観の優れた御方ですね。仰りたい事は分かります。何をどこまで理解されたのかも。ですが私は、信じる事をやめられません。やめた時、私の身には……今まで恩恵を受けてきた、強化幸運の反動が訪れるのです。武にまつわるあらゆる悪運が、この身に降り注ぐ。それは……死を免れないものでしょう」
そう言って、メーヤは、振り返った。
「――ここで私を討ちますか、遠山さん」
その目は、一定程度の――覚悟を決めた者の目だ。
勝てるかどうか分からない相手と、それでも闘るなら闘る。
そういうつもりの、目。

「討てば問題の源は断たれ、欧州戦線は盛り返すかもしれませんよ」
……ピリッ……
と、メーヤから――僅かずつ、殺気が放たれ始めた。
1秒、2秒、黙っている内に……
この身廊に、一触即発のムードが張り詰めていく。
「……」
「……」
今なら……瞬間的には、1対1だ。あのブリュッセルの夜とは違う。
ヒステリアモードには、ほぼなれている。
銃は――ある。メーヤたちは俺を武装解除しなかったからな。
どうする。
どうするキンジ。
俺の額に、脂汗が滲む――
その時。
……カタッ……カタカタッ……
と、ステンドグラスが鳴り始めた。

何だ？　この石造りの教会自体が……揺れているような感じがする。
その揺れが大きくなってきた。その揺れを感じたメーヤも、俺との睨み合いを中断して辺りを見回し始めた。メーヤによる魔術じゃない。
「地震……？」
「爆発……？」
日本人とヨーロッパ人では微震に対してまず思う事が違うらしく、そんな事をハモった俺とメーヤだったが――どうやら、そのどちらも違うようだ。
シスター兵たちが、怖がりながら窓の外を見ている。
外の様子が、おかしい。
――強風だ。
教会の外、ブータンジェの町を――台風のような暴風が吹き荒れている。この揺れは、風で起きたものなのだ。そもそもオランダは地震の無い国だしな。
その風に乗って――ひゅんっ！
――矢？　のようなものが窓の外を駆け、ズシンッ……！
今度は爆音と共に、教会が揺れた。
「……風の……『颱風のセーラ』……っ！」

青ざめたメーヤが、ごすんっ！
法衣の背から、教会の床に大剣を落とした。それが右に倒れるのに任せて、右手で柄を掴んでいるが――そのターゲットは、俺ではない。外を見ている。
「敵襲！」
「敵襲ー！」
シスター兵たちが口々に叫び、窓の外を指さす。そこでは烈風に乗って、何本かの矢が空を誘導弾のようにカーブしてこっちへ飛んでくる所だった。
先端に爆薬を搭載した、小型ミサイルのような矢は――
――ドンッ！　ドウッ！　ズズ……ンッ！
次々と教会に命中し、石の壁を崩し始めた。
あのサイズでこの威力という事は、ウルチタン爆薬。ＴＮＴの１９０％の威力を誇る、最新の高性能爆薬だぞ。
「と、遠山さんッ。外に……避難をッ！　眷属の襲撃です！」
震動でステンドグラスが割れ、吹き込んできた暴風に乗った破片が色とりどりの刃物となって礼拝堂を飛び交う。
（……眷属……！）

それを聞いて、俺もベレッタを抜き――リサのいる地下室へ続く階段に振り向いたが、そこには壁から剝がれたタペストリーが上手く被さっていて隠すようになっていた。

敵がここを爆撃している以上、地下はむしろ防空壕のようになって安全だろう。

「……リサ！　そこに隠れているんだぞ！　大丈夫！　お前は――俺が、守る！」

怯えているであろうリサに、側廊から叫ぶと……「はい！　ご主人様……！」という、リサの声が返ってきた。

そして大剣を手にシスター兵たちを呼び集めるメーヤに――

「メーヤ、『避難を』とはあんまりじゃないか。俺は誰にどう思われていようと、師団の一員のつもりだぞ？　一緒に戦わせてくれ」

苦笑いしながら、マットシルバーのベレッタを抜いて見せる。

そんな俺に、メーヤは頼もしそうに――俺を信じて、笑顔で頷いてくれた。

爆撃で破壊された正面の扉を踏み越え、警戒しながら外に出ようとすると――

パンッ！　パパパンッ！　前方・左右の路地から発砲音が鳴り響き、十字砲火気味に9㎜弾が俺たちに浴びせかけられた。

「おっと」

「んッ……！」

――ギギンッ！　ギギギンッ！

何発かは銃弾撃ちで俺が防弾し、メーヤは大剣を盾にして後続のシスター兵たちを守る。

一歩、二歩、後退した俺とメーヤは――

「今の銃声は……ワルサーP38。それとMG42だな。ルガーP08もいる。カツエたちだ」

「パトラが連れてきていたのですね。さっき討ち漏らした事、悔やみきれません」

ちゃっちゃっ、と巨大な胸の前で十字を切ったメーヤは――

憎っくき眷属を前にして、俺と一緒に戦ってくれるムードだ。

「――遠山さん。通りの向こう……風車小屋の、羽根の上。グレーのブレザーを着ている、水色リボンの少女を確認して下さい」

と、メーヤがシスター兵から受け取った軍用双眼鏡を俺にパスしてくれる。
言われた場所、風車の上を確認すると……
十字架のようになる位置で固定されている風車の羽根、そのてっぺんに——
12歳ぐらいの少女が、つまらなさそうな顔をして立っていた。
斜を向いているが、それでも颯爽とした印象を受ける美少女だ。
町を見下ろす、コバルト色のジト目。長いストレートの銀髪。孔雀の羽根を
あしらった鍔広の洒落た帽子。特徴的なのは……左手に携えた、本人の身長よ
りも長大な長洋弓だ。それこそ孔雀の羽根のように矢を広げて収めた、矢筒も
携えている。弓使いか。
「あれは、『颱風のセーラ』。パッと見はただの目つきの悪い少女ですが、眷
属、イ・ウー主戦派残党の1人——セーラ・フッド。ロビン・フッドの血を引
いた、スコットランドの魔女です」
そう語るメーヤの声には、緊張感がある。
セーラはそれだけ、手強い相手だという事なんだろう。
暴風の向こうで、彼女の長い銀髪は不思議にも揺れてない。帽子に付けた羽
根飾りもだ。

あの少女がいる場所が、台風の目のようになっているんだ。
この暴風は『颱風』の二つ名の通り、あの少女が呼び寄せたのだろう。近所
迷惑な子だ。
「今度は……ロビン・フッドのお出ましか。眷属は人材豊富だな」
ロビン・フッドとは——シャーウッドの森を根城に、貴族から富を奪って貧
しい人々にバラまいた、13世紀のイギリスの義賊だ。
それに後の歴史のどこかで、魔女の血が交じったって事か。
（しかし、ナチ・ガールの銃より遠くに弓がいるとはね。かなめの『剣は銃よ
り強し』に追記が必要だな）

だが元々、弓とは一般のイメージ以上に長射程の武器だ。中世イギリスのロングボウの射程距離は１５０m。実戦上の平均交戦距離は拳銃よりも遙かに長い。

シンプルな構造で信頼性が高く、発砲音も無いので隠密性も高い。今回のような奇襲には現代でも運用される、極めて実戦的な武器なのだ。弓とは。

有史以前から使われている物だからってナメてかかると、ハリネズミにされるぞ。気をつけてかからないと。

「――セーラは風を操り、常識を超えた距離・角度から敵を射貫く弓の名手です。ただ、人とコミュニケーションを取らず、気分屋で、眷属も使いにくかったらしく……前線まで出撃する事は希で、奥の手のような存在だったのです」

眷属版のレキ、ってカンジだな。所々、似てる。

その奥の手ちゃんまでオランダにいるって事は……眷属はスパイに聞いた師団の内紛に乗じて、本陣をこっちに移してきたのかもしれないな。

「セーラの有効射程距離は？」

「彼女の弓術は、通常の弓射とは異なる概念の攻撃と捉えなければいけません。あの矢は彼女が操る気流に乗り、どこまでも飛ぶとも言われているのです。2

km先からでも、的に当てた矢の矢筈に次の矢を命中させたとか」

2kmで継ぎ矢って。もはや人間じゃないぞ、それ。

妖刀といい、セーラといい、まるで人間離れ人間のバーゲンセールだな。

「狙撃手は厄介だ。まずセーラを倒そう。風車小屋までは――町を迂回したり散開しても、カツェやパトラに付け入る隙や時間を与えるだけだ。風がジャマだが、中央突破しよう。俺は1本だけ裏道に入って、お前たちとほぼ併走してセーラに肉薄する。最終的には風車小屋をV字に2方向から攻める形だ」

俺がそう告げて、ベレッタをコッキングすると――

「分かりました。遠山さん、ご武運を」

メーヤは十字を切って、大剣を構え直す。

そして、

「聖乙女たち！　ここより先、颱風、砂礫、厄水、3魔女の首をバチカンに持ち帰るまで、1歩たりとも後退は許しません！」

後続のシスター兵たちに勇ましく命じ、教会の外へ大剣をランスのように向ける。

はい！　と声を合わせて応えたシスターたちは、法衣の下から……磨き抜かれた銀剣と、バチカンの紋章・聖ペトロの鍵マークが入った小型盾をそれぞれ出す。

「主は我が剣、我が磐盾なり！　サン・カルロ・アル・コルソ聖堂の鐘を融き、十字軍の聖剣と同じ型で鋳り、サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂の銀十字から削った銀を鍍し、聖水と聖骸布で磨き上げた――私たちの鐘十字剣に、殲ぼせぬ魔はありませんッ！　神罰代行オーッ！　私に、続けェーッ！」

部下を鼓舞し、甲高い声と共に先陣を切って暴風の中へ飛び出したメーヤに

やぁーっ！　と鬨の声を挙げながら、抜剣したシスター兵たちも続く。

（な、なんて時代がかったヤツらだ……全員、武装はその剣と盾だけなのかよッ。お前ら！　ていうか……ッ！）

唯一の飛び道具、拳銃を構えた俺も少し遅れて出るが――

ひとかたまりになって風車小屋を目指すメーヤ隊は、町のあちこちに潜むカツェの子分たちから9㎜弾を浴びまくっている。カンカンッ！　カカンッ！　と金属の盾が弾を防ぐ音を連ねるが、ばたりっ。ばたっ、ばたっ。防弾法衣に被弾したシスター兵が1人、また1人と倒されていく。

だが――メーヤと残りのシスター兵はそれを意に介さず、がむしゃらに突っ込んでいく。

まるで旧日本陸軍の銃剣突撃を見てるようだ。

かなめやジーサードの超理論は、あくまで例外。通常、剣は銃に敵わない。

そんなのは子供でも分かる事実だ。

だが、それでもバチカンは自分たちの誇るあの伝統のスタイルで今まで戦ってきたのだ。

（どうりで、極東戦役のヨーロッパ戦線が押されるワケだぜ……！）

唖然としつつも、遅れるワケにはいかないので――

俺も作戦通り、風の吹き荒れる裏道に入って風車小屋を目指す。ナチ少女たちの銃撃を連鎖撃ちでいなし、何人かの銃を鏡撃ちで破壊しながら。

そこに――ヒュンッ――！　俺めがけて、道を這うように矢が飛来した。

孔雀の矢羽根を付けた、白銅の矢だ。

（弓矢……颱風のセーラっ……！）

銃弾撃ち――

ならぬ矢撃ちでそれを迎撃しようとしたものの、それを先読みしたように吹いた旋風が矢を煽り――なんと、矢が弾を避けて上昇した――！

殺られたッ。

そう思った次の瞬間。

すれ違った俺の弾が運良く矢羽根を掠め、矢の軌道を乱し――ヒュンッ！

矢は俺の頬を掠めて、背後へと消えていった。

「……ッ……！」

ピッ、と頬を走った鋭い痛みに、いや、今の出来事のショックに、俺は目を見開く。

銃弾撃ちが……破られた。出会い頭に、いきなり。

俺は矢羽根を狙って撃ったワケじゃない。矢が俺の頭に突き刺さらなかったのは、単に運が良かったから。たぶんメーヤにあやかった、幸運に助けられたからだ。

実質的には、攻略されたぞ。銃弾撃ちが。

1対1だったら、やられてたんだ。今のは。

颱風のセーラ――あの少女の矢は、単に放物線を描いて飛ぶとは限らない。

矢の周囲の操られた風に乗って、まさにミサイルのように自由にコースを変え

られるんだ。
だが……それが分かった以上、対処のしようもあるだろう。
セーラちゃんよ。見たところ小6か中1ぐらいだったが、よくも高校生のお兄ちゃんを殺りかけてくれたな。とっ捕まえて、オシリをペンペンしてやるぞ。
桜花でなッ。

あっちでは剣。こっちでは弓。
まるで中世ヨーロッパの戦争みたいな光景になったブータンジェの一角で――

俺はメーヤと、5人だけ辿り着けたシスター兵とで、防塁の風車小屋を挟み撃ちにする。ここの周囲だけウソのように風が無い中、風車の上の羽根に突っ立っていたセーラは……
「……」
伏せた視線を俺たちの方に向けることもなく、弓に矢も番えず、ただ黙っている。
それもそのハズ、風車の右と左の羽根には――

「ほほほっ。トオヤマキンジ、さっきは……クシュンッ！」
さっき濠を泳いでカゼをひいたのかクシャミでセリフを中断した、よせばいいのに水着みたいな勝負服を着たパトラと――
「よう遠山。お前、師団から抜けたんだって？　そんなにあたしに会いたかったのか？」
肩にエドガーを乗せてニヤニヤ笑う軍服姿のカツェが、それぞれ腰掛けていたのだ。
この距離になれば、セーラはもう戦わない作戦なのだろう。
だが、それじゃあこっちの腹の虫が収まらないな。
「パトラ、ごめんよ」
まだ何とかヒステリアモードを保てていた俺は、『不可視の銃弾』で――パンッ！
風車の付け根にフックで留められ、その回転を止めていた鎖を撃つ。
すると、ギギギッ……と、4枚羽根の風車が……パトラが下がる形で右回転を始めた。
その下では――

風車の下へ移動したメーヤが、パトラ、セーラ、カツェとその場に回ってくるであろう魔女たちを連続して討ち取るべく大剣を構える。

だが――

「ケケケッ。パトラ、お前の方があたしより重いんだなァ」

足をプラプラさせて笑うカツェも、

「わっ妾はお前より背があろう！　こらトオヤマキンジ！　おっお前、覇王に対して何たる不遜かッ……ックション！」

喚くパトラも、その2人の上でため息をついてるセーラも……

眷属たちには、緊張感がない。

まるで自分たちが戦う予定なんか、ハナっから無いような――

「――ッ……！」

俺は振り向く。

それがどこなのかも分からないままに。

何だ。何か、大きな――力が、この場を狙っている。

妖刕……？　いや、違う。どこかが妖刕に似た、それに匹敵する力。

それにはメーヤも気付いたらしく――眷属の3魔女を討ち取る好機をフイに

しつつも、慌てて風車に背を向ける。そして、さっき俺たちが陣取っていた教会の方を見渡した。

「……魔、剱……っ……！」

敗北を悟り、呻いて歯ぎしりしたメーヤの視線の先――

およそ170m離れた教会の屋根、十字架の前には。

（日本の、女子高生……？）

傾いた日輪を背に、俺より1歳下ぐらいの少女が立っていた。

風にバタバタ暴れる白いセーラー服と、緑と赤のチェック・スカート。

細い赤リボンで結われた――アリアのそれよりは短い、ツインテールの黒髪。

意志の強そうな、プライドの高そうな、ツリ気味の両目。
小柄なので可憐な印象を抱かれるが、まん丸で大きな胸と、短いスカートからのぞく曲線的な脚部は年の頃より色っぽくもある。
（『魔剱』……だって？）
あれが――
妖刀と共に眷属が雇ったという、魔剱……なのか!?
妖刀は割とイメージ通りだったが、こっちは……だいぶ、想像と違う。ヒルダみたいな女をイメージしてたんだが。
そして、予想と異なるのは彼女が持っている剣もだ。
いや、あれを剣と呼んでいいのだろうか。
刃物である事は間違いないのだが、その形状は……直径2m弱の円形。その外周が刃になっている武器だ。
土星の輪のようなそれを、少女は内側から浮き輪やフラフープのように保持している。
その丸い刀身の上を――クルックルッ――
沈みつつある太陽光にナナメに重なるようにして、黄金色の光が回転してい

る。魔剱の胴の周囲を、衛星のように。

「――ほほほっ。トオヤマキンジ、いろんな意味で、よぉーく見ておくがよいぞ」

「イヨッ、サムライガール、アリスベル！　メーヤ、おめーのパンツは何色だ！」

それを見たパトラが何やらいやらしく目を細め、カツェが愉快そうにパンパン手を叩き、セーラはもう一度ため息をついた。

そして……メーヤとシスター兵たちは……一気に、怖じ気づいている。

魔剱は、あの距離から攻撃してくるというのか。

あの距離・高さに陣取るという事は――あれも、狙撃手。

となれば、俺たちに対抗する手段は無い……！

次の瞬間、パッ――

音もなく、魔剱の円環剣で回転していた光弾が放たれた。こっちへ――メーヤめがけて。

明らかに超能力、それも初見の技なので、俺には対応の取りようが無い……！

そしてメーヤは、砲弾のように飛来した光の――

直撃を、受けた。為す術もなく。

「――きゃあああ――っ！」

メーヤの身体に飛び込んだ金色の光は、内側から外へと……今度は虹色に色を変えて、爆発するように弾け飛ぶ。

その力で、白い法衣や靴がビリビリと内側から割け――

（……っ……！）

見る間に、メーヤは下着姿に剥かれていく。

レースで縁取りされたシルクの白下着と、上裾に白薔薇の刺繍がされた白いニーハイ・ストッキングが露わになっていき……

「あ……あ、あぁ……」

全身からあらゆる力を失ったような、脱力しきった顔で――すとんっ……

メーヤは立っている事すら出来なくなり、その場に、仰向けに倒れた。

ずしんっ、と、地面に落ちた大剣も……パキン……という力ない音と共に、バラバラの金属片に砕け散っていく。

……メーヤが。

ヒルダの首を落とし、カツェと互角に戦ってきた……メーヤが……やられた。

たった、1撃で。

いや、そんなバカな。メーヤは幸運強化の魔術で守られていたハズだ。武運に恵まれる、ある種のチート性能を持っていたのに。

その加護を無効化したってのか……!?　魔剣の光弾は……！

混乱する俺の前で、大将を討たれたシスター兵たちは――

倒れた下着姿のメーヤに背を向けて飛びつき、おしくらまんじゅうみたいに取り囲む。

そして片膝立ちになって、自分たちの外側に鍵マークの盾をカメの甲のように並べた。

回転する風車の羽根から――とんっ、すとんっ、とんっ、と――

「降伏せい、トオヤマキンジ。それとも、お前もストリップを見せて行くかの？」

「……パトラ姉、下品。バカバカしい」

「魔剣――アリスベルは魔術の先端科学兵装。誰も知らねー魔術で超能力者をやっちまう、『魔女狩り魔女』なんだ。あのうるさいメーヤだって、たったの1撃でご覧の有様さ」

パトラ、初めて喋ったセーラ、カツェの3魔女が地面に降り立ってくる。

魔剣は……アリスベル、という名前らしい。日本人に見えたが、違うのかも

しれないな。

立ち上がる事のできないメーヤ、盾を掲げてしゃがみ、ガクガク震えているシスター兵たち……彼女らはもう、戦闘を継続できる状態じゃない。

そして……前門の3魔女、後門の魔剣。

この状況は、ヒステリアモードの頭で考えても――

（俺1人じゃ……荷が、重いな）

1人1人ならともかく、パトラ、カツェ、セーラ、アリスベルの4人を一気に相手にはできないだろう。ヒステリアモードでも。

そもそも俺は、魔女との対戦成績が悪い。

倒した経験はあるが、それは1人ずつ、しかも仲間の助けがあっての話。

俺が単独で超能力者を倒せた事は……実は、無いのだ。

ヒステリア・ベルセの状態でなら特攻したかもしれないが、今のノルマーレで考えるとそれはベストな選択じゃない。今は――

投降するしか、ない。メーヤたちの安全のためにも。

町を揺さぶっていた暴風が、すっかり止んだ後……俺と共に武装解除された

シスター兵たちは、カツェに「お前らもひん剥くぞ」と脅されてリサの居所を吐いてしまった。

しばらくすると、ナチ少女たちに捕まったリサ、そしてどこかにあの剣を収めたアリスベルが風車小屋の前に集合してくる。

凛としたムードを持つアリスベルは、俺に歩み寄ると――

「……若い、遠山キンジ。あなたに遭う日は、いつも嵐の中ですね」

不可解な第一声と共に、気丈そうなツリ目で睨み上げてきた。

「人違いだ。俺はお前に会った事はない」

なぜか若い呼ばわりされたが、コイツの方こそ俺より年下だろう。

しかし……この、アリスベルの目つき。

これは、奇妙だな。確かに俺に面識があるような顔をしている。

「あなたと神崎・H・アリアは――時間の樹木を歪める金環のようなもの。特にあなたのせいで藍幇の運命が変わり、私たちは均衡を取らなければならなくなった。もうこれ以上、あの組織に関わらないで下さい」

S研的な発言の意味は、分からなかったが……

どうやら、玉藻の調査にミスがあったらしい。

魔剣と妖刀は、きっと藍幇の関係者だ。

藍幇は先月の香港で、師団の軍門に降っている。それでも俺に敵対してきている事から判断して、上海藍幇あたりの息が掛かった連中なのかもしれない。

「……関わらせたくないなら、俺を殺せばいいだろ」

「そんな事をしても、何の解決にもなりません。だって、あなたは殺しても生き返るのでしょう？」

さすがにそれはねーよ。人間離れ人間だって人間だ。

でもマジで殺されてもアレなので、俺はこれ以上墓穴を掘るような事は言わないでおく。

「しかし……妖刀は羨ましいヤツだな。こんな可愛い子がカノジョだなんて」

などとヒステリアモードの出涸らしで話を逸らすと、アリスベルは……

……ぼんっ！

頭から湯気を噴火させるような勢いで、アリアのお株を奪う急速赤面術を見せた。

「かかかカノジョ!?　私が、静刃君のっ!?　違います違いますモーレツに違いますッ！　だっだっ誰があんな、下着ドロボーのカノジョだなんて！」

これもアリアばりのヒステリーを起こして、ぶんぶんぶぶんっ！　アリアなら地団駄ダンスを踊るところを、両こぶしを上下にシェイクするモンキーダンスを見せた。

そのくせソッポを向いた怒り顔は、いかんとも形容しがたい変顔。俺のカノジョ発言に悪い気はしなかったのか、ニヤけるのをこらえてるらしい。

……うん。ヘンな子だ。この子も。

しかし妖刀は妖刀で、このヘンな女の下着ドロやったのか。何やってんだよ。あんなに腕が立つのに残念なヤツだな。まあこれも見た目はとびきりカワイイから、気持ちは全く１００％完全に想像できないとは言わないが……粉雪風に言うと、不衛生だぞ。

そして今、魔剣は口を滑らせてくれたな。

妖刀は『セイジ』って名前らしい。

よし。帰国したら身元を調べ上げて、成田で待ち伏せしてやる。そして難癖つけて逮捕して、あの便利そうな刀をもらってやるぜ。スクラマ・サクスの代打にな。

「『器』……できればもう二度と会いたくないのですが、別れの挨拶はこう言わなければなりません。――では、また」

再会の予感を残す、不思議な言い回しのセリフを残し――

アリスベルは俺に背を向けて、どこへともなく立ち去っていくのだった。

5弾　遠山キンジは2度死ぬ

俺とリサ、それと毛布を羽織ったメーヤとシスター兵たちを格納庫に詰めて……

銀灰色の硬式飛行船・グラーフ・ツェッペリンNT号が、オランダの曇り空を行く。

アリスベル以外の眷属は、みんなブータンジェからこの飛行船に乗り込んだ。

師団の俺たちをゴッソリ拉致して、ヤクザ用語でいうところの『事務所』にご案内して下さるんだろう。眷属の。

夕陽の向きから考えて、方角は西――大西洋側へ向かっているようだ。

ゴンドラのカツェは、大手柄を部下たちに褒めちぎられてすっかり上機嫌。

自分が俺とメーヤをやっつけたような顔をしてるが、お前、実際のところ何もしてねーだろ。

だがカツェはああ見えて人望だけはあるので、子分のナチ少女たちにやたら好かれてる。有能な魔女である事も否定はせんが、それ以外にも人を惹き付ける何かがあるんだろうな。あのイヴィリタ長官にも気に入られてたし。

すっかり油断しているっぽいカツェに、ヒステリアモードもすっかり切れた俺は、

「おいカツェ、この手錠はやっぱり痛い。他のに変えてくれよ」

また掛けられた鉤十字マークの手錠を上げて、隔壁ドアの窓から言ってみるが……

「痛さぐらいガマンしろって。日本男児だろ」

そこはさすがに見抜かれた。カラスのエドガーもアホーって鳴いたよ。腹立つな。

「……」

俺の隣で体育座りして、しょんぼりと目を伏せるリサは……

眷属に捕らえられてから、借りてきた猫みたいにおとなしくしている。

今までよっぽど、眷属では低い地位に置かれてたんだろう。

戦意喪失どころか、逃げる意志すら失ってるみたいだ。

「おーいリサ、そんな顔すんなよ。お前は眷属の大事な人材なんだ。帰隊させてもらえるから大丈夫だって」

ドアの窓から語りかけてきたカツェに、

「カ……カツェ様。ご主人様は……遠山様は、どうなるのでしょう？」

リサはビクビクしながら尋ねてる。

うん。そこは俺もちょっと聞いておきたいな。参考までに。

「そりゃもちろん死刑！」

……でしょうね。

「――って求刑になるんだけどな。遠山は絶対あたしの使い魔にするんだ。眷属裁判じゃ反対に投票してやるよ。あたしは今回、副判事で1票持ってるから」

カツェは真っ赤なリンゴを手に、そんな話をしてくる。

「……裁判があるのか。割と近代的だな、眷属も。その眷属裁判とやらの……副判事ってのは、どういう立場なんだ？」

俺がそこに食いつくと、

「判事には投票権と刑の執行権が、副判事は投票権だけがある。遠山の裁判はイヴィリタ長官ともう1人判事がいて、あたしとパトラが副判事だ。それで多数決する」

カツェが指を折々、そんな説明をしてくれる。

「4票で多数決か。2対2だったらどうなるんだ？」

「その場合は取り返しがつくように、『可逆優先』ってルールがある。要するに死刑とか、やっちまってから元に戻せない方は選ばないって事さ。つまり2票取れれば、遠山は死刑回避で――ゆくゆくは、あたしの使い魔。で、今、眷属裁判に向けてパトラへの根回しも済ませたところさ」

「抱き込めたのか、あのパトラを」

「お前の兄ちゃん、キンイチってんだろ？」

がりっ、とリンゴを丸かじりしながら、唐突にカツェが聞いてくる。

「あ、ああ」

「『アイツの兄貴に貸しを作るチャンスだぞ』って言ったら、イチコロだったぜ」

「……？」

「こないだパトラがパリのホテルでコソコソ何かやってっから、内偵したのさ。そしたら部屋に砂場を作って、砂に象形文字で『トオヤマキンイチ』って書いて、真っ赤になって恋占いやってやがった。ありゃマジだぜ」

パトラ……兄さんの事が好きなのか。カナモードを見た上でも。奇特な女だな。

だが俺の――銃殺か縛り首かは知らんが、死刑に反対してくれるってんなら有難い話だ。もしこの影響で将来、あの肌も露わなエジプト美人が義理の姉になっても……構わなくはないが、やむを得ん措置として受け入れる心の準備ぐらいはしておこう。

今回は無事着陸した、ツェッペリン号から――

ワルサーを何丁も突きつけられて、降ろされる。

そこは砂が足下を吹き流れる、寒い海辺だった。砂浜は高い岩場に囲まれていて、海へ流れ込む川もある。川のすぐ先の上流は滝になっていて、水のカーテンを作っていた。

夏はプライベート・ビーチとして使われていそうな、景勝地だが……

なんとなく全体的に、作り物感があるな。この川も、よく見ると人工的な運河らしい。

などと思ってたら、滝の奥側から……降り注ぐ落水を物ともせず、ゆっくりと……

黒い小型潜水艦が、川に出現した。

（……やっぱり持ってやがったか。魔女連隊（レギメント・ヘクセ）め）

あれは、ナチス・ドイツのUボート――

だが、イギリスの艦船を沈めまくったⅦ型みたいな航洋艦じゃない。ⅩⅩⅢ型の一種、沿岸用の小型艦だ。

その煙突みたいなセイルからは、セーラー服を着た魔女連隊の少女兵たちと、黒制服のイヴィリタ長官が現れた。そしてカツェを「勝利万歳（ジーク・ハイル）！」と例の挨拶で出迎え、俺たちをテキパキと潜水艦に詰め込んでいく。

赤い艦内灯の中、馬もいないのに乗馬ムチを持ったイヴィリタ長官が――

「――『竜の港』へようこそ、遠山氏。ここがあなたの終着港よ」

軍帽の鍔の下でサディスティックに目を細め、真っ赤な唇でニッコリ笑いかけてきた。

Uボートは一旦海に出てUターンし、川のように偽装された運河へ戻っていく。そして滝を潜り抜けると、すぐ停船した。

滝の内側の空間で、俺たちがUボートから上甲板に出されると――

「ひっ……」

周囲に見えた光景に、リサが小さく悲鳴を上げた。

『竜の港』は滝のカーテンに隠された洞窟を人工的に掘り広げた、隠れ港。呼び名の通り、奥の岩壁には肉食恐竜アロサウルスの巨大な化石が露出していた。おどろおどろしいな。

洞窟内には電力の供給があるらしく、岩壁には電球が不規則に並んでいる。それでライトアップされている、水面に停泊していた眷属の『事務所』は——

「……ナオ・デ・チーナ……」

大航海時代に外洋を航海していた、大型帆船だ。

かつて、武藤に教わった事がある。これはアカプルコ・ガレオンとも呼ばれる貿易船。幽霊船のような外装のボロさから見て、どうやら本物らしいが……今は改装され、電気も通っているらしく、窓は明るい。

ここに寄港するため一部が起倒式になっているマストの帆には『抵抗すれば皆殺し』を意味するジョリー・ロジャーが染め抜かれている。

それはリアルな人間の髑髏の下に2本の大腿骨をクロスさせて描いた、有名な紋章。

人類共通の敵、海賊の紋章だ。

この船は……おそらく中世に海賊が乗っ取った商船なのだろう。この港も元々、海賊の隠れ港だった。それを何かの御縁で、今は眷属がアジトの1つにしてるって事か。

Uボートから艀を渡って、エレベーターで上がった帆船の甲板は——火災防止のためか、タイル張りだった。この大型帆船はここに固定して、居住地にされているらしい。

船の中に入ると、そこは豪華に飾り立てられたホテルみたいな空間だった。だが、その内装はケバケバしくて悪趣味だ。ていうか、古い甲冑とか、ワイン倉とか、燭台風の電気スタンドとかは分かるけど、なんでイスに正装した大昔の骸骨を座らせて飾ってんだよ。リサが怯えきってるじゃねーか。それが海賊のVIPの納骨方法なのかもしれんけどさ。

廊下を連行されていく途中、

（おっ、日本刀だ……）

壁に飾られている螺鈿鞘の小刀を見つけた。

こんな西の果てで、日本刀にお目にかかれるとはな。手入れしてないから目

貫が錆びているが……添えられたプレートには『大正拾弐年賜玉藻御前』とか日本語で書いてあるぞ。

つまり、昔の玉藻が置いていった物か。これ。

そういえば宣戦会議の時、玉藻は前の戦役では眷属として戦ったと言っていた。

その頃からここは、眷属のアジトだったんだな。師団が押さえてると思ってたオランダにも、眷属はこんなにしっかりした拠点を持ってたってワケか。

上甲板から見ると地下2階のデッキには大食堂があり、うまそうなニオイが立ちこめていた。

様々な料理が大量に、そして乱雑に置かれた大テーブルの隅に……俺たち師団の捕虜も固まって座らされた。どうやら一応、メシを食わせてくれるらしい。

両手を飛行機のように広げてテーブルへダッシュしたカツェは、

「いやー腹減った！　ブータンジェ遠すぎ！」

いきなり魚のムニエルにフォークをぐっさり刺して、むしゃむしゃ食べ始める。

「こらカツェ。食事の前には手を拭きなさいな」

などと言うイヴィリタ長官も席につき、マッシュポテトを食べ始める。

「そうぢゃぞ。もう少し女らしくしないと男が寄りつかぬ。嫁の貰い手も無かろうぞ」

パトラも、山盛りに積まれた空豆のコロッケをモリモリ食べる。

「……男なんて、バカバカしい」

羽根付き帽子を被ったままのセーラは、茹でたブロッコリーばかり大量に食べている。

そしてもう1人、ここで守備役をやっていたらしい大女が……オニギリの山の向こうでよく見えないが、そのオニギリを次々に手づかみで食ってるな。鬼みたいなツメの生えたデカい手だけが時々見える。

ていうか……コイツら眷属は、みんな自分たちの好きなものしか食べないみたいだな。偏食家の集まりだ。食育がなってない。

あと、テーブルの上でプレッツェルをつつくカラスのエドガーと、イヴィリタの足下でラムチョップを噛る黒豹。俺、気になります。食堂に鳥獣は衛生的にいかがなものかと。

（しかし……この、光景……）

ナチ少女たちが厨房でじゃんじゃん料理を作り、ウェイター代わりのアヌビス兵が皿を持って食堂を行き来する。それをワンピースの宴会シーンみたいな勢いでガツガツと食いまくるカツェ、イヴィリタ、パトラ、セーラ、あともう1人のでかい女。

これに昔は、ヒルダやココもいたんだろ？　眷属。

俺は脳内で――タワー状に重ねたレアステーキを赤ワインでモリモリ食べるヒルダと、金糸全蛋麺をわんこそば状態で食べるココを思い浮かべて、テーブルに加えてみる。

うーん……タチの悪い女子校みたいだ。

たまたま今、眷属は女しかいないしな。

それで思い出したが、男の妖刀――それと、これも女だが魔剣の姿も無いな。

だが無くて結構。これ以上Z戦士に囲まれてたまるかっちゅーの。

と……

味はともかく量は十分もらえた余り物を俺たちが食っていると、

「――リサ、こっちに来いよ。お前の好きなオリボーレンもいっぱい揚げてあるぞ」

カツェがリサの肩を抱き、テーブルの方へ連れていく。

「そうよリサ。あなたは眷属でも最強の女の1人。隅っこは似合わないわ」

イヴィリタ長官もそんな事を言って、リサを迎えるポーズだ。

リサは俺の方をチラチラ振り返りながらも、ビクビクと眷属のメンツに従わされている。

「お前はイ・ウーでも、シャーロックの後任として――退学前の妾、ライバルのブラド、そしてアリアと共に名が挙がっていたのぢゃろ。その女傑が、あんな田舎で朽ち果ててはならぬ」

パトラとセーラもリサに食べ物を勧めて、眷属への帰隊を無理強いしてるカンジだ。

みんな表面的には優しいが、あれは日本でも居酒屋なんかでよく見られる光景。

気の弱いヤツを自分たちのグループにムリヤリ入れる、偽りの宴席だ。断ったら制裁が待ってる。それが分かっているらしく、半ベソのリサも輪に加わらざるを得ずにいる。

きっと眷属のヤツらは、家事や会計の得意なリサをまたコキ使いたいんだろう。

しかし、今さっきのイヴィリタやパトラの発言――

（あのリサが……眷属最強で、イ・ウーでもブラドのライバルだった……？）

それは無いだろう。持ち上げ、お世辞ってヤツだ。

現に、リサは……眷属に囲まれては逆らえないらしく、穴無しドーナッツを……ひっく、ひっく、と泣きながらもしゃもしゃ食べている。泣き虫で臆病者の、いつものリサだ。

その時、

「……これ、ブロッケン。みんな友人なのだから、落ち着きなさいな」

マッシュポテトを食べていたイヴィリタが、使い魔の黒豹を見下ろした。

ブロッケンという名前らしい黒豹はテーブルの下に隠れ、誰かにひれ伏すような仕草をしている。

さっきまで文字通り羽を伸ばしていたエドガーも、カツェの肩で縮こまってる。

どっちも……この場の誰かに、ビビってる感じだな。

まるでここに百獣の王でもいるかのようなビビリっぷりだ。

気持ちは分からんでもない。俺も全員怖いし。戦力的な意味でも、ヒス的な意味でも。

――そこに。

「ほう。汝が当世の遠山侍か」

古めかしい日本語の――

よく通るハスキーな声が、聞こえてきた。

振り向くと、声の主は……さっきオニギリの山で見えていなかった大女だ。

その女が山を食べ崩し、見えるようになっている。

女は赤・黄・緑で彩られたアフリカ風の生地に……梵字と、織田木瓜のような……？　すり切れてよく分からないが、家紋のような柄を刺繍した和服を着ている。背後の壁にはこれもアフリカン＋和風なデザインの、巨大な金棒が立てかけられており……

イスの上にあぐらをかいた彼女の金色の目と、俺の目が合う。

「――ッ……！」

その瞬間、俺は全身を縛り上げられたかのように固まってしまった。

それは昔ブラドやヒルダに感じた感覚にも似ているが、それより遙かに猛烈なもの。

（……な、なんだ、アイツは……ッ!?）

――強い。

ここにいる誰よりも。もちろん俺よりも。ケタ外れに……！

戦艦一隻分ぐらいの戦闘力が、あの女の体にギュッと詰め込まれている。そんな印象がある。

「――我は、閻。第六天魔王・覇美様の遣いぞ。遠山。汝は日本から参ったのだろう」

危険だ。危険だ。それだけが直感で分かる。この、ヒステリアモードではない俺にも。

あの女は、人間じゃない。それも分かる。赤銅色の髪の頭にツノが生えてるしな。

閻と名乗ったこれが『何』なのかも……その見た目から、分かる。

あれは人間の天敵。

――『鬼』、だッ……！

「今日の日本は如何様な国ぞ。苦しゅうない。答えい」

朱塗りの平たい杯に洋酒をドボドボ酌みつつ、閻と名乗った大女がハスキーボイスで尋ねてくる。

だが俺は閻の持つ圧力に気圧されて、言葉がノドから出てこない。呼吸にすら詰まってしまいそうだ。

良い銃や刀と同様、強いものは、独特の美しさを持つ。

その例に漏れず、この女は――美しかった。

大柄で筋骨隆々とした、そして傷だらけの肉体を持ちながらも、周囲にいる眷属の美女たちとは異なる美しさを持っている。どこか、神々しいまでの。

そう、コイツは、人間よりも――それそのものではないにせよ、神に近い存在。

少なくとも、神と人の中間に位置する存在だ。

（こんな戦力を……隠し持っていたのかッ。眷属は……！）

ダメだ。

どうしようもない。

ヨーロッパでは、眷属には勝てない。コイツがいる限り。勝てっこない。

「ダメよ閻。遠山氏が怖がってるじゃない。もう戦役も終わるのだから、いき
り立つ事はないのよ」
イヴィリタに言われた閻は、不満そうに――
「まだ始まっておらぬものを、終わらすつもりはない」
――ゾリッ。
ナイフ――アフリカ風の装飾がされているが、形状は日本の匕首だ――で、
テーブルに置かれてあったシカの足から肉を削いだ。そしてそれをそのまま、
口に運ぶ。開いた口の犬歯は……犬歯じゃない。ヒルダのそれよりもハッキリ
とした、牙だ。
眷属の中でも浮き気味なのか、閻は周囲を一瞥し……どうやら自分でそのオ
ン・オフと指向性をコントロールできるらしい、威圧的な気配を収めた。
そして立ち上がると、のしのしと部屋を出ていく。
その身長は、ツノを入れれば190cm弱。俺よりずっと大きい。
額の汗を拭い、俺は……絶望的な気分で、食事を……いや、もうできないな。
鬼。の、たぶん実物。
マジでヤバいモノを見ちまって、すっかり食欲が無くなっちまったよ。

なのでその後、テーブルでイヴィリタやパトラの会話を聞いていると……
眷属はもう、『極東戦役後（ポストFEW）』について語り合っているようだった。
ヨーロッパでは師団（ディーン）を圧倒した眷属は、その勢力圏（ナワバリ）を過去最大に広げて――
バチカンやリバティー・メイソンから、財宝や情報、人材も数多く奪った。
だから後は、これからの裏社会で自分たちが動きやすくなるためにジャマ者
を消しさえすれば……もう極東戦役（FEW）を閉じても良い、と考えているのだ。
ヒルダや藍幇（ランパン）に任せていたアジア戦線で負けたのは想定外だったらしいが、
休戦条約の締結（ていけつ）に向けて――もう、動いているような口ぶりだ。
（そして、こういう時は……）
――大抵（たいてい）、勝ち組はダメ押しの決定打、トドメを用意してるものだ。
「アムステルダムは曇り。でも、明日は晴れる」
「カイザーとワトソンはアムステルダムにおる。リバティー・メイソンはいつ
も1手……いや、2手は遅いのう。ほほほっ」
「じゃ、V-2改は明日ね。楽しみだわ」
それについてのセーラ、パトラ、イヴィリタの英語での会話に……
（V-2……!?）

俺の額に、また汗が滲む。

V・2とは、ナチス・ドイツが開発した、70年以上も前に設計されたとは思えない程に先進的なロケット兵器。

最高時速は5760km、射程距離3300km、弾頭に1tもの爆薬を積み……大戦中には3千発以上が発射され、ロンドンをズタボロにした。要するに、弾道ミサイルのハシリだ。

妖刀・魔剣、さっきの閻に加えて、そんなモノまで保有してるのか。眷属は。

そしてどうやら、眷属はそのV・2でリバティー・メイソンを倒す計画らしい。

V・2による爆撃は『ロンドンまで退いても、ムダだぞ』という明確なメッセージにもなる。その威嚇が背景にあれば、より一層、休戦条約を有利な形で締結できるのだろう。

そうなれば今後、ヨーロッパにはイ・ウー主戦派、魔女連隊、更にあの得体の知れない閻たちがはびこる事になるのだ。

（はびこるのがバチカンやリバティー・メイソンなら構わない、とは言わないが……）

これは、止めなきゃいけないだろう。

師団の一員としてだけじゃなく、武偵として。

ヨーロッパの師団・眷属らは元通り、相互に暴走しないよう牽制し合うぐらいのパワーバランスでちょうどいいんだ。きっと。

そう考える俺の前に……

とこ、とこ。

孔雀の羽根付き帽子の――

ブータンジェで俺を射った、『颱風のセーラ』が歩み寄ってきた。

そして、ジー……っと、俺の顔を見てる。

「何だよ」

「……」

ジー……

なんだよホントに。人の顔をジロジロ見やがって。失礼なガキだな。

俺は美少女のお前みたいな、鑑賞に堪える顔をしちゃいねーんだよ。

「……まさか『私に従うなら世界の半分をやろう』とか言うんじゃねーだろうな」

「違う。バカバカしい。死者は世界を統べられない」
「？」
「今お前の『顔相』を見てた。手相みたいなもの。バカバカしいぐらいハッキリ出てる」
「何の相がハッキリ出てたんだ」
「死相」
……死相……だと？
「私は7日以内に死ぬ人間は100%分かる。お前は明日、死ぬ。これは絶対」
レキっぽい抑揚の無い声で告げてくるセーラを――
「それはもう妖刀にも宣告され済みだ。お前らは安い出まかせの脅しが好きなんだな」
俺は、フン、と鼻を鳴らして睨みつけるのだった。

食後、リサは眷属側に残され……
メーヤたちとも引き離された俺は一に海賊船の下部デッキへと連行された。
「いいやつに会わせてやる」と言うカツェ

そして、ヒエログリフ柄の絨毯で飾られたパトラの部屋らしき一室に――
「……！」
あの銀色の略鎧を着装した、ジ・ジャンヌ……！
不敵な笑みを浮かべてこっちを見る、ジャンヌが立っていたのだ。
「『遠山、済まない』……ははっ、お前、今いい顔をしているぞ。ははっ、ほほほッ」
ジャンヌは途中から堪えきれず、くびれた腹を抱えて笑い出す……
いや、違う。笑い方や表情が。
これはニセモノだ。ソックリだが、違う……！
「パトラか……ッ！」
「ご名答ぢゃ」
声も戻してパトラ喋りをした、偽ジャンヌは――
その顔や肌から、粉のように細かい粒子の砂と、ごく僅かな水蒸気を落とした。
「これはあたしがパトラと2人で開発した、厄水砂化粧だ。理子の特殊メイクみたいに、ただ顔面に貼り付けるだけじゃないぞ。全身に塗布できるから肌の

色だって変えられるし、皮膚を引き締めて顔形まで自由自在に変えられる。整形要らずの、夢のメーキャップさ。さすがに身長は変えられないけど、パトラが背え高くてよかったぜ」

カツェがそんな種明かしをし、ジャンヌの鎧を着たままのパトラとハイタッチする。

ブリュッセルの夜、あの街角で俺を妖刀の所に連れ出したのは……

――パトラだったんだ。

今にして思えば、『l'Opéra』――『オペラ座』という言葉が、パリのガルニエ宮だけを指す言葉ではない事を――ジャンヌは2度、俺に説明している。

妖刀の手前で説明した、その2度目は……まるで、パリで俺に説明した事を覚えてないような口ぶりだった。『どこまでも賢いお嬢さんだ』とヒステリアモードの俺に言わせるほど、記憶力が自慢のジャンヌが。

（……因果応報だな、これも）

かつてジャンヌは理子に特殊メイクを施され、変声術を操り……白雪に化けて武偵高に入り込んでいた。自分がやった事を、今度はパトラたちにやられたんだ。

そして、ジャンヌの鎧をパトラが着ているという事は――

「……本物のジャンヌに会わせろ」

怒りに震える声で、俺は2人を睨みつける。

「言われなくたって会わせてやるよ。この船はボロくてな、座敷牢にできる頑丈な船室が少ないんだ。お前とジャンヌは相部屋だぞ。といっても2人でヘンな事すんなよ？」

カツェが余計な注意を付け足しつつ、改めて俺に金ピカのルガーを2丁向け直してくる。

やっぱり――捕らえられていたのか。ジャンヌは。

「いいか？　ときどき監視に来るからなっ」

鉄格子の小窓がついたドアを開き、カツェが俺のケツを蹴り……

俺はこの三層艦の下部砲列甲板を仕切った、砲座の一部だったらしい部屋に入れられた。

木の床板が剝き出しの、思ったより広い部屋では――

「遠山っ……！」

ジャンヌ……！

……

……ってお前っ、なっ、なんでそんな、スケスケのウェディングドレスみたいな服を着てんだよっ。

あっ、あっ、あれこれ見えてるぞッ。ドレスの中が。下着っ……は、さすがに白い水着みたいな見せ下着になってるけど。

「だ、大丈夫だったかジャンヌ」

とはいえ人として、なんとか第一声は真顔で言えた俺だが……たったった、と駆け寄るジャンヌの胸が理子（りこ）的ゲームのキャラみたいに上下に躍動するもんだから、改めて慌ててしまう。

見れば腕を後ろに回して縛られたジャンヌは、茨（いばら）を模したロープで胸の上下もグルリと縛られていた。そのせいでドレスの薄布が絞られて、胸の輪郭をハッキリ強調するような状態になってしまっている。なんで眷属（グレナダ）も縛るに事欠いてそんな縛り方したんだよ。

「……私が捕らえられたのは私のミスだ、遠山。ブリュッセルで洗濯代を節約しようと、夜にコインランドリーへ行ったところで――魔女連隊に不覚を取った。ランドリー1台につき1人、中に魔女が隠れていたのだ。6台で計6人だ」

俺が妖刀にガチで殺害されかけてた、それと同じ頃……

「右のランドリーを閉じたら左から、上を閉じたら下から魔女が出てくる始末で、私にはどうしようもなかった。洗濯物を頭に載せ、両手、さらには足でもランドリーを閉じたのだが、それでも6つ同時に閉じることは出来なかった……！」

ジャンヌはパンツやシャツを頭に乗っけて、カツェたちとそんなコントみたいな戦いを繰り広げていたのか……

しかしまあ、これは今度こそ本物のジャンヌだな。

この天然っぷり、偽物には出せまい。聞いてるだけで安心するよ、ある意味。

「6対1とはいえ、敗北したのは私のミスだ。罰を与えてくれ、遠山。ムチで叩け」

ジャンヌは目に涙をため、スケスケのセクシードレスで詰め寄ってくるので

「そんなモノは持ってないし、持ってもこの手じゃ叩けねーよ」

逆卍マークの手錠を見せつつ、押し返す。

「それに叩くつもりもない。誰かがミスしたからって仲間割れするチームは、下の下だ。しないよう心がけるべきだが、人間誰だってミスはする。重要なのは、ミスが判明した時すぐリカバーする事だろ」

俺が蘭豹の受け売りを語ると、ジャンヌはジーンと感じ入ったような顔で見上げてくるが……俺も牢屋に入れられてる状態じゃ、キマらないな。

それから俺は壁際にジャンヌと並んで座り、今までの出来事を話す。

裏切り者の容疑を掛けられて、リサってのとオランダの片田舎に隠れ住んでた――と、話すと……

「リサか。リサと、どんな暮らしをしていたのだ。どんな料理を作ってもらってた。寝室は分けていただろうな」

感動の再会ムードもどこへやら、元イ・ウー構成員のジャンヌは、ムスッ。

なんか不機嫌になって、リサとの生活について根掘り葉掘り聞いてきた。

「べっ別に、ただコソコソ隠遁生活してただけだ」

ハダカで熱を冷ましてもらった件など、口を滑らすとマズそうな事案もあっ

たので――

「……それはそうと、お前は何でそんなカッコしてんだ」

ここで俺は俺奥義、話題逸らし。

アリアは最近これを見抜いて『あからさまに話のテーマを逸らすんじゃないわよ！』とガバハン（ガバメント・ハンマーの略。スライド握ってグリップで殴ってくる）で眉間を叩いてくるんだが――そこは純朴なジャンヌさん。しっかり奥義にかかってくれて……

「これは、生け贄のコスチュームらしい」

「イケニエ？」

「『颱風のセーラ』には会ったか。彼女も魔剣見たさに出撃していたようだが」

「ああ。してやられて、ご覧の有様だよ」

「セーラは元イ・ウーの予報上。『巨視報』という能力を持っていて、自然物の大局的な動向を予報できる。死期の近い動物や人間を見抜く力もあって……」

そう言われて、俺はさっきセーラに言われた『死相』の話を思い出す。

「――的中率は、どんなものなんだ？　パトラの占いみたいに眉唾モノなんだろ？」

「いや、絶対に当たる。私も外れたのは見た事がない」

……そうですかい。

「そのセーラが、予報したのだ。間もなくこの地に『ジェヴォーダンの獣』が現れると」

「ジェヴォーダンの獣……」

「知っているのか？」

ブータンジェの祭でリサに聞いた事はあったが、そう言うとジャンヌが拗ねそうだったので、

「伝承を聞いた事がある程度だ。詳しくは知らん。実際は何なんだ、それ」

と、改めて詳細を尋ねると――

「怪獣だ」

か、怪獣……その単語で一瞬イヤな予感が頭をよぎったが、俺は戦らんぞ。

絶対だぞ。絶対だからな！

「どんな……怪獣なんだ。ゴジラとかキングコングみたいなヤツか」

まさかと思いつつも、当てずっぽうを言うと――

「後者に近い」

――近いのかよ！　キングコングに！

「形状はあのような猿型ではなく、狼型だがな。18世紀に西ヨーロッパを荒らして回った『百獣の王』で、伝承によればフランスの乙女を生け贄にすれば鎮められ――あわよくば使役できるとされている。それで、私がその生け贄にされる予定なのだ。だが安心しろ。その伝承は不完全なものでな。私は祖母から聞いて知っているが、実際には獣がオスなら捧げ物は女で良いが、メスなら男を捧げるべきなのだ。つまり、私が獣に取って食われる可能性は50％だ」

ふふん、とドヤ顔をするジャンヌだが……

50％は、ジャンヌも詰んでるってワケか。

ていうか、もしメスだったら俺がエサ皿に載せられるんじゃねえの？　それ。

「じゃああとは、運次第だな……だが、幸運のお守り人間だったメーヤは魔剣にやられて御利益が吹っ飛んじまったみたいだぞ。俺たちは裏切り者の汚名を着せられたまま怪獣のエサにされるか、飼い殺しにされるか、手っ取り早く処刑されるかだ」

「その裏切り者の話……私も、潜んでいるとは思っていたのだがな」

俺が振る話には必ず乗ってくれるジャンヌが――そこに、言いたい事がある

ようだ。

「する事も無かったので、ここでスパイの正体を考えたのだ。そして目星が付いた」

「……実は、俺もだ。ブータンジェで、やることが無かったからな」

「あっただろう。リサがいたのだから」

「何が言いたいんだよ。それは脇に置いといてだなッ……」

俺が手錠をされたまま『置いといて』の仕草をしてるのに、

「腋……？　なぜここで腋の話をするのだ。お前は私の腋に興味があるのか？　なぜだ」

と、ジャンヌはドレスがノースリーブなので露出している自分の腕の付け根を見回す。

「なぜだは俺のセリフだッ、俺もそこまで上級者じゃねえよ！　じゃあ言い方を変える、リサの話と、お前の腋の話は、横に、置いといてだなッ」

「初めからそう言え。お前は頭が悪いな」

「ぐっ……この……お、置いといてだな、裏切り者の正体についてだ。２人で意見が食い違うとムダに疑われたヤツに悪いから、『いっせーの』で、主犯格

の名前を言おう。俺が違う名前を言おうとしてると思ったら、口を閉じろ。俺もそうするから」

「うむ。分かった」

と、ここは一発で理解してくれたジャンヌは――

俺の口をよく見るつもりか、ぐい。顔を近づけてくる。

近い、近いって。アリアもそうなんだが、なんで欧米人はこう距離感に鈍感なんだ。

「いっせーの……」

バラ色の唇で、ジャンヌがそう言って……

「「バチカンだ」」

俺とジャンヌが、無事にハモる。

人名で言わなかった所を見るに、ジャンヌもそのカラクリが分かってたみたいだな。

「バチカンは組織的に、眷属に師団の情報を流していた。その理由が明確じゃないから、完全な裏切り者とは言いがたいが――80％は、裏切ってると言っていいだろう」

という俺の話に、

「メーヤは知らされてはいなかったが、そのバチカンの動きに気付いてはいた。気付いていながらも、自分に下された『眷属と戦え』という命令は忠実に遂行し続けた。彼女は、決して人を疑わないからな」

ジャンヌがそう続ける。

「そして――メーヤはヨーロッパ戦線の情報はもちろん、玉藻から共有されたアジア側の情報も求められるまま上に流し続けた。これが20％の裏切りだ」

「足して、スパイ1人分の機能を果たしていた。前線の私たちには発覚しにくい形でな」

ジャンヌも、ヒステリアモード時の俺と全く同説のようだ。

少し見直したぞ。『自称策士』から『自称』を取ってやろうかな。そろそろ。

「――少し補足しましょう」

俺たちの会話に――

いきなり、扉の外から声が割り込んできた。

鉄格子の窓にジャンヌと2人で振り向くと、その人物の顔にジャンヌは面識が無いようだったが……俺は、あるぞ。

ブリュッセルで――リバティー・メイソンの隠しロッジで、会った。
美しいブロンドのロングヘアーに、金糸の刺繍を入れた白いレースのヴェールをかけたバチカンのシスター。その見えない目をこっちに向けてくる――
「ローレッタさん。あんただったか」
俺に言われたローレッタは、
「宣戦会議の時も、その言づてをメーヤに託しましたが……バチカンは戦乱を望みません。師団、眷属、どちらが勝者になろうと、自らが完全な敗者にならないようにと――保険をかける必要があったのです」
つまり、『どっちつかず』だったって事か。最初から。
お前たちは……戦前から、戦後を見据えていた。
どっちにもいい顔をしといて、戦後をやりやすくしとこうって腹だったんだな。さすが二次大戦でも同盟を裏切った挙げ句に戦勝国を名乗ってるイタリア人だよ。
そしてそれを上手く隠せるように、狂信的な――狂信的にならざるを得ない幸運強化をその身に受けたメーヤを前線に立たせてもいた。
いやー、よく出来てたぜ。そのカラクリ。

「ブリュッセルでカイザーに殺されかけた時は、俺を守ってくれてありがとうな」
皮肉交じりに、そう俺が言うと――
「私たちは、1人でも傷つく者が減る事を願います。師団も眷属も、隔てはありません」
「おためごかしを言うな」
「それも理解しています。ですから……私の1票は、遠山キンジ。あなたの極刑に投じましょう」
「……何？」
「眷属裁判は4票ではありません。先刻ここに着いた私にも投票権があるので、5票なのです。イヴィリタ、閻、私――この3票で過半数となり、あなたの死刑は議決されます」
そう来たか。
「あなたは、知りすぎた」
そう言い残し、ローレッタは……白杖で木の床を擦りながら去っていく。
腹は立つ。腹は、立つが……陥れられたのが『ローレッタやメーヤのせい』

かどうかは、遠山裁判所的には微妙なところだ。
信心深い人間は、そうでない人間とは違う原理で動くところがある。それは、この世の常識だ。宗教関係者と組んだ時点で、武偵ならそこも考慮に入れて動くべきだった。
なのに俺は、そこを気に掛けず活動していた。
シスターは聖職者だからって、無条件に信用しきっていた。そこは――
俺のミスでもあった、ってワケだ。

その晩に行われた眷属裁判で俺の死刑は見事確定し、翌朝執行という事になったそうだ。
弁護士どころか被告人こと俺も呼ばれてねーのに。なんちゅうインスタント裁判だよ。
開票結果は、3対2。カツェとパトラは反対してくれたんだな。そこは礼を言いたい。
ついでにジャンヌとリサの判決も下り、それぞれ『ジェヴォーダンの獣のエサ＝死刑』、『無罪・再教育』となったとか。適当だなぁ。死刑か無罪しかねーじゃんか。

ジャンヌは別室で生け贄用の化粧があるとかで牢から出され、その後……俺は隙あらば逃げてやろうと思っていたが、量刑を言い渡しに来たのはあの閻。
鬼の、大女だった。
「遠山キンジ。武人なら潔くされよ。腹を召すなら、小刀を貸そうぞ」
入口を潜って入ってきた閻は、そんな事を言ってナイフを貸そうとしてくるが……
「武人じゃねえよ、武偵だ。それにお前その小刀、さっきシカの足食うのに使ってたろ。そんなモンで腹切ったらバイキンが入る」
そんなチンケな刃物を借りたところで、金棒を背負ったリアル鬼とは戦えない。ので、断った。
「死を前にして、金瘡瘤風を厭うか。まるで石田三成殿のようだ。ワハハッ」
男みたいに笑った、閻は――ヒョイッ。
うわ。
俺を軽々と持ち上げ、抱っこしてしまった。いわゆる、お姫様抱っこスタイルで。

やった事は何度かあったが、やられたのは初めてだよこれ。
なんという被支配感。こりゃ惚れるね。間近に見上げると、闇、すげえイケメン顔だし。女だけど。
そしてそのまま、俺は廊下から甲板へ、甲板からイヴィリタ長官の待っていたXXⅢ型潜水艦へと連行されていく。
艦内でようやく、降ろされたが……味方になってくれそうなカツェの姿は、無いな。
「――カツェなら来ないわよ。副判事のあの子にできるのは投票まで。結果を知る権利は無いから、貴男に貸しが出来たと思って喜んでるでしょうね」
嗜虐的な笑みを浮かべた、イヴィリタは――何か、良からぬ事を企んでいるようだ。
「さて遠山氏。あなたの処刑法は、とーってもコワイ方法にさせてもらったの。目隠しは使う？」
「要らねーよ」
「そう言ってくれると思ったわ。よかった」
「……銃殺か？」

「違うわよ。あなた撃っても死なないんでしょ」
潜水艦は滝をくぐり、すぐ浮上し……
「何か遺言があったら、私に託してもよろしくてよ」
と言うイヴィリタが、左腰にジャンヌから鹵獲したデュランダルと――俺のベレッタを挿しているのに気付いたので、
「遺言、ってほどの話じゃないんだが……お前ら、俺からナイフとデザート・イーグルも取ったろ。あれは兄さんからの貰い物と、父さんの形見なんだ。もしお前がどこかで――カナに会う事があったら、渡してくれないか。知ってると思うが、カナは俺のきょうだいなんだ」
と言うと、イヴィリタは『父の形見』の辺りでジーンと来たような顔をする。
そして、
「分かったわ遠山氏。カナ女史の写真は見た事があるし、カツェも宣戦会議で面識がある。逆卍徽章に誓って、必ずやそうしましょう」
イヤなモノに誓われたなぁ。
そんな会話をしながらハッチから出された先、航行要員のナチ少女たちが艀を用意した向こう、波打ち際にリング状の鉄骨で組まれた発射台の上には――

「V・2……」

ナチス・ドイツ自慢の弾道ロケットが、雲越しにボンヤリ光る月灯りで不気味に照らし出されていた。

「正確にはV・2改。命中率の低さを補うために有人化した必殺兵器よ。どう？戦いの連続だった貴男の人生を締めくくるのにふさわしい墓標でしょう？」

黒制服姿のイヴィリタが、黒革の手袋をした手でV・2を示す。

「貴男は殺そうとした者に手痛い報復を返す『呪いの男』。だから私は自ら手を下さずに殺す事にしたの。あの発射台の下に檻が見えるでしょう。まずは、あの中で満ち潮と共に水死してもらうわ」

「『まずは』……？」

「遠山キンジは2度死ぬ。最初は水で。念には念を入れ、満潮刑で1回殺して、V・2刑でもう1回殺す事にしたの。あの檻の中で水死した後、V・2の下でケロシン・液体酸素・固体燃料が織り成す3千度の噴射炎によって――海水ごと蒸発してもらうわ」

ぴし、とジャンヌから奪ったらしい乗馬ムチで俺の胸をつついたイヴィリタは……

俺が1度殺したぐらいじゃ死なないと、本気で思ってるみたいだな。

まあ、そう思われても仕方ないか。これもある種の自業自得だ。

ため息をつく俺の隣で、イヴィリタは胸ポケットからシガレット・ケースを出す。

そして、

「末期の一服よ。日本のじゃなくてごめんなさいね」

ソブラニ・ブラック――フィルターに金環が描かれた、黒い紙巻き煙草を1本くれた。

（……そろそろ、本気でヤバそうだな）

俺は煙草なんか吸わないが、喫煙者のフリでそれを受け取る。

ここはこれで、1分でも2分でも時間を稼ごう。オランダじゃ16歳から喫煙が合法だし、すぐあの檻に入れられたんじゃ手も足も出なくなっちまうしな。

「優しいんだな、意外と」

手錠をされた手で、それを俺が咥えると……

「しきたりよ。大戦中からのね」

イヴィリタが流麗な手つきでマッチを擦り、友達にするように火をくれた。

俺はフカシで、ゆっくりと紫煙を吐きながら――海に浮かぶような、V・2を眺める。

全長14m、翼幅3・56m……だったか。確かに、そのぐらいに見えるな。

ボディーがチェス盤みたいなチェック柄に塗装されているのは、発射前の機体の傾きや飛行中の軸回転を目視で確認しやすくするため。

椎の実形のレトロなロケットだが、機能的なデザインで、ある種の美意識も感じられる。

「有人って言ってたな。誰が乗るんだ。お前か？」

「まさか。カツェよ」

イヴィリタは自分もソブラニを1本取りながら、小さく笑う。

「あの子はあなたに対する異性恋愛罪の疑いが掛けられてる。だからここで魔女連隊流のケジメを付けさせてあげるの。本人には、エコール戦車戦での失点を取り返すチャンスと言ってあるけどね」

俺への感情が疑われているカツェに、そうとは知らせず、俺を殺させるってイベントか。

さすが、残酷さじゃ他に類を見ないナチスの末裔だな。

「カツェは……どうなるんだ。こんな危険なモノに乗せられて」

「特攻兵器じゃないから安心なさいな。弾道飛行の頂点辺りまで有人飛行で精密に運んで、自由落下に入る前に搭乗員は排出する方式よ」

「どこに落とすんだ。あのサイズのロケットに人を搭乗させるとなると、積める燃焼材が少なくなって――短距離弾道弾にしかならないハズだ。どうせステルス性を持たせてるんだろうが、長距離飛ばしてたら軍に撃墜される可能性もあるぞ」

「ご明察。目標はオランダ国内。リバティー・メイソンの、アムステルダム・ロッジよ。明日の朝、カイザーとワトソンがいるわ」

その情報をもたらしたのであろうバチカンが、眷属と通じている中……

ヨーロッパの師団、その最後の砦となっているリバティー・メイソンを、このV・2で壊滅させるつもりか。

それと、有人化で縮むのは燃料だけじゃない。もう1つ。そこも確かめておかないとな。

「――弾頭は何なんだ」

「さあ何かしらね」

イヴィリタが、その切れ長のツリ目を細める。
小さくて威力のある、必殺の弾頭……
そんなものは、限られてる。
そしてコイツらが、パリで買い集めていたという材料から推察されるのは――

「化学弾頭だな」

「あら、よく分かったわね。シアン化ケントロシン――空気中の水分にも結合して無害になってしまうし、軽くて拡散しやすいから、この質量だと効果は1ブロック内に限られる弾頭よ。そのかわり、半数致死量は0・4mg／kg――着弾点から半径50m以内の致死率は100%なの。検死しても一酸化炭素中毒と見分けが付きにくい、使い勝手のいい兵器よ。元々は米軍の発明品だけど、ネット上に製法が漏洩してたからパクらせてもらったわ」

「……ッ……」

死神の鎌が首に掛かっているのは俺とジャンヌだけじゃない。ワトソンたちもだ。
だが俺には、打つ手が無い。

今なお、鬼女の閻は俺のすぐ後ろで腕組みして……満月に照らされた海の沖合を泳ぐ、クジラの群らしき影を悠々と眺めているのだ。
それでも――
（武偵憲章10条。諦めるな。武偵は決して、諦めるな）
――俺が、その腹だけを括った時。
ソブラニの灰、その最後の一欠片が、オランダの砂浜に落ちていった。

海に浸された鋼鉄の檻の中、一晩かけて、腰、腹、胸へと――
次第に満ちてくる厳冬の海水が、俺の体を冷やし続けた。
もう水は檻の上の方まで迫ってきている。水深は俺の身長より深くなった。
俺は檻に懸垂するような形で掴まり、呼吸を継がないといけない状態だ。
そして小雨の中、一睡もできなかった夜が明けつつある頃――
砂浜には閻、セーラ、魔女連隊、イヴィリタに連れられたリサ……それと、
バチカンのローレッタが現れた。
皆、ここを遠巻きにしている。V・2の発射・兼・俺の処刑を見に来たんだな。

押しても引いてもビクともしない檻の上辺に頭をつけ、首の辺りまできた冷たい海水に耐えていると……

波打ち際にケッテンクラートがやってきて、停車するのが見えた。

その後部座席から降りたのは、やたらカッコイイ黒ずくめの与圧服を着たカツェだ。

発射台へ向かう仮設の足場を渡るカツェは、まさかV・2の直下に俺がいるとは思っていないらしい。

「粋なもんだろ。大戦時の軍服と同じで、シャネルにデザインさせたんだぞ」

カツェは眼帯のない方の目をニコニコさせて、部下に紋章入りの与圧服の背を見せたりしてる。

市松模様だったV・2の表面には、今や白く薄氷が張っている。これは燃料——戦時中はエタノール水だったが、今はケロシンと液体酸素らしい——の注入が完了したからだ。

「ちょっと雨が降ってきたな。この化学弾頭は水に弱いんだろ。大丈夫か？」

「ご心配なく。セーラ様の予報によれば、アムステルダム上空は晴れだそうですので」

黒雲に覆われた空を見上げるカツェと、部下の少女がドイツ語で語る中……

『発射前にカツェとコンタクトを取ったらジャンヌを殺す』とイヴィリタに脅されていた俺は、黙ってそれを聞いているしかない。

雨脚が次第に強まる中、カツェはV・2上部のハッチを自ら開けて搭乗していく。

その間にも潮は満ち、俺はもう上を向いていないと息ができなくなってしまう。

波が寄せるたび、顔が水に沈む。もう、自分の意思だけでは呼吸ができない。

海水も少しずつ飲んでしまっている。苦しい。

——チクショウ。どうしようもないぞ。このままじゃ——

イヴィリタの計画通り、溺死しちまう。挙げ句、V・2に焼かれて死体も残らないぞ。

トランジスタ・メガホンを持ったイヴィリタが、

「——観測結果を伝えるわ。機体の傾斜、許容範囲内。天候不順なれど、発射に支障無し。現在、打ち上げまで7分。以降、発射のキャンセルは不可能よ——勝利万歳！」

全員に……そして誰よりも俺に聞かせるために、日本語で宣言している。

「――6分50秒前！」

10秒刻みらしいカウントダウンが始まった中、V・2は白煙をその噴射口から吐き出し始めている。

だがその黒々とした噴射口からの炎より前に、イヴィリタの狙い通り――

俺が、溺れていく。呼吸しようとして飲んでしまう海水の量が、増えていく。

「6分40秒……6分30秒……！」

チクショウ……もう……もたない……！

と、苦痛で体から力が抜けかかった――

その時。

「……あっ、こらッ！　リサ、おやめ！　何をするのッ！」

カウントダウンを続けていたイヴィリタの声が、乱れた。

顔を横にして、何とか浜の向こうを見ると――

（リサ……!?）

イヴィリタがV・2に集中していた隙に、リサが掴まれていた手を振り払っていた。

そして、シャンッ！　イヴィリタが提げていたデュランダルを抜き、さらにベレッタも抜き取っている。

そして、唖然とする眷属たちを背に――剣と銃を抱え、砂を蹴って走ってくる。

走ってくる……俺の、方へ……！

イヴィリタたち眷属も少しは追うような仕草を見せたが、V・2も発射間近だ。ヘタに手間取れば、噴射炎に巻き込まれてしまう。

リサは――意図的に、そのタイミングを狙ったのだ。

ヤツらが俺の所へ来られない、僅かな、この時間を。

ざぶざぶっ！　と、海水を掻き分けてきたリサに――

「……リ、リサっ……！　よせ、来るな！　何で……何で、来た！」

俺は波に何度かジャマされつつ、鉄格子の隙間から叫ぶ。

そんな俺に、リサは半分は恐怖で泣きながら――

「――ご主人様を見捨てたら、後で夢見が悪くなりますから。安眠は大事です」

かつて俺がリサやフランツを救った時のセリフで、必死に、微笑みを作った。

リサ……！

これは――お前、死に来たようなものじゃないか。

似た状況には、かつて武偵高の地下倉庫で白雪と俺が陥った事がある。だがあの時は、救出に向かった俺に――ヒステリアモードという、奥の手があったんだ。

だが、リサ。お前には……戦う力が、何も……！

「ご主人様、武器をお取り下さい！　ご主人様は『odin』。これさえあればきっと……！」

リサは押し込むようにして、鉄柵の隙間からデュランダルとベレッタを檻に入れてくる。

だが俺はそれを海中で掴む事もできない。２つとも、檻の底へ沈んでいってしまった。

違うんだ。リサ。

俺は、お前が思っているようなヒーローじゃない。

本当は弱い、ただの……ただの高校生なんだ。

ここでだって、武偵憲章10条を唱えて強がっていただけで……

本当はもう、諦めてたんだ。心の奥底では。

砂浜の向こうでは、メガホン越しに眷属たちが言い争うような声が聞こえてくる。

彼女たちは、リサの行動に困惑しつつも――もう、打ち上げを止められないらしい。

V・2発射までは、4分を切っている。その僅かな時間でここに来てリサを再び捕らえ、安全な距離まで逃げる確実な手立てが無いのだ。だから、『odin』に生還のチャンスを与えかねないリサをどうするべきか慌てて話し合っているムードだ。

「逃げろリサ、お前もッ……焼き殺されちまうぞ！」

「メイドが主人のために命を投げ打つのは、義務です」

リサは檻の上に張り付き、恐怖に震える手で、どこか壊せる所は無いかと必死に探している。ずぶ濡れになった白いブラウス、その背中の真上には――今にも3千度の炎を噴き出しそうなV・2のノズルが黒々とした口を開いているというのに。

今は、何でもいいから――

リサを、この場から離さないと！

「――違う！　生きろ！　それ、がッ……義務だ！」

初めて、主人として本気で――溺れる俺が、リサに命じる。心の底から。

それを聞いたリサは、自分がメイドとして認めてもらえた事に感動し……その碧の瞳に溜めていた涙を、こぼした。

「リサは……リサは、遠山様にお仕えできて、本当に幸せでした」

その背後で――

V・2の噴射ノズルが、オレンジ色の輝きを放ち始める。

――リサは――

いま再び、眷属を裏切った。

逃げたんじゃない。

勇気を振り絞って、再び眷属に背を向けたのだ。

リサは、立ち向かったんだ。弱い自分が絶対に勝てないような、強大な組織だが今のそれは、臆病風に吹かれて地下道に逃げ込み、泣いていたあの時とに。たった1人で。今までではダメだったけど、今、この時だけは。勇気を振り は違う。

絞って。

――自分の主人と心に決めた、俺のために。

「……正直に申し上げます。初め、あのブリュッセルの地下道でご主人様に頼ったのは、生きるための算段でした。ですが、共に逃亡していたあの時……あのアムステルダムで、ご主人様が微笑んで下さったから。私と一緒にいて下さって、お誉め下さって、私だけに微笑んで下さったから。だから――あの時。あの時からリサは、ご主人様の事を――」

――トンッ――

という、小さな音が……

リサの話にムリヤリ打たれたピリオドのように、その背中で上がった。

音の意味は、すぐに分かった。

リサも、分かっているようだった。

「……ご主人様。ずっと、よくしていただけて、リサは、幸せ、でした……」

もうほとんど水没した、鋼鉄の檻に覆い被さるように――

鉄柵に片腕を突き入れたまま、リサが倒れてくる。

その背中には――

――孔雀の矢羽根を付けた矢が、垂直に刺さっていた。

心臓を貫くほど、深く。
颱風のセーラ――の、矢だ。
「リサ……！」
俺がその腕を掴んだ時、リサの袖から何かが出てきた。
海水の中で掴んで、分かる。
これは、俺がブータンジェでリサにあげた……折り紙の風車。

（『よくしていただけて』、だって……？）

俺は……

お前に、何もしてやれなかったじゃないか。

子供を追い払って、あと、ただ、こんなものをあげただけじゃないか。

（それをお前、後生大事に……こんな所にまで、持ってきて……）

俺はもう、海の中にいる。

檻は完全に水没した。呼吸はできない。

水面の向こうにはリサ、そしてさらに上で炎を今まさに噴き出そうとしている——何も知らないカツェが乗った、V-2が見える。

——俺は、俺たちは、ここまでなのか。

こんな形で、ここで沈んで、燃え尽きて、消えてしまう運命なのか。

俺は海の中で、もう動かないリサの腕を抱き寄せながら歯を食いしばる。

俺は——

まだ、主人としての責任を果たしていない。

お前に働かせるだけ働かせて、『戦う』という責務を果たしていない。

流れでとはいえメイドを持ったからには、主人として契約を履行しなきゃいけない。

武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ——『絶対』とは『たとえ死んでも』という意味だ。武偵にとって契約とは、約束とは、それだけ重いものなんだ。

（——あきらめてたまるか。あきらめて、たまるか……！）

その想いとは逆に、俺の視界が暗くなっていく。

血中の酸素濃度が低下し、全身の至る所から力が抜けていく。

リサの腕を掴んでいることも、もう、できない。

必死に閉じ続けている口にも、力が入らなくなっていく。そしてとうとう、泡を吐いた俺の気道に水が流れ込んでくる。その感覚すらも、もうウツロだ。

重い。自分の体の、全てが。

瞼すらも、十倍の重さになったようだ。目を、閉ざさざるを得ない。

（……この、遠山桜……）

心臓の拍動が、微弱になっていくのが、分かる。遅く、弱く、さらに遅く

（散らせる、ものなら……）

——そして——

俺の心臓が、その鼓動を、やめた。

俺は……妖刀（ようとう）のセイジと、颱風（かぜ）のセーラの予言通り……

——死んだのだ。

6弾　成層圏（ストラトスフィリア）より愛を込めて

散らせてみやがれ！

――これは――

（……ヒステリア、モード……？）

そうだ。間違いない。

なれている。なれているぞ。

それも、完全に。

これは――ヒステリア・アゴニザンテ。シャーロックに兄さんが心臓を撃たれた時にも発現した、『瀕死（ひんし）のヒステリアモード』だ。

溺（おぼ）れ、心停止し、俺（おれ）は確かに死んだ。

だが人間は心肺停止に陥ってからも、脳死するまで僅（わず）かな時間がある。

その最期（さいご）の瞬間に、俺のＤＮＡが文字通り切り札を切ってきたのだ。

たとえ肉体が死のうと、魂は諦（あきら）めない。

死んでも折れない。それがヒステリアモードだ――！

「……ッ……！」

常人の30倍の神経伝達物質で、意識が覚醒（かくせい）してくる。

俺（おれ）を取り巻く状況は何も変わってないが、動けるぞ。ほんの一瞬なら、きっと。

だが、動けるのは本当に一瞬だけだ。

仮にその一瞬で桜花（おうか）をブチ込んでこの檻（おり）を壊せても、抜け出す動作ができない。

一般論で言えばもう死んでいる俺の体は、ヒステリアモード込みでも、その一瞬の後に全機能を完全に停止してしまうだろう。

だが、迷ってるヒマもない。

だから――

やっぱり、俺の肉体よ。

心臓よ。

お前にも――改めて働いてもらうぜ。17年間ブッ続けで働いてもらったんで、ちょっと休憩（きゅうけい）を与えたが……それももう、終わりだ！

――行くぞ新技ッ。

やれるかどうかは分からんが、きっとできる。

この最期の一瞬を、たった今思いついたこの自己蘇生技に賭けるッ。

それは起死回生の、水中桜花――

（――回天――ッッ!!）

俺は右手で胸に、左手で背中に、全く同じタイミングの桜花をブチ当て――

亜音速2発、合計およそマッハ2の衝撃を心臓のド真ん中で衝突させる。

――バツンッッッッッ――!

こいつは心臓マッサージや除細動器（AED）なんて生やさしいものじゃない。アバラ骨の内側でパンチングボールのように心臓が跳ね回り、暴力的に鼓動が取り戻され、心臓から全身へ再び勢いよく血流が流れ込む。

バクバクと心拍が再開し、筋肉が甦り、海中で俺の瞼も開く。

体は、どこも破損してない。回天はジーサードの『内臓避け（オーガンスルー）』の応用。ある意味、逆技なんだ。衝撃は胸骨の下、肋軟骨の間をスリ抜けさせて、心臓だけに伝えたからな。

すかさず桜花で、この鋼鉄の檻を破壊しようと――

腕を振りかぶった俺は、眉を寄せた。

その必要が――なさそうだったからだ。

檻は壊れている。いや、今まさに壊されていく所だ。

俺が死んでいた間に、檻の格子に突っ込まれていたリサの腕が……メキメキと……

これは一体、どういう事だ……!?

「――私は、神を呪う……」

誰の……声だ。

リサ。お前、なのか？

水越しの小声なので不鮮明だが、確かにリサの声だ。

セーラの矢で殺されたハズの、リサの。

「この力を私に与えた、神を……」

リサの腕は今や、白いケモノの腕へと変貌しつつある。メキメキと膨れ上がり、どんな図鑑でも見た事のないような大型獣のものになっていく。

それが内側から、鋼鉄の格子を押し曲げ、広げ――バキッ！

と、溶接された接合部を弾けさせてしまう。

それを見上げながら――俺は足下のベレッタとデュランダルを拾い上げてベルトに挿し、折れた格子を掴む。

そして檻によじ登りながら、まずは飲んでしまっていた海水を吐き出す。

激しく、咳き込みながらも――

大きく、息を吸い込む。

す、数分ぶりだぜ。息が吸えるのは。死んでた時間も含めて。

『――発射、1分前――ッ！』

慌てながらも、イヴィリタはヒステリーを起こした声でカウントダウンを続けている。

もう止められないV・2の打ち上げを強行し、俺ともどもリサを焼却してしまうつもりなのだ。

雨はもはや、豪雨になっている。

大粒の滴が海面を乱打する轟音の中、白黒する目を、それでも凝らすと……

目の前にいたのは、そこにいたはずのリサではなかった。

「……リ、サ……」

その姿は、もう俺より遙かに大きな――

「ご主人様……リサから、離れて、ください……！　私は、私こそが……なんとか喋ったリサは、人間と狼の中間のような姿で――

「……ジェヴォーダンの……獣……！」

悶えながらも、水平線近くの雲間に輝く満月を見つめている。

その……変貌は、どんどん進行していくところだ。巨大な、狼の方へ。

俺は、これに似た光景を見た事がある。横浜ランドマークタワー。東京スカイツリー。そこでブラドやヒルダが見せた変身に、そっくりだ……！

リサは、ブラドのライバル――ナオ・デ・チーナの船内で聞いた話が、脳裏に甦る。

「……王戦派は、リサの血に伝わるこの力を……知っていたのです。だからイ・ウーでも高い階梯に据えていた。でも……彼らは知らない。リサを獣に変えるのには、2つの鍵が必要だという事を……2つの鍵のうち、『死の淵』という1つしか……知らない……」

――天狼、ジェヴォーダンの獣――

伝説の魔獣の血は、強者に付き従い、そのDNAを集積していくリサの一族にも流れていたのだ。

この変身の様子から、ジェヴォーダンはブラドやヒルダと似た種族と見て間違いない。

となると、ブラドが俺と同じβエンドルフィンで変身する事から、リサも——おそらく、俺と同様に瀕死状態に追い込まれた時に発動する変身条件を持っていたのだろう。

だから——眷属は、リサを死地に追いやるような戦わせ方をし続けていたのか。

どうすればリサが魔獣に変身するのか、その仕組みを解明するための試行錯誤として。

「……リサを禾狼に変えるもう1つの鍵は、満月。月から反射される、赤外線を減衰させたスペクトルの太陽光を……網膜に感受させる事が……最後の、鍵、なのです……っ！」

傷つくことを必要以上に嫌がっていたリサ、ブータンジェで満月の絵を嫌っていたリサ、異常に怯えていた飼い犬や黒豹やカラス、あらゆる動物を従わせる力のある百獣の王——ジェヴォーダンの獣。その肩を持つような発言を祭の時にしていたリサ。

今までの様々な出来事が、ヒステリア・アゴニザンテの俺の脳裏を次々とよぎる。

『——さ、30秒ッ！』

イヴィリタの声の中、苦悶するリサの身長——いや、体長は、5mに至ろうとしている。

「……もう、リサは見てしまいました。あの満月を。間もなく、リサは知性を失い、味方をも喰らい殺す……誰にも制御できない、ジェヴォーダンの獣へと、変わる……！」

「リサ……！」

「……なりたくは、なかった。でも、ご主人様のためになら……私は、この命に代えても、必ずや、この頭上の兵器と差し違えてみせます。さあ、お逃げください。もう……10秒も、ございません……！」

「てください……！」

巨大な金狼と化したリサは——

その眼から、最後の人間の心の証……涙をこぼして、それっきり喋らなくなった。

そこからは1秒ごとに、その巨大な金狼の顔つきが凶暴そうなものへと変わっていく。

まさに、魔獣の貌へと。

『――10秒前！』

だが……

（逃げろ……だと？）

……それはないぞ。リサ。

俺はお前の主人だ。俺を主人にした時、お前は条件を出したじゃないか。

――『リサを苦しめるものから、救ってください』と。

だから、俺は救うぞ。

お前を眷属の手から。

そして、それだけじゃなく――

（お前を苦しめる、そのジェヴォーダンの獣の血からも……！）

俺の全身には――いつしかアゴニザンテだけでなく、ベルセ、レガルメンテ性の血流も行き渡っている。

奪わせてなるものか、眷属よ、ジェヴォーダンの獣よ。

（リサを、奪わせはしないッ……！）

その時――

『――発射（Entzunden）！　全て焼き尽くすのよ――ッ！』

頭上のV・2から、炎が渦を巻いて――噴射されてくる！

俺と――ジェヴォーダンの獣と化したリサが、それを同時に見上げる。

今まさにノズルから下りてこようとしている、オレンジ色の炎は――

四方どこへ逃げても、もう逃げられない。

真下の海中もダメだ。V・2の推進重量は12・5t。自重を持ち上げるまで、V・2は深さ3mの海水なんか全て蒸発させて、浅瀬の砂まで焼き尽くすのだから。

だから――

――バンッッッ！

デュランダルを抜き、足で桜花を放った俺と――同時に、炎を見たリサも動物的本能で同じ判断をして――

推力偏向板と制御翼を躱すように、前後に分かれる形で檻を蹴って飛んだ。

――ほぼ真上、V・2本体の外殻へと。

ケロシンと液体酸素、個体燃料も併用しているらしいハイブリッド燃料が、紅蓮の炎を噴き下ろす。真下の海水が一瞬で蒸発し、水蒸気が爆風のように吹き上げてくる。

それに煽られ、気流に揉まれながら――

ガスッ！　と俺はデュランダルを、リサはツメを外殻に突き立てた。

発射の瞬間のイヴィリタのセリフから考えて、眷属は俺を助けようとしたリサを止めるために射てば――その致死傷と何らかの鍵によってリサが『ジェヴォーダンの獣』に変貌する可能性も考慮していたのだろう。

それを変身と同時に焼き殺すつもりだったらしいが、Ｖ・２の炎は一瞬遅かったのだ。

Ｖ・２の凍てついた外殻に俺はただ剣を刺してブラ下がっただけだが、水蒸気の中から見えてきたリサは――

メキッ、メキメキッ……と、そのツメで鋼板を握るようにして、巨体を固定している。

その翠玉色の眼が――

白煙の向こうから、俺を睨みつけている。

もう、人間の眼じゃない。

動くモノ全てを敵と見なす、まさに魔獣の眼だ。

「……リサ……！」

俺たちを張り付かせたＶ・２が、ズズ……ズズズッ……と、上昇を始める。

表層からバラバラと氷を剥離させ、元の市松模様に戻っていきながら。機体全体を煙で覆った後、地獄の炎から生まれ出るように、真上へ……！

俺とリサが生きていた事に、浜で眷属たちがパニックに陥っているのが一瞬見えて――

セーラが弓を取ったが、イヴィリタやＶ・２は師団と決着をつけるために打ち上げた、眷属の虎の子だ。化学弾頭を搭載しているし、カツェだって乗っている。万が一にも撃墜はさせられない。

眼下に――眷属を残し、機体は上がっていく。

Ｖ・２自身ぐらいの高さまではゆっくりと、その辺りからはぐんぐんと加速しながら。

だが不測の重量が加わったせいか、その軌跡は早くも傾き始めている。海側へ。

「――ッ！」

バスンッ！　という破壊音が上がった。

俺が反射的に身を躱した、Ｖ・２の外殻、その黒い部分から。

緩やかにスピン運動を始めたＶ・２の表面を回り込むようにして、リサがナタのように鋭い爪を並べた前脚で俺をミンチにしようとしたのだ。

その背中に刺さっていた矢はもう無く、傷痕からは赤い煙が細く上がっている。あれは横浜で俺がブラドを撃った時とよく似た光景だ。傷や病気が素早く治るリサは、その高速回復を支える臓器――魔臓を体内に持っていたんだろう。

人間状態ではいまいち機能していなかったようだが、魔獣の姿になった事でその活動が亢進しているようだ。

振り落とされそうになりながらも、そしてそれが飛び降りる最後のチャンスだった事を悟りながらも――俺は、Ｖ・２外殻の白い部分に改めてデュランダルを突き立てる。

白黒のチェック柄をしたＶ・２。

その黒い部分にリサが、白い部分に俺が――しがみついたまま、垂直に対峙する。

豪雨を掻き分けるようにして、Ｖ・２は止めどなく加速していく。

（やった事があるぜ、こういうのはッ……！）

忘れもしない。

イ・ウーで、俺はシャーロックの乗るＩＣＢＭの外殻に飛び移った。アリアを追って。

あの時はアリアが、今はリサがいるから、降りられない。そこは同じだが――状況は、あの時よりも遥かにシビアだ。アリアは張り付いていただけの味方だったが、リサは俺を敵と見なして、攻撃してきているんだから。

大混乱の中、打ち上げられたＶ・２――その航路は初めから予定外のものになっているだろう。

だがこれは弾道ミサイル、ロケットだ。車のように一時停止なんてもちろんできない。火を付けたからには、飛び続けるしか無いのだ。

今、体感だが――時速が、１００㎞を超えた。高度は目測80ｍ。高層ビルの高さ。もう飛び降りれないぞ。行けるのは、上だけだ。行くしかない。この狂った航路をも。

――ヴァオッ――!

という吠え声と共に、2発、3発、リサの爪が、続けてキバが、俺を襲う。

それを躱すたびに――空振ったリサの攻撃がV・2の表面を傷つけ、その性能を奪っていく。

(ダメだ、避けては……!)

乱気流を引き裂き、雲へ向けて飛ぶV・2の上で――俺は眉を寄せる。

このままだ殴らせていては、V・2が破壊されてしまう。

化学弾頭と一緒に墜落したら一巻の終わりだぞ。俺も、リサも、そして多分カツェも。

リサの振りかぶった前脚が、カツェが乗り込んでいった搭乗区画を殴りそうになったので――

「――よすんだリサっ!」

俺はその爪を掠める狙いで、ベレッタを3点バーストで撃つ。爪とは指先。人間もそうだが、通常、動物の指先には神経が集中している。傷つけられるとダメージ以上に激痛が走る部位だ。だから大型の猛獣は眼を、次いで爪を狙うのがセオリーなのだが――

リサは弾道を見切って前脚を引き、3発ともヒラリと躱した。

そしてその動きの勢いを殺さず、V・2の陰に隠れ――

次の瞬間、V・2の裏側から回り込んできて、俺の背に食らいついてこようとする。

「――ッ!」

俺はデュランダルを支点に、秋水気味の後ろ蹴りを――

女の顔を蹴ってはいけないので、リサの肩の付け根に当てて弾き返す。

緩やかにスピン運動するV・2の上で、獣のバランス感覚を持つリサと――

ヒステリアモードの俺が、まるで映画のような空中戦を繰り広げている。

激しい気流で少しでも手足の動きが想定とズレてしまったら、そこでおしまいだ。天下無双のヒステリアモードでも、ずっと最大限の集中力、全身全霊が要される戦いだぞ。

――ズンンンッ――!

と、今度は上下逆さまの水面に飛び込むような衝撃。

戦いに夢中で気付くのが一瞬遅れたが、斜めに上昇を続けるV・2が雲に到達したのだ。

突如として周囲を覆った厚い黒雲――水蒸気の圧力で、俺とリサは揉みくちゃにされる。ガタガタッ！　とV・2の各所も激しい音を上げている。甲高い金属音と共に、半壊していた外殻の一部がパズルのピースのように剥がれた。

不燃材が飛び散り、剥き出しになった内臓のような液体酸素タンク――そこから過酸化水素水タンクか何かへ通るパイプが、僅かに出火している光景が一瞬見える。

（ダメだ、ここで戦っていては……それなら、いっそ……！）

俺はリサを誘導するため、ロッククライミングのように――破損した外殻を手がかりや足場にしつつ、この乱戦でも決して折れない銘剣デュランダルをボルト代わりに刺しつつ、さらに気流を利用して――螺旋を描くように、少しずつよじ登っていく。V・2を。

ボッ――！　という音と共に、周囲が月光に照らし上げられた。豪雨は嘘のように止み、さっきまで湿っていた外気も急激に乾燥したものになる。雲の上に出たのだ。

高度は今や、1kmを超えているだろう。V・2はさらに加速している。時速は500km。新幹線の倍はある。傾いた飛行コースは、洋上を西へ向かっている。明けつつある空は東から藍色を帯び、まるで宇宙空間にいるような錯覚さえ覚える。

――ヴァオオオンッ――！

遠吠えするように咆吼したリサのツメを――

俺は遠距離ではベレッタで、近くでは膝蹴りや横蹴りの桜花や秋水で、精密に誘導する。

V・2の先端部分、すなわち弾頭部分を――解体するために。

星を掠めるように飛ぶV・2の、円錐形をした先端は――俺の狙い通り、少しずつその殻を剥かれていく。俺を狙って振るわれる、リサのツメで。

高度は……もう、イ・ウーでICBMから転落したあの時よりも遙かに高い。速度も、時速800kmを超えているハズ。呼吸は、できたりできなかったりだ。

その、末期的な状況の中――

部分部分、見えてきた。弾頭が。

僅かに見えれば、その設置構造もヒステリアモードですぐ分かる。

外気温は低下し、水分を含む俺の皮膚やリサの体毛には氷の結晶が白く張り

付いている。一方の機体下部では、内部から流れ落ちるように尾を引く……明らかに噴射ノズルからのものではない出火が広がっている。

破壊によってハイブリッド燃料が漏出を起こし、火の付いたそれがオレンジとに長くなっていく。

――いや、金色の光の尾を、V・2に曳かせている。そしてその尾が、1秒ご

（……ッ……！）

見下ろせば、雲海は遙か下。俺たちは、オランダを覆う雲全体が見渡せてしまいそうな高空にいる。目測高度、9km。もうエベレストよりも高高度だ。このままだと、対流圏を抜けて――もうじき、成層圏に至るぞ。

V・2は高度90kmまで上がってから、マッハ2で敵地に降下する兵器。人類史上初めて、宇宙空間に到達した人工物でもあるんだ。半壊しているとはいえ、まだまだ加速し、まだ昇るぞ。

（早く、何とかしないと……本気で、宇宙まで行きかねない……ッ）

――ッ――

リサの咆吼が、聞こえなくなってきている。

地球と宇宙の中間――ここではもう、音を伝える空気さえも希薄になってきている。

ているのだ。

（時速……1000km……ッ……！）

もはやヘタな銃弾よりも早い飛翔体となった、V・2――

その表面で……リサの動きは、鈍ってきている。俺も、身動きが取れない。

2人とも、しがみつくので精一杯になってしまった。

凍てつきかけていたハズの全身が、今度はチリチリと熱くなってきている。

あまりの高速度により、空気と体表面の摩擦による加熱が始まっているのだ。

（……もう、もたない……！）

不完全燃焼しながら漏出する燃料が曳光する金色の尾は、どんどん伸びていく。

まるで宇宙空間のようなそこで、V・2は――

――いつしか、水平飛行に移りつつあった。

リサによる損壊で、V・2の弾道飛行はこれでも想定よりずっと短距離・低高度でその頂点を迎えたのだ。

亜音速の烈風の中、俺は――

既にV・2の先端部分に、デュランダルを突き入れている。

そして柄が震動するのに任せて、化学弾頭の投下・散布用と思われるパーツを破壊していく。さらにワトソン戦でスカイツリーから転落しかけた時のように、柄を握らない方の指で水平桜花を放つ。2度、3度。

香港で見た炸薬筒の爆弾解除を思い出しつつ、決死で行った解除作業は――実り――

シアン化ケントロシンを収めた化学爆弾は、滑り落ちるようにしてV・2から外れた。

風圧に引きちぎられそうな首をなんとか下げて、その行方を見守ると――

化学兵器はV・2の曳く炎の尾の中で、ブドウのように並べられたピンポン玉みたいなガラス容器ごとあっけなく燃え尽きていく。

残留物があったとしても、ここは陸地から遠く離れている上――豪雨と海の上だ。

水で中和されるタイプの化学兵器らしいし、そこはラッキーだったな。

まずは、これで……

俺は、眷属の攻撃を止める事はできた。師団を守る事が、できたんだ。

俺自身は――ここから助かる道があるとも思えないけどな。

（……あとは……）

と、俺は――

――言えているかどうか、聞こえているかどうか分からないながら、語りかけた。

俺を主人と慕っていた、無力だったハズの女の子――

今はその姿を巨大な魔獣に変えてV・2にしがみついている、リサに。

「……いいんだよ、リサ。もういい……」

リサは――翠玉色の瞳で、俺を睨み続けている。

その闘争本能は尽きる事なく、V・2の外殻を躙り寄るようにして俺に迫り来ている。

「俺はもう……何もしないから」

俺は声でというより……心で、語りかける。

音速の際で飛ぶV・2の上では、音は遙か後ろに置いていかれてしまうしな。

弾頭解除のためにベレッタを収めていた俺は、空気との摩擦で今にも燃え上がりそうな左手を差し出す。俺に向けてキバを剝く、リサに。

――ガブゥゥゥッ――

何本もの刃物が一斉に突き立てられるような激痛が、俺の左腕に走り――

「もう、誰の事も裏切らなくていい。リサ。もう……俺の手を離すな」

食らいついた、リサは……

そのまま俺の腕を食いちぎろうとした、その寸前……

（……）

そうすることを、やめた。

その動きは――獣と化したリサが、もう俺を殺したところで自分も助からないだろうと本能で悟ったためかもしれなかった。

だが、俺は信じたい。

俺の心がリサに通じて――

リサに残る人間の心が、そうさせたんだと。

（リサ……）

いつの間にか微笑んでいた俺の目を、ジッと見つめていたリサは――

そっと……俺の腕から、口を外す。

まるで人間の心を取り戻したかのような、穏やかな動作で。

「……よし。いい子だ、リサ。さあ……帰ろう。君の国へ」

俺は銃声すら薄れるこの空間で、ベレッタを連射した。水平飛行になっているV・2の主翼の角――制御翼を、旋回するような角度に変えるために。

金色の尾を曳くV・2は燃料の不完全燃焼のため減速し、降下を始めながら、雲の上を大きく旋回していく。

俺とリサを照らす月光と陽光の角度も相対的に変わり、陰になっていたリサの姿が再び少しずつ明るく照らし出されていく。

魔獣の姿――巨大な金狼の姿になっていようと――

リサは、美しかった。

「キレイだよ、リサ」

俺がそう呟いた時、サァァァ――と、水面を切るようにV・2が雲に再突入した。

天国の絵に描かれるような水蒸気の中、高度は更に下がる。1秒ごと、俺たちの上空にある雲が厚くなるにつれ、天空からの光は遮られ――辺りは金色に――今やV・2の何倍もの長さで曳かれている、漏出しながら燃焼するハイブリッド燃料の光の色へと変わっていく。

そして、パツパツッ、という水が周囲で弾ける音が風の音に混ざり、すぐに

俺たちは雲の下、豪雨のまっただ中へと墜落していく状態になった。
もう伏角は30度を超えた。V・2は重力の後押しを得て、改めて加速しつつダイブしていくところだ。
――バスバスバスッ――!
俺は、背後の飛行舵を改めてベレッタで撃つ。それで旋回をやめさせて、東と思われる方角へV・2を飛ばすが……
豪雨と暗闇の向こうに、浜は見えないのだ。
俺たちは、大西洋はるか沖の上空にいるのだ。
V・2は辿り着けないだろう。陸地までは。
海上への墜落は、免れない。
方向も……眷属のアジト・竜の港の方へと方向転換したつもりだったが、分からない。
ヒステリアモードとはいえ、あれもこれも上手くはできないものなんだな。
金色の流れ星になったV・2は、今やほぼ真下に向けて落ちている。
速度は上がっていく。再び音速に至るような勢いで。

このまま落下すれば……V・2は粉みじんだ。俺も、リサも、カツェも。
その中で――
……オオオオオオ――――ン……!
リサが――百獣の王・ジェヴォーダンの獣が。
音を伝えるのに十分な空気の濃度があるここで、何かを、喚んでいる……?
そんな鳴き声を上げた。2度。3度。
咆吼に被せるようにして、ばんっ!
外れて――大気圏突入カプセルみたいな形状の搭乗席が、中に見えた。
とうとう攻撃を諦めたらしいカツェが、非常脱出の手順に入ったらしい。
いうか、今まで諦めてなかったのが逆にすごいよ。
カプセルの小窓からナナメに見えるカツェは、膝を抱えるような体勢でV・2に乗っており――内部のレバーを急いで引っ張っている。
そして、ばさっ……!
空にカプセルを引っ張り出すためのパラシュートが広がり……かけたところで、それを見たリサが、俺の肩を甘噛みした。
そして俺をV・2の表面から引き離して、V・2から飛び出しかけていたカ

ツェの操縦カプセルにツメを立てている。
「……！」
デュランダルは離さずに済んだが――
V・2を生き物と見立てると、リサは内臓のような物には飛びつく習性があるらしい。
俺を咥えたリサがしがみつくカプセルは、ずるっ……！　と、V・2から外れて――
空中に転げ出る。
「……っ……！」
カプセルの窓からは、カツェが眼帯のない方の目をまん丸に見開いてこっちを見ている。
それと目が合ったので、俺はとりあえずウインクで挨拶しておいた。
……ばさばさばさっ……！
豪雨の中、逆卍マークの3連パラシュートが開いていき……
俺たちに悪夢のような体験をもたらしたV・2は、眼下へと遠ざかっていく。
バッ、と角錐状水蒸気の輪がその周囲を抜けている。落下速度が音速に至ったようだ。

だが、その瞬間の相対速度から見て――
このパラシュートによる降下も、危険な速度だ。俺とリサの重量がかかっているせいで、減速しきれていない。このままだと……リサはどうか分からないが、俺とカツェは着水の衝撃で即死するだろう。
だが、重力には――地球が相手では、ヒステリアモードでも太刀打ちできない。
歯を食いしばって、迫り来る黒い海面を凝視していると……
――グッ、グググッ……！
海面そのものが……
と、恐ろしいサイズの何かに持ち上げられてきた。
イ・ウーの時にも見たような光景だが、あれより小さいそれは――
おい……
おいおい。
マジかよ。
（……クジラ……!?）

地球最大の動物・シロナガスクジラが、今まさにブリーチング——
海から、ジャンプしてこようとしてる。俺たちを迎えるように。
V・2とすれ違うように、大きく、大きく、水を跳ね上げて宙に飛び出てき
たその巨体めがけて——バッ——！
俺を咥えたままのリサが、降下するカプセルから飛び降りる。
そして——あっ、と思うヒマもなく、曲線を描くように空中にあったクジラ
の横っ腹に接触した。ちょうど、滑り台の上に落ちるように。
「——ッ……！」
ざあ——っ——！
と、海水をまだ纏っていたクジラの腹を——
垂直に落ちていたらクジラ共々死んでいたような速度で、リサはナナメに滑
降していく。そして尾ひれの付け根辺りで、クルッとその体を丸めて——
俺を抱えるような姿勢で、飛沫を上げて着水してみせた。
（……これは……！）
俺がかつて、ブータンジェでリサに話した事がある……
カツェと共に、飛行船・ツェッペリンNT号から転落した時と同じ、落ち方。

垂直に落ちるのではなく、ナナメに落ちる。そうやって俺が転落から命拾い
できた話を、リサは覚えていたのだ。そして、この場にいた動物——クジラを
操って、俺たちが無事に着水できるよう協力させたのだ。『百獣の王』として。
それは、つまり——
今や、リサは人の心を取り戻しているという事だ。俺の話を思い出せていた
のだから。
ブータンジェの祭で見た、ジェヴォーダンの獣が人間に心を開く方法……ち
ょっと思い出すのも恥ずかしいが、それが上空で俺との間に成立していたのか
もしれない。
「——はぁっ！」
リサに咥えられたまま、いったん海中に潜ってから浮かび上がった俺は……
犬かきで泳ぎ始めたリサに放してもらい、その金色の毛並みを掴んで背中に
上がる。
俺たちの重さから解き放たれて急減速できたらしい、カツェのカプセルは——
——どうやらギリギリ崩壊せず降下できたようだ。着水も想定して造られていた
物らしく、海に戻ったクジラが立てた荒波に揉まれつつ、少し離れた海面に浮

かんでいる。

空には厚い雲があったが、雨はほとんど降っていない。

豪雨を降らせる雲が、風で西へ移動したらしい。

その風の中、リサは犬かきでカツェのカプセルへと泳いでいく。俺を背に乗せたまま。

そしてカプセルに泳ぎつくと、グルルルルゥ……と唸りながら中を覗き込んでいる。

中で冷や汗をダラダラかいて、窓から外を見上げるカツェは……何か、叫んでる。読唇させてもらうと、『何なんだお前らは！』だそうだ。ごめん。もう俺にも分からないや。

――見れば、カツェのカプセルのハッチはひしゃげており、内部からは開かなさそうだ。とはいえ気密は守られているらしく、浸水などは見られない。そもそも空気の薄い上空を飛ぶ装置だったので、酸素供給のシステムもあるんだろう。

『……し、し損じちまったぜ……』

などとボヤくカツェはカプセル内であぐらをかいて、悔しそうにこっちを見上げている。だが、カプセルを操縦するような素振りはないな。見回しても、発動機らしきものはない。これはただ漂流するだけのカプセルらしい。

空から生還できたのは良かったが、今……困ったことに、俺たちは方角を見失っている。

リサも周囲を見回して、どうすれば岸に辿り着けるのか考えているような仕草だ。

だが、そこに――

「……？」

俺のヒステリアモードの感覚が、違和感を捕らえた。

空だ。

月や太陽がどこにあるのかは分からないが、天体の明かりでボンヤリ光る雲、その下を……ヒラヒラと……木も無いのに、木の葉のようなものが舞っている。

それも1枚や2枚じゃない。無数に、飛んでいる。

（木の葉じゃないぞ……蝶……？）

蝶だ。

雲の下で蝶が見事な列をなし、強風に乗るようにして一斉に飛んでいる。
あれは……
リサとブータンジェでも見た、クロケットマダラ。
この季節、海峡を越えてオランダから遙かイギリスまで飛ぶという、渡り蝶だ。
つまり――あれが飛んでいく方向がイギリス。飛んできている側が――オランダ。
分かるぞ。あの蝶のおかげで。だいたいの方角が……！
「――リサ。あっちだ。あっちが、お前の国なんだ」
指さしてそう告げると、リサはカップセルをビート板のようにしつつ、後ろ脚で犬かきを始めた。とはいえ、その動きはあまり上手くない。
一応は陸の方へ向けて動き始めているのだろうが、岸が全く見えない事を考えると……陸まで最低でも10㎞はある。リサの力だけで、この速度で帰れるとは考えにくい。途中でリサが元の姿に戻れば、そこで詰む事になりかねないしな。
一難去ってまた一難の連続、どこまでも連なってくるピンチに眉を寄せてい

ると――

（……？）

潮の流れが、変わってきている。

岸へ向けて、不自然なほどに上手い具合の流れになってきてるので……カプセルの中を覗いてみると……そこではカツェが目を閉じ、空中を撫でるような仕草をしていた。

S研的な事には疎い俺だが、その行為の意味は分かる。

カツェは水を操る、厄水の魔女。

俺たちが方角を示したので、生き延びるためにカプセルを岸側へ導いているのだ。この場の海流を操って。

「――リサ。行き先は分かってるね？　『竜の港』だ。カツェもどうやら、そこがご希望らしいし」

俺はリサのピンと尖った耳を撫でてやりながら、そう語りかける。

「君のご主人様は、逃げない」

この黒い海の向こうに、俺の仲間がいるんだ。

俺と同じ裏切り者の汚名を着せられて、敵に囚われた仲間が。

「I'll be back――ジャンヌを助けるぞ。メイドの君も、手伝ってくれ」

有名な映画のセリフと共に――

俺は、胸の中で武偵憲章1条を暗誦する。

――仲間を信じ、仲間を助けよ。

それを完遂するぞ。今、本当の意味で。

Go For The Next!!!

あとがき

……シャンシャンシャンシャン……

鈴の音と共に！　今年も！　赤松サンタの季節がやって参りました！

今回も、この小説16巻・コミック版9巻・緋弾のアリアAA7巻の一斉発売！

アリアAAの7巻では、かなめの登場に加えて……本編小説ではまだイラストになっていない金三ことジーサードの姿もチラッと描かれてます。こいつは必見ですぞ！

確認してみたところ、この小説は2巻、5巻、8巻、11巻、キャストオフ・テーブル、16巻と、これで6年連続でクリスマスに刊行させていただいております。

私が小学校5年の時の文集で『将来なりたいもの』に『サンタクロース』と書いていたのが、今にして思えばちょっとした予言書になっていたのですな。

6年の文集を見たら『将来なりたい職業』に『戦上』と書いてたので（小6にもなって何書いてんだ私）、そっちも実現してしまう時に備えてマッチョに

なっときましょうかね。　ていうかこれは『ドラゴンクエスト』の影響ですな。

職業と言われてゲーム内の職業を思い浮かべてしまうあたりに、赤松少年のアレな感じがうかがえます。

さて、ゲームといえば、ステキなお知らせがございますよ……！

来年、バンダイナムコゲームスさんより『超ヒロイン戦記』というゲームが発売される予定になっております。

こちらはジャンルの垣根を超えて集まったヒロインたちが戦うシミュレーションRPGなのですが、そこになんと！　本作・緋弾のアリアのヒロインたちも参戦するのです！

私も監修させてもらいましたが、アリアたちがそれはそれはカッコ良く&可愛く動いてました。もちろん声優さんたちのボイスもバッチリ入ってましたぞ！

いやー嬉しい！

ハードはPlayStation®とPlayStation®Vita対応で、２０１４年2月6日に発売予定となっております。詳しくは、ゲームの公式ホームページをチェックして下さいね！

今年は『ガンスリンガーストラトス』で二丁拳銃を撃ちまくったり、幼女先

輩のいない隙を見計らって『アイカツ！』に勤しんだりと――ゲームセンターをエンジョイしていた赤松ですが、来年はさらにゲームライフを満喫できそうです！

……だ、大丈夫ですよ？　『ゲームは1日1時間！』で、キッチリ原稿も書きますからね。

ではまた、次はオランダにチューリップが咲く頃に――本屋さんでお会いしましょう。

2013年12月吉日　赤松中学

祝!! アリア16巻♡

■今回は新キャラがたくさん登場するのでキャラデザがとても楽しかったです！気に入っていただけると嬉しいなーと思いつつ、この辺で！

また次巻でお会い致しましょう！！